江南町文化財調査報告　第11集

丸山遺跡

社会福祉施設　「江南療護園」　建設にかかる
埋　蔵　文　化　財　発　掘　調　査　報　告

1996

埼玉県大里郡江南町教育委員会

口絵 1

断層面Aトレンチ

断層面アップ

序

おちついた農村景観をよく残す江南町も、近年の急速な都市化の中でかつて広がっていた平地林と田園風景は一変しつつあります。また、都市整備等の、生活環境改善に加え、安心して暮らせる世の中をめざし、社会福祉環境を整備することが期待されています。このたび、野原地区に建設されることになった高齢者療護施設もそのような福祉施設の一つと聞いております。

江南町野原地区には「踊る埴輪」を出土した古墳を始め、中世の居館跡である「増田館跡」、そして館跡内に建てられた古刹「文殊寺」などの遺跡や古寺が多く遺り、当地が古代から栄えてきたことを教えてくれます。施設建設地となった丸山遺跡でも縄文時代から奈良・平安時代の遺跡が見つかり、住居倉庫を中心とする古代の村があったことがわかりました。計画的に配置された建物跡から古代の村の中でも、郷長等の住まいした中心的な村と推定されています。

古代男衾地方がどのようであったかは以外と知られてないだけに当時の「里・郷」の実態を考える上で貴重な資料を得ることができました。本書が、郷土研究の書として、また遺跡保護・教育普及の資料としても広く活用されることを願います。

刊行に際し、発掘調査にご尽力いただいた社会福祉法人江南会及び県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、関係者の皆様には厚くお礼申し上げます。

平成８年３月

江南町教育委員会

教育長　岡　部　　進

例　　言

1、本書は埼玉県大里郡江南町大字野原地内に計画された社会福祉施設「江南療護園」建設にかかる事前の埋蔵文化財発掘調査報告である。本書は江南町文化財調査報告　第11集としている。

2、遺跡名は調査地の地名からとった。　「丸山遺跡」　（江南町037号遺跡）

3、発掘調査は事業主体者である社会福祉法人江南会より依頼を受け、江南町教育委員会が、平成6年度国庫補助事業として実施した。発掘調査の期間は平成6年10月1日から平成6年12月22日まで実施した。整理報告作業は平成7年度事業として実施した。

4、発掘調査の事務運営は、江南町教育委員会の新井　端・森田安彦が担当した。また、出土品の整理及び図の作成・写真撮影は遺構・遺物とも両者が中心となって実施した、本文については特にことわりのない限り新井が執筆している。

5、本書に掲載する遺構測量図の内等高線・座標表示のあるものは現地測量及び写真測量を図化・トレースしたもので、業務は中央航業株式会社に委託した。

6、本遺跡に関する遺物及び図面等資料は江南町教育委員会が保管している。遺構については竪穴式住居(SI)　堀立柱建物跡（SB）　遮蔽物（SA）　土壙（SK）等の略記号を用いている。

7、発掘調査から本書の刊行までには多くの方々・研究機関からご教示、ご協力を得た。
列記して感謝の意を表したい。（順不同、敬称略）

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課　　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
柳田　敏司　　堀口　萬吉　金井塚　良一　　鈴木　敏昭　　酒井　清治　　鳥羽　政之
村松　篤　　宮島　秀夫　木村　俊彦

［補助員］
（発掘現場）　新井キヨ　大塚宏子　梶　一夫　樋村暁治　大島君江　矢島福太郎
上杉和助　桃園正志　大島ヨシ　上杉しま子　野沢キヨ　田中きの　寺山千代
水野とみ　橋本仲子　水野キヨ　田中リン　田島直子　長嶋和江　野沢博二
山崎トヨ子　永井智教

（室内整理）　新井芳江　上杉文子　大島安子　小澤三春　神谷君子　志村もと子
竹澤和子　橋本紀子　福島和子　松田清美　桃園正志　関口慶久

目　　次

序
例　言
Ⅰ　調査の契機と経過 …… 1
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 3
Ⅲ　検出された遺構と遺物 ……10
　1、検出された遺構 ……10
　　a．竪穴住居跡……10
　　b．掘立柱建物跡……28
　　c．その他の遺構……40
　　1）遮蔽施設
　　2）道状遺構
　　3）土　壙
　　4）炉　穴
　2、検出された遺物 ……52

Ⅳ　地震跡について ……59
　1、発見の経緯
　2、断層の位置
　3、地形と地質
　4、層序（第50図）
Ⅴ　ま と め……61
　1、出土遺物の概要と遺構の変遷
　2、堀立柱建物の構成と変遷
　3、遺跡の性格
図　版

挿図目次

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡
第2図　周辺部の発掘調査遺跡（各報告書より転載）
第3図　荒神脇遺跡第1・2号堀立柱建物遺構・他
第4図　周辺地域の遺跡（既調査地点をはめ込み）
第5図　丸山遺跡全体図（1/400）
第6図　丸山遺跡第1・2・3号住居跡平面図(1/60)、同2・3号カマド土層断面図（1/30）
第7図　丸山遺跡第1・2・3号住居跡出土遺物分布図
第8図　丸山遺跡第4号住居跡平面図（1/60）
第9図　丸山遺跡第4号住居跡出土遺物分布図
第10図　丸山遺跡第5号住居跡平面図(1/60)、同カマド跡平面図（1/30）
第11図　丸山遺跡第5号住居跡出土遺物分布図
第12図　丸山遺跡第6号住居跡平面図（1/60）
第13図　丸山遺跡第6号住居跡出土遺物分布図
第14図　丸山遺跡第7号住居跡平面図(1/60)、同カマド跡平面図（1/30）
第15図　丸山遺跡第7号住居跡出土遺物分布図
第16図　丸山遺跡第8号住居跡平面図(1/60)、同カマド跡平面図（1/30）
第17図　丸山遺跡第8号住居跡出土遺物分布図
第18図　丸山遺跡第9号住居跡平面図(1/60)、同北カマド跡平面図（1/30）
第19図　丸山遺跡第9号住居跡出土遺物分布図
第20図　丸山遺跡第9号住居跡東カマド跡平面図（1/30）
第21図　丸山遺跡第10号住居跡平面図(1/60)、同カマド跡平面図（1/30）
第22図　丸山遺跡第10・11号住居跡出土遺物分布図
第23図　丸山遺跡第11号住居跡平面図（1/60）
第24図　丸山遺跡第12号住居跡平面図（1/60）
第25図　丸山遺跡第12号住居跡出土遺物分布図
第26図　丸山遺跡第1号堀立柱建物跡平面図（1/3）
第27図　丸山遺跡第2・3号堀立柱建物跡平面図（1/60）
第28図　丸山遺跡第4・5号堀立柱建物跡平面図（1/60）
第29図　丸山遺跡第6・7号堀立柱建物跡平面図（1/60）
第30図　丸山遺跡第8号堀立柱建物跡平面図（1/60）
第31図　丸山遺跡第9号堀立柱建物跡平面図（1/60）
第32図　丸山遺跡第10号堀立柱建物跡平面図（1/60）
第33図　丸山遺跡第11号堀立柱建物跡平面図（1/60）
第34図　丸山遺跡第12号堀立柱建物跡平面図（1/60）
第35図　丸山遺跡第13号堀立柱建物跡平面図（1/60）
第36図　丸山遺跡第1号土壙・第1・2号炉跡平面図（1/60）
第37図　丸山遺跡第1・2・4号住居跡出土遺物実測図(1/3)
第38図　丸山遺跡第3号住居跡出土遺物実測図（1/3）
第39図　丸山遺跡第5号住居跡出土遺物実測図（1/3）
第40図　丸山遺跡第6・7号住居跡出土遺物実測図（1/3）
第41図　丸山遺跡第7号住居跡出土遺物実測図（1/6）
第42図　丸山遺跡第8号住居跡出土遺物実測図（1/3）
第43図　丸山遺跡第9号住居跡出土遺物実測図（1/3）
第44図　丸山遺跡第9号住居跡出土遺物実測図（1/3）
第45図　丸山遺跡第10・11・12号住居跡出土遺物実測図(1/3)
第46図　丸山遺跡第12号住居跡出土遺物実測図（1/3）
第47図　丸山遺跡出土遺物実測図（1/3）
第48図　丸山遺跡出土遺物実測図（1/3）
第49図　丸山遺跡出土遺物実測図（1/3）
第50図　丸山遺跡断層土層図　1/50
第51図　丸山遺跡遺構変遷図（1～4期・4期の集落景観想定）

図版目次

図版1　野原東部地区垂直写真（1965年撮）
図版2　丸山遺跡調査区垂直写真
図版3　丸山遺跡第1・2・3号住居跡
図版4　丸山遺跡第5・6号住居跡
図版5　丸山遺跡第7住居跡
図版6　丸山遺跡第8号住居跡
図版7　丸山遺跡第9・10号住居跡
図版8　丸山遺跡第11・12号住居跡
図版9　丸山遺跡第1・2・3・4・5号堀立柱建物跡
図版10　丸山遺跡第6・7・8・9号堀立柱建物跡
図版11　丸山遺跡第10・11・12号堀立柱建物跡
図版12　丸山遺跡第1～13号堀立柱建物跡
図版13　丸山遺跡第1・2号炉跡
図版14　丸山遺跡第1・2・3号住居跡出土土器・鉄製品
図版15　丸山遺跡第5・6・7号住居跡出土土器
図版16　丸山遺跡第7・8・9号住居跡出土土器
図版17　丸山遺跡第7号住居跡出土瓦
図版18　丸山遺跡第7号住居跡出土瓦
図版19　丸山遺跡第9・10・11号住居跡出土遺物
図版20　丸山遺跡第12号住居跡

表目次

第1表　遺構一覧表
第2表　出土遺物観察表

付　折り込み図「遺跡全体図」1：200

Ⅰ　調査の契機と経過

社会福祉法人江南会による「江南療護園」の建設計画の話が平成５年４月に教育委員会にもたらされ、建設予定地が周知の遺跡内であったことから取扱について協議が始まった。当初の協議段階では建築計画と並行して社会福祉法人の認可申請も提出されており、工事着手の時期についても流動的であった。そのため用地内の確認調査を行い、遺跡の保存状態や遺構の性格・規模等を把握することとした。６月に実施した確認調査の結果、平安時代の竪穴住居跡が分布することが判り加えて、保存状態も良好であることが確認された。しかしこれは用地の全域に渡ってではなく、遺構の分布は南東側に限られ、用地全体の約３分の１ほどの面積であった。用地の西側部分を占め、丸山のその頂き付近まで過去の土採りで大きく掘削されてしまったため、遺物出土の伝承はあったものの遺構面はまったく存在していなかった。北側は谷地形をしており、現地表下1.2～1.5mほどの谷地形が埋没していた。堆積する黒色土中には台地上からの土器片の流入が認められたが遺構は存在していなかった。

この結果に基づき工事計画のなかで保存の可能性を模索していた。11月には設計図面を広げての協議がもたれた。基本的に用地を開削して地盤を下げる設計となったため。遺構の保存はまったく不可能であることが確認され、すべて記録保存とすることに片向いていった。あらたに問題となったのは調査予算であるが、事業者の意向として事業自体が高い公共性を帯びており、また事業経費の大部分を補助金と寄付でまかなうことから発掘調査自体を補助事業としてできないかというものであった。

当初より県教育局生涯学習部文化財保護とも協議を進めていたので可能性について研究していただくこととした。その結果平成６年度の国庫補助事業として実施することが決まり、平成６年10月１日より12月22日までの予定で現場調査を開始した。発掘調査は江南町教育委員会の直営事業として実施し、表土除去等の一部作業で事業者より協力を得た。

整理報告作業は平成７年度事業として実施している。

調査の組織

主体　江南町

事務局　江南町教育委員会

教育長　岡部　進

教育次長　茂木　弘之（前任）

橋本　安行（後任）

専門員　大久保光司

主　任　新井　端

主　任　森田　安彦

調査経過について―日誌抄―

平成６年９月25日　重機による調査区表土の除去を始める。

10月１日　発掘調査開始、作業員はいる。

10月20日　竪穴住居跡12軒　掘立柱建物10棟確認

11月７日　遺構すべて確認する建物の３分の２終了

11月25日　掘立柱建物13棟確認

11月30日　遺構全体測量

12月４日　遺構面土地の段差に注目

12月15日　地質の専門家による断層の鑑定

12月22日　現場作業終了　現場事務所撤去

平成７年８月　整理報告作業開始　水洗い・注記　実測図面編集を始める

９月　水洗い・注記作業を継続する

10月　復元　接合　遺構実測図トレースを開始する

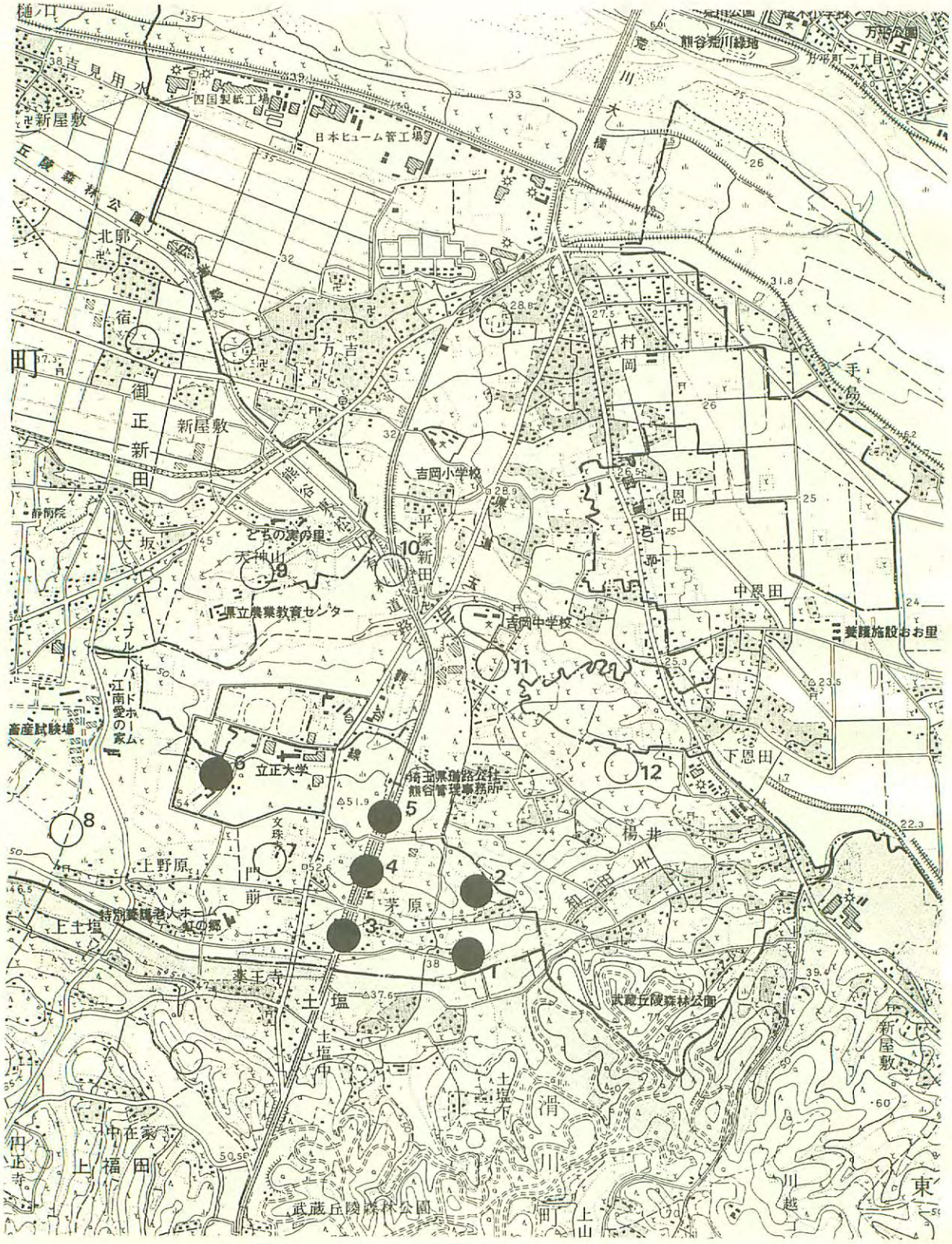
11月　復元　接合　遺物実測図取り始める

12月　接合　遺物実測図

１月　版組み　本文原稿入稿、１

２月　本文原稿入稿、２

３月　印刷



○ 代表的な遺跡　　● 奈良・平安時代の遺跡

1．丸山　2．丸山浦　3．熊野　4．荒神脇　5．下新田　6．鹿嶋　7．元境内
8．野原古墳群　9．向原　10．万吉下原　11．前原　12．瀬戸山古墳群

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡

II　遺跡の立地と環境

1、遺跡の立地

丸山遺跡は江南町野原地区に所在します。ここは江南台地の南端、比企丘陵との接点に位置します。比企丘陵との境界部には和田川が東行し狭隘な沖積地と開析谷が発達しています。大地形をみると北へ約1.5kmで江南台地を下り沖積低地へ至り、さらに約2kmで荒川に達します。東側も同様に台地を下り沖積地へ至ります。西側は、和田側を挟んで台地と丘陵地が回廊のように連続しています。

江南台地は下末吉面に対比される河岸段丘とされ、さらに下位には基盤の新第三紀層に段丘礫層が不整合のかたちで乗っています。下末吉層は灰白色に粘土化しており川本粘土層とも呼ばれ、上位にはチョコ帯を挟んでローム層が発達しています。ローム層は新期ローム層と大里ローム層に分層され、大里ローム層は約2万年以降とされています。

2、歴史的環境

野原地区では、旧石器時代以降の遺跡が分布しています。江南町鹿嶋遺跡では22,000年前に遡るとされるナイフ形石器が発掘されている。本遺跡内では旧石器時代と考えられる黒曜石剝片が出土した。

縄文時代の遺跡は4箇所あり、鹿嶋遺跡内で早期撚糸文期の竪穴住居跡が発見されている。江南町宮脇遺跡でも同時期の竪穴住居跡が発掘された。前期以降の遺構はまだ確認されていないが、遺物の散布は晩期まで採取されている。なかでも晩期終末の浮線網縄文系土器は江南町唯一の晩期資料である。

弥生時代の遺構は確認されていないが、鹿島遺跡では有孔磨製石鏃が出土していることから今後の発見も想定される。

古墳時代になると遺跡の数も調査例も増加し、熊谷市前原遺跡では前期の集落が、同じく熊谷市の万吉下原遺跡では方形周溝墓が調査されている。また、野原地区とその周辺では野原前方後円墳を擁する野原古墳群(23基)・瀬戸山前方後円墳を擁する瀬戸山古墳群(35基)等が所在し、その周囲には過去の調査で74軒の竪穴住居跡が確認された本田東台遺跡のような大規模な集落が発達しているものと考えられる。本地域には平成6年度までに76基以上の古墳の所在が判明している。

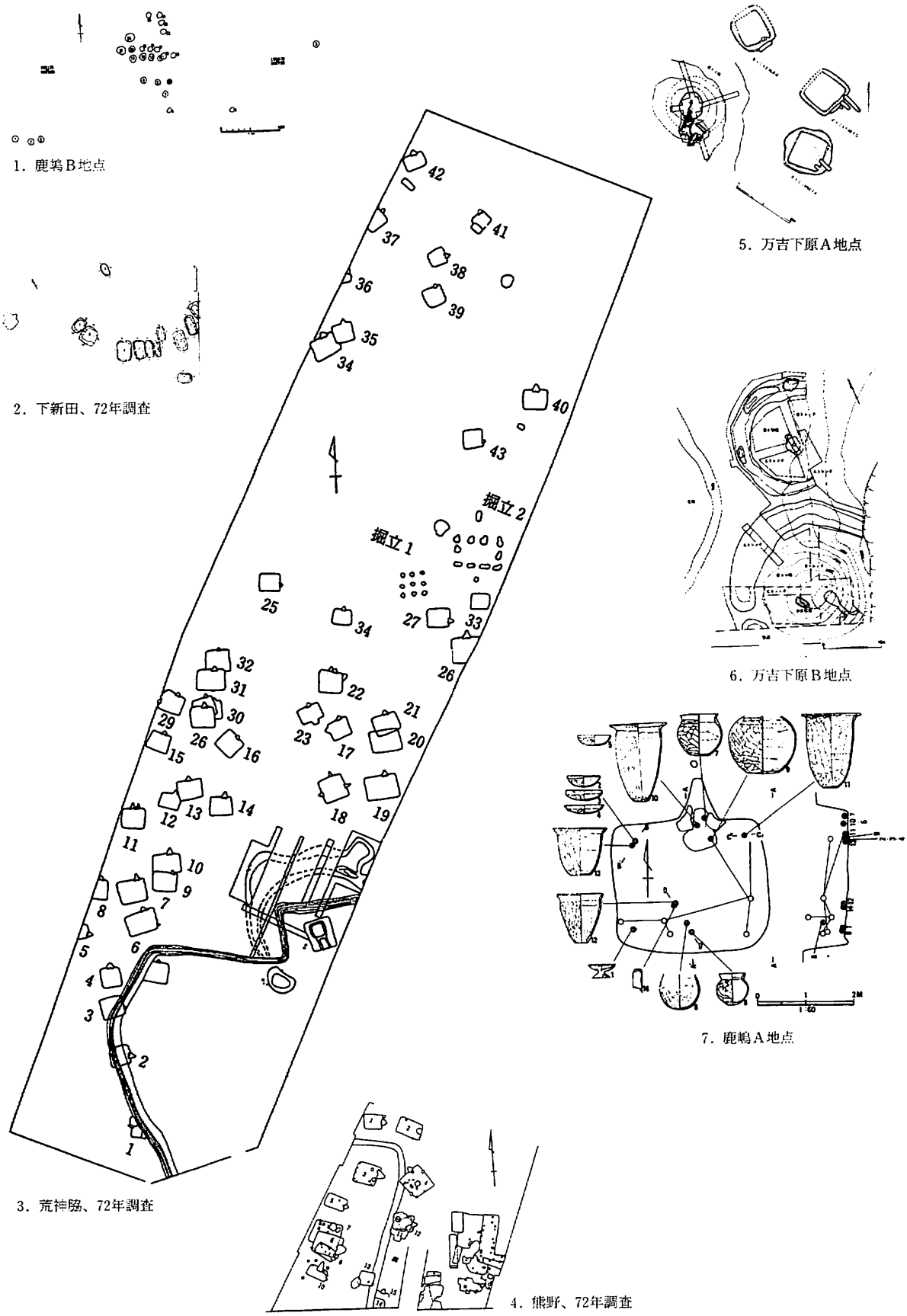
奈良平安時代になると古墳時代の集落を元に、新たな場所まで集落が拡大していく。この様子は本遺跡や荒神脇遺跡・宮脇遺跡・下新田遺跡・鹿嶋遺跡・元境内遺跡等から窺われる。また、集落出土の遺物としては稀な馬具や牧に関する遺物が近隣の滑川町大沼遺跡(兵庫鎖-9世紀前葉)・大里村円山遺跡(「有」焼印)から出土している。これらの遺物や出土遺跡の特殊な性格は、この地域を通過すると考えられている東山道武蔵支路との関係が想定されている。

信仰にかかる遺跡に野原古墳がある。経塚にも利用されたらしく、鋳銅製の宝冠阿弥陀像が出土している。本像は紀州の那智経塚にも出土例があり、11～12世紀頃の畿内製の小金銅仏と推定されている。さらに和田川の上流部には郡内でも中心的な宗教センターとしての役割を持っていたと推定される寺内廃寺(花寺)が所在している。

中世の野原地区には実態の不明な能満寺の伝承があり、中世後期に増田四郎重富が居館を置き、後に文殊寺の建てられた増田館跡が鎌倉道と伝えられる現県道に面して残っている。

3、発掘された奈良平安時代遺跡の概要(第2図)

鹿嶋遺跡は和田吉野川に注ぐ大支谷の一つに面した右岸台地上に位置している。遺跡の大半は立正大学校地に相当し、同校遺跡調査室が継続的に発掘調査を手がけている。現在までに2軒の竪穴住居跡が調査されている。1号竪穴住居跡は3.3×2.7m北側に竈を持ち、火災焼失したらしく土師器坏・甕・甑・高坏・壷等がほぼ完形のかたちで床や竈から出土している。出土土器から7世紀後半～8世紀初頭頃と推定される。第2号竪穴住居跡も同様に小規模で火災焼失しており、出土土器から8世紀前半に位置づ



第2図　周辺部の発掘調査遺跡（各報告書より転載）

けている。また時期が不明だが直径１～1.5mの円形土壙が26基発見されている。

下新田遺跡は和田吉野川に注ぐ小支谷に面した右岸の台地上に立地する。有料道路の建設に伴い調査されており、竪穴住居跡１軒が見つかっている。１号竪穴住居は4.2×3.3mの方形で北東部に張出し部が付けられている。遺物は土師器坏と須恵器碗と少ないがかなり時間幅があり８世紀前半から９世紀代に及ぶとされる。本遺跡でも長方形土壙12基が円弧を描くよう配置され見つかっており、長さ４m・幅1.8m程と規模が大きい。出土遺物はないが、墓壙の可能性が指摘されている。

荒神脇遺跡は、下新田遺跡とは小支谷を挟んで向かい合うが大半の遺跡部分は和田川に注ぐ支谷に面している。有料道路・町道の建設で小支丘上の中央部分が発掘されており竪穴住居跡46軒、掘立柱建物跡２棟が検出されている。住居跡等の遺構は調査区の全域に分布するが北側の集中区とやや空間地をあけた南側に分布しており、南側の分布密度が高い。この帯状の空間地は東西方向で竪穴住居とほぼ同じ方向を示していることから、後背地としての遮蔽地や通路等の境界としての意識があったと考えることができる。竪穴住居跡は３軒重複する例や３基の竈を持つ例があり三時期以上の変遷が推定される。出土遺物には南比企産の須恵器や末野産の須恵器がみられるが須恵器坏の大半は南比企産である。土師器には甕と坏があり坏は北武蔵型である。９号住居跡からは「長眼」または「長眠」と読める線刻文字の刻まれた長頸瓶が出土している。また、「廣」「白」「田上」と判読される墨書土器も出土している。１号掘立柱建物は２×２間の総柱建物で柱穴規模は直径70cm、深さ60cm程であり、柱間はややばらつきがあるが1.8mである。床面積12.96m²を測る高床倉庫と考えられている。２号掘立柱建物は３×２間の側柱建物で桁行7.2m、梁行5.2m、床面積は37.44m²を測る。柱穴の遺存状態から最低３回の建替があった模様である。出土土器から集落は８世紀初頭から９世紀後半頃までに営まれたものと考えられている。

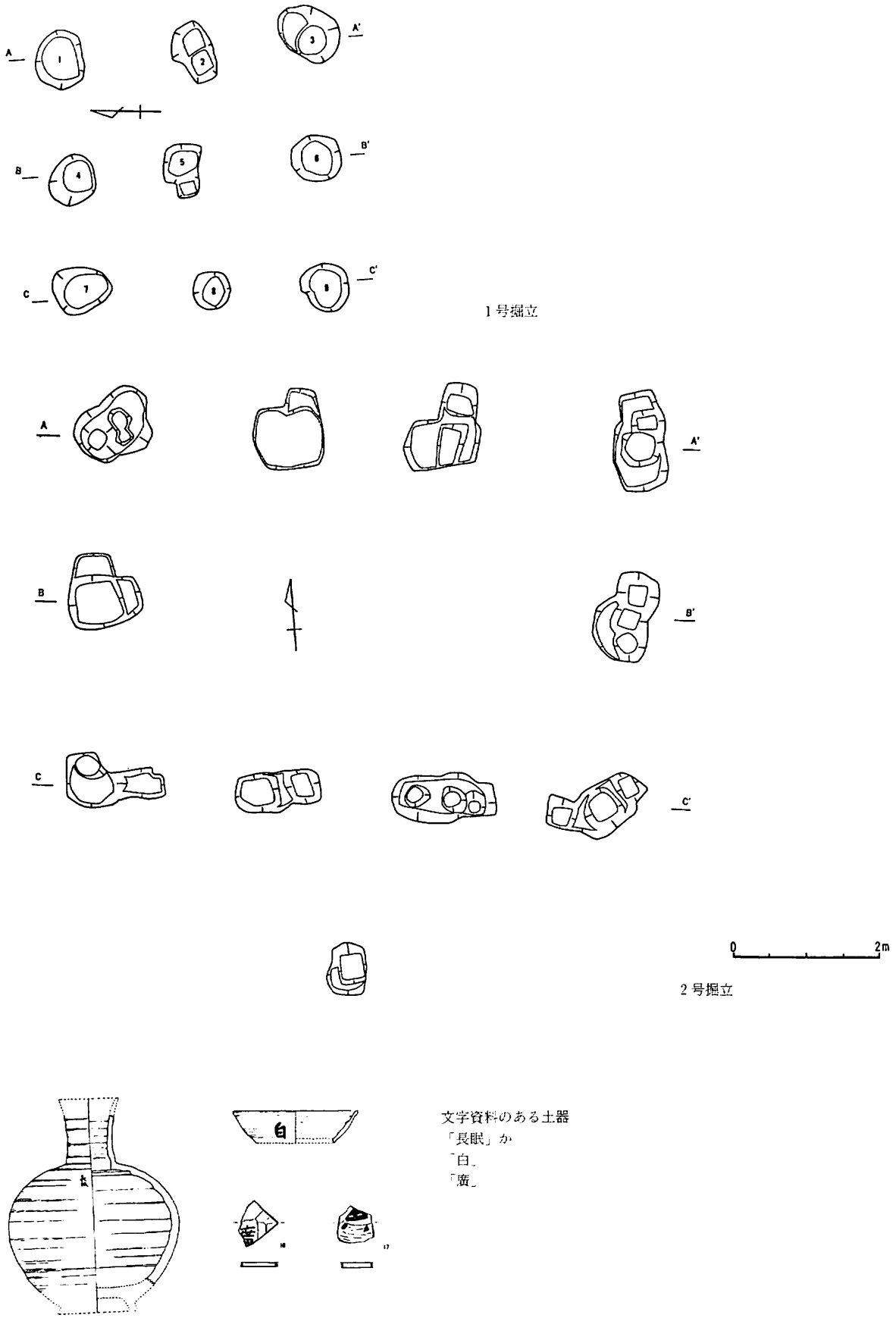
熊野遺跡は江南台地縁部に位置し眼下には和田川を見下ろしている。小支谷を挟んだ北側には荒神脇遺跡が隣接する。発掘調査では竪穴住居跡15軒が検出されており、さらに西側に展開しているものと推定されている。特に注目される遺構遺物に鍛冶関連遺構と遺物がある。４号竪穴住居跡は4.8×4.4mの方形で北壁のやや東寄りに竈が設置されている。住居床の中央付近に一辺90cm深さ30cmの方形土壙が掘込まれ上面には円礫片岩が落ち込んだ状態で出土している。また隣接して内面の被熱した円形ピットが検出されている。円形ピットが鍛冶炉に方形土壙はその付属施設と推定されている。遺物には羽口・坩堝・鋳型があり４号・６号住居からは紡錘車・刀子・責金具様のリング状物・板状の鉄製品・箆状工具・鎹・釘等の製品及び未製品が出土している。出土土器の須恵器・土師器から９世紀中頃より10世紀にかけて営まれたものと考えられている。

滑川町大沼遺跡では、比企丘陵に発達した樹支状の谷津を臨む丘陵斜面に奈良から平安時代の竪穴住居跡17軒が発掘されている。出土遺物には特殊なものが多く仏教的な色合いを持つ須恵器鉄鉢・銅碗模倣坏・小建築物に使用された小形瓦・さらに馬具・「郷長」・「真成」と線刻された錘がある。これらの遺物は集落の特殊な性格を物語るに充分であり、馬の飼育に携わった集落、郷長のいた集落(郷家)等の可能性が慎重に考えられている。前述したこれらの集落は丸山遺跡を中心とした２km圏内と至近距離にあり、本地方の古代社会を考える上で欠かせない。

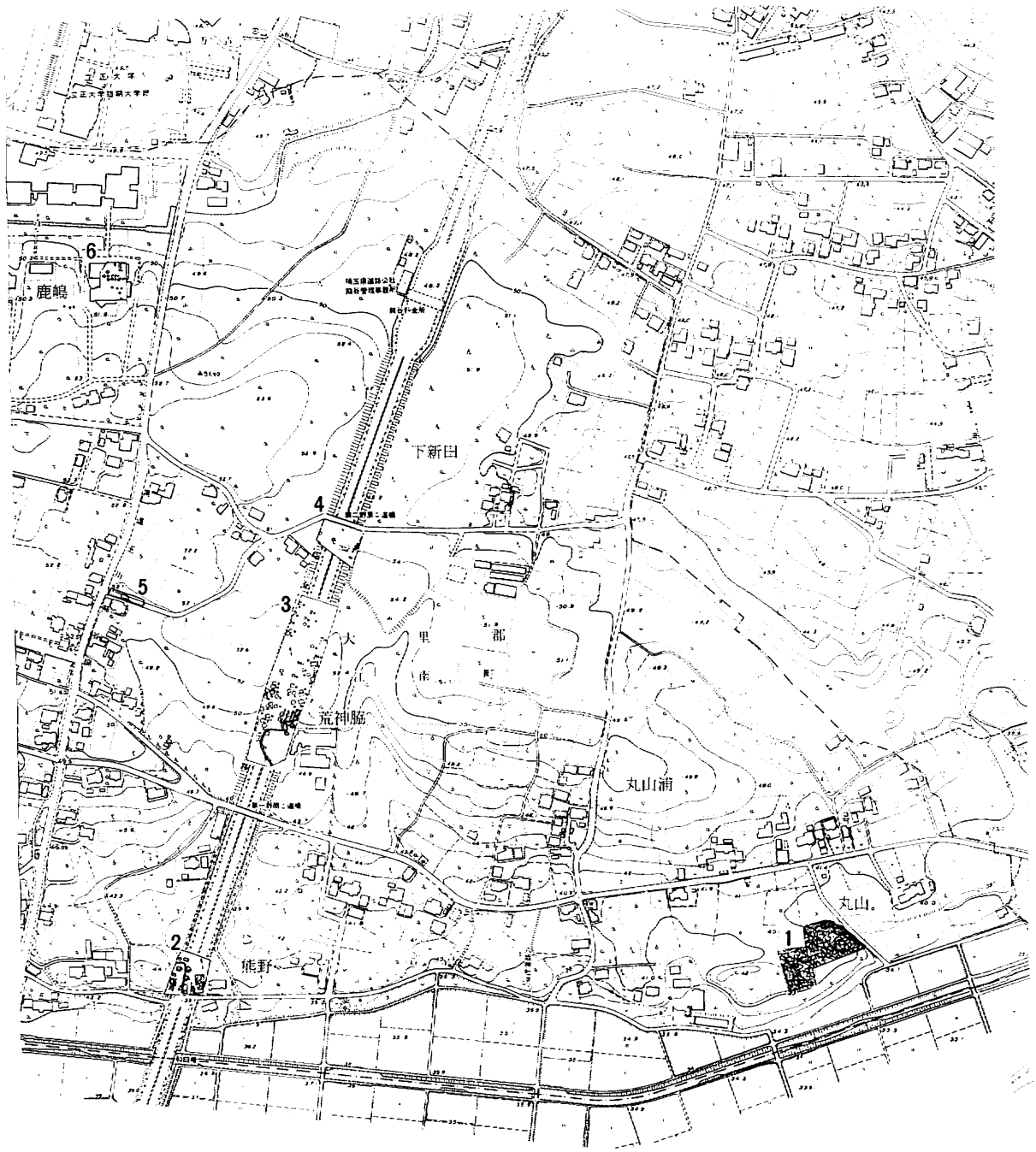
和田川に面した江南台地と比企丘陵の一部を古代男衾郡域と想定することは可能であり、男衾郡八郷中の一郷をなすと思われるが、郷名の批定となると現状ではかなり難しい。しかし丸山遺跡の周辺が郷のなかでも中心的な位置にあったことは充分うなづけるのではなかろうか。今後「郷家」の問題も視野に入れて論及されることが必要と思われる。

参考文献

12.大里郡市文化財担当者会　1994・1995　「大里の遺跡１・２」埼玉考古　第29・30号

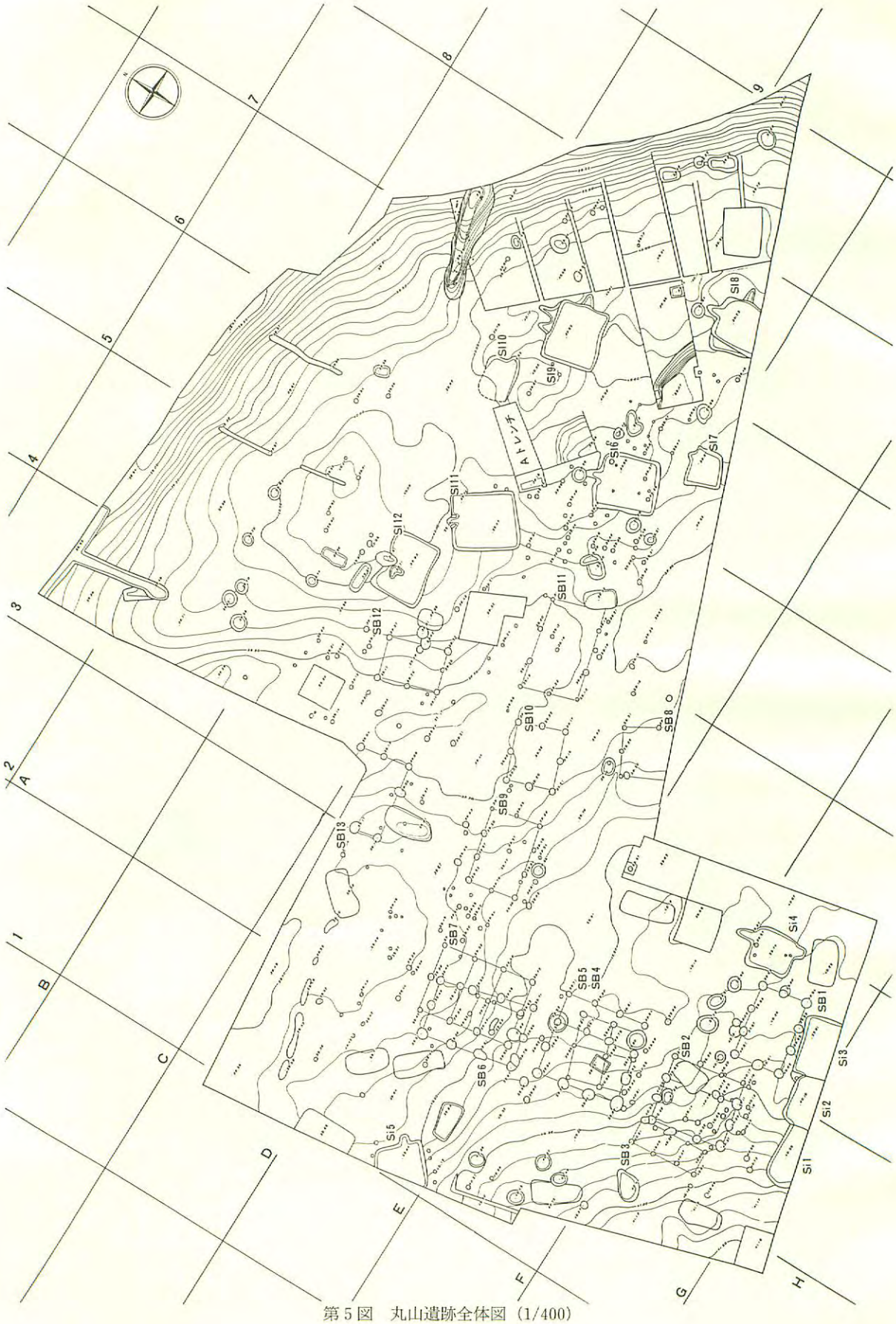


第3図　荒神脇遺跡第1・2号掘立柱建物遺構・他



1．丸山遺跡（1994年調査地点）　2．熊野遺跡（1972年調査地点）　3．荒神脇遺跡（1972年調査地点）
4．下新田遺跡（1972年調査地点）　5．荒神脇遺跡（1982年調査地点）　6．鹿嶋B地点（1978年立正大調査）

第4図　周辺地域の遺跡（既調査地点をはめ込み）



第5図　丸山遺跡全体図（1/400）

第１表　丸山遺跡遺構一覧表

丸山遺構名	法量　長×短（m）	付属遺構	主軸N°　E.W	床面積(m²)
第１号住居跡（ＳＩ－１）	(4.6)×（1.4）		－	(6.44)
第２号住居跡（ＳＩ－２）	(3.75)×（2.13）	北カマド	N14°W	(7.98)
第３号住居跡（ＳＩ－３）	4.32×（2.55）	東カマド	N75°E	(11.01)
第４号住居跡（ＳＩ－４）	3.23×2.87	北カマド	N 8°W	9.27
第５号住居跡（ＳＩ－５）	3.6×（3.4）	東カマド	N47°E	(12.24)
第６号住居跡（ＳＩ－６）	4.55×3.82	北カマド	N20°W	17.38
第７号住居跡（ＳＩ－７）	2.66×2.27	北カマド	N 2°W	6.03
第８号住居跡（ＳＩ－８ａ）	(3.3)×（2.71）	北カマド	N18.5°　W	(8.94)
第８号住居跡（ＳＩ－８ｂ）	(3.32)×（3.3）	東カマド	N80°E	10.95
第９号住居跡（ＳＩ－９ａ）	(3.7)×（3.43）	北カマド	N3.5°E	12.69
第９号住居跡（ＳＩ－９ｂ）	(3.75)×（3.55）	北カマド	N1.5°E	(13.31)
第９号住居跡（ＳＩ－９ｃ）	4.32×3.78	東カマド	N90°E	16.32
第10号住居跡（ＳＩ－10）	(2.55)×1.9	東カマド	N81.5°E	(4.84)
第11号住居跡（ＳＩ－11）	4.75×3.97	北カマド	N34°W	18.85
第12号住居跡（ＳＩ－12）	4.75×3.43	北カマド	N4.5°W	16.29
	規模　桁×梁（m）			
第１号堀立柱建物跡（ＳＢ－１）	5.42×3.4	３×２間	N80.5°　E	18.42
第２号堀立柱建物跡（ＳＢ－２）	5.32×3.36・庇	３×２間	N 9°　W	17.87
第３号堀立柱建物跡（ＳＢ－３）	5×1.73	３×１間	N3.5°　W	8.65
第４号堀立柱建物跡（ＳＢ－４）	4.55×4.2	２×２間	N17.5°　E	19.11
第５号堀立柱建物跡（ＳＢ－５）	6.1×3.89・庇	３×２間	N12.5°　W	23.72
第６号堀立柱建物跡（ＳＢ－６）	6.75×4.1	３×２間	N9.5°　W	27.67
第７号堀立柱建物跡（ＳＢ－７）	6.95×4.25	３×２間	N12.5°　W	29.53
第８号堀立柱建物跡（ＳＢ－８）	(3.65)×3.6	－×２間	N31°　W	(13.14)
第９号堀立柱建物跡（ＳＢ－９）	5.5×3.65	３×２間	N77°E	20.07
第10号堀立柱建物跡（ＳＢ－10）	4..4×3.5	２×２間	N70.5°　E	15.4
第11号堀立柱建物跡（ＳＢ－11）	6.6×3.88	３×２間	N85.5°　E	25.60
第12号堀立柱建物跡（ＳＢ－12）	4.37×3.08	２×２間	N18°　W	13.45
第13号堀立柱建物跡（ＳＢ－13）	5.45×3.73	３×２間	N81°　E	20.32
	直径×深さ（m）			
第９号土壙（ＳＫ９）	0.75×0.592			
第22号土壙（ＳＫ22）	1.1×0.22			
第23号土壙（ＳＫ23）	1.25×0.335			
第24号土壙（ＳＫ24）	1.2×0.3			
第25号土壙（ＳＫ25）	1.2×0.135			
第26号土壙（ＳＫ26）	1.4×0.398			
第27号土壙（ＳＫ27）	1.5×0.39			
第28号土壙（ＳＫ28）	1.4×0.273			
第29号土壙（ＳＫ29）	0.9×0.608			
第38号土壙（ＳＫ38）	1.25×0.374			
第39号土壙（ＳＫ39）	0.82×0.34			

III　検出された遺構と遺物

1、検出された遺構

a. 竪穴住居跡

第1号竪穴住居跡［SI-1］（第6．7．37図）

調査区H-2グリット内に位置する。北半部のみの調査で南半部は区域外に延びる。第2号竪穴住居跡に東壁を切られている。確認された規模は(4.6)×(1.4)m、床面積は(6.44)m²を測る。直床で固くしまり床面は平坦であった。柱穴は確認されなかった。

遺物は少なく覆土中から土師器・須恵器細片が出土している。須恵器高台坏碗の底部の破片は転用硯とされていた。

第2号竪穴住居跡［SI-2］（第6．7．37図）

調査区H-2～H-3グリット内に位置する。北半部のみの調査で南半部は区域外に延びる。第1号竪穴住居跡を切り、第3号竪穴住居跡に東壁を切られている。(3.75)×(2.13)m、床面積は(7.98)m²を測り、主軸はN-14°-Wの方位をもつ。床は貼床で中央部に床下土壙が掘られていた。不正な楕円形を呈し長軸短軸は1.6×1.0mを測る。北壁に竈が設けられており、3号竪穴住居に切られ半分しか遺存していない。燃焼部を壁外に設置しており、内面は良く焼けていた。床下土壙には竈から掻きだしたと思われる焼土・炭化物等が含まれていた。

遺物は覆土・床上から土師器・須恵器片が出土している。須恵器坏・碗・甕等がある。7の大型の碗は直径18cmを測る。

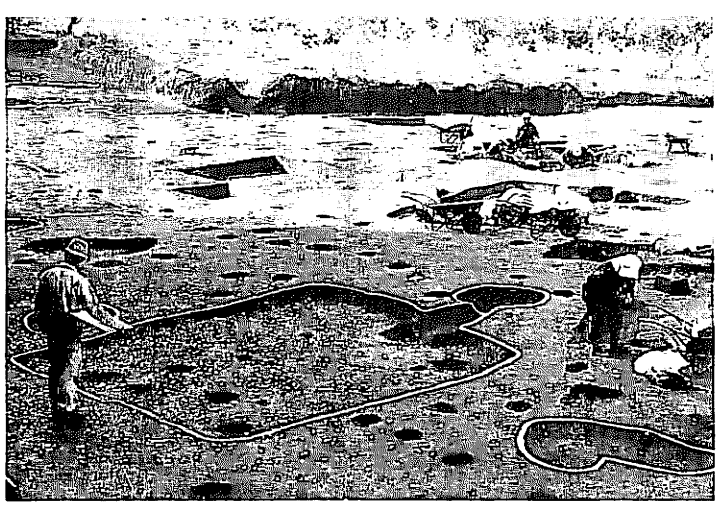
第3号竪穴住居跡［SI-3］（第6．7．38図）

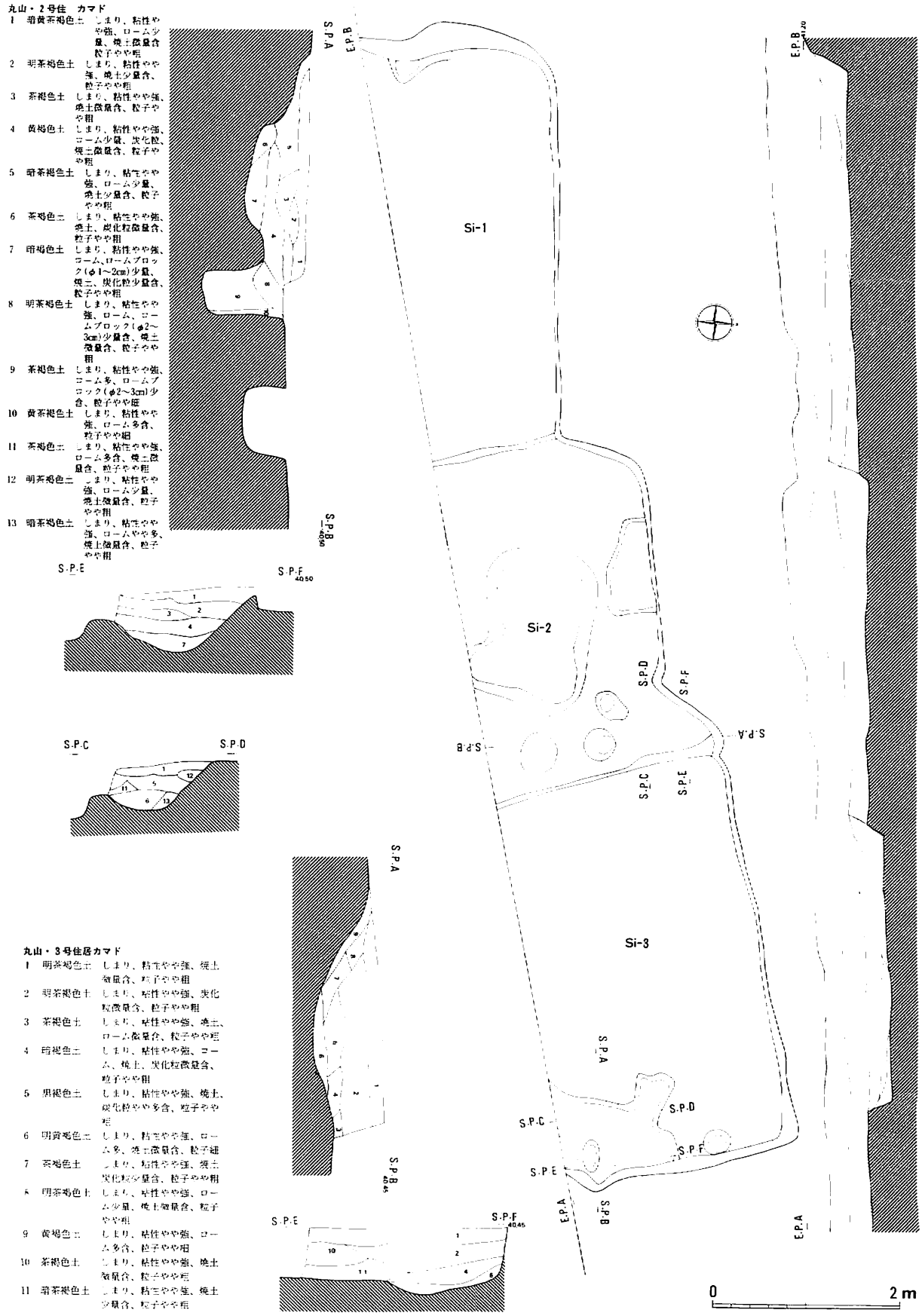
調査区H-3グリット内に位置する。北半分の調査のみで南側は区域外に延びている。確認された規模は4.32×(2.55)m、床面積は(11.01)m²、主軸はN-75°-Wの方位を持つ。直床であったが柱穴は確認できなかった。竈は東壁に位置し、袖は地山を掘り残して構築されている。燃焼部は壁外に設けられている。竈の周辺からは多くの遺物が出土しており、完形品の須恵器坏・碗・甕等が出土している。図化できた17点の土器には、坏・碗・皿・長頸瓶があり、土師器ではコの字口縁の明瞭な甕形土器が出土している。

第4号竪穴住居跡［SI-4］（第8．9．37図）

調査区G-3グリット内に位置する。完掘しており、やや長方形を呈している。規模は3.23×2.87mを測る。床面積は9.27m²、主軸はN-8°-Wの方位を持つ。南側では出入り口に相当する部分が平坦面になっている。西壁にはテラス部分がある。床面は掘方上に貼床がされている。竈は北壁の中央付近に位置し、燃焼部を壁外に設けている。

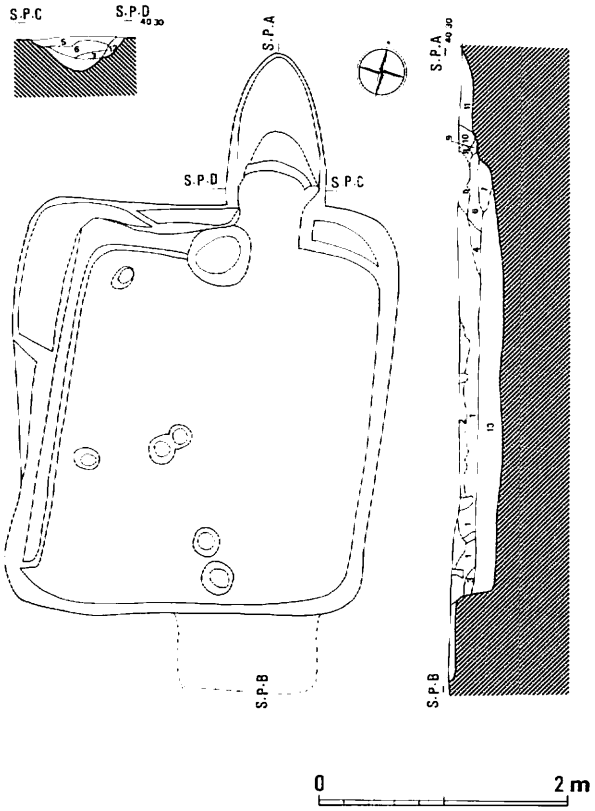
遺物は床面を中心に分布するが少ない。





第6図　丸山遺跡第1・2・3号住居跡平面図（1/60）、同2・3号カマド土層断面図（1/30）

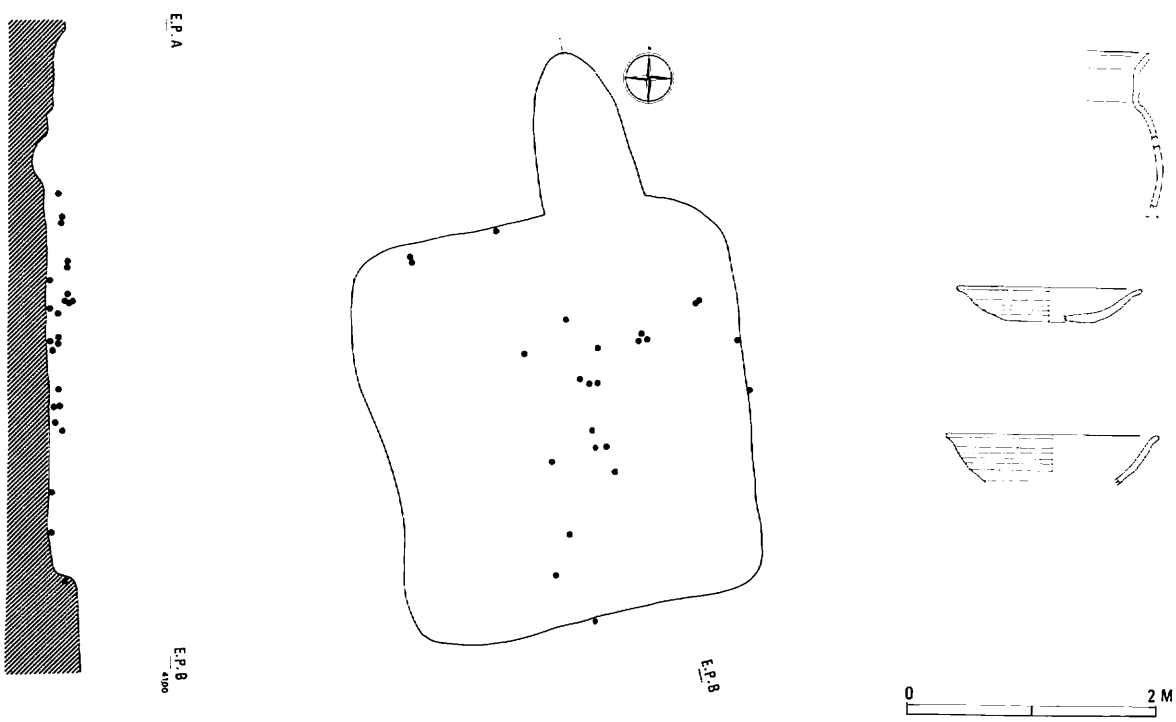
第７図　丸山遺跡第１・２・３号住居跡出土遺物分布図



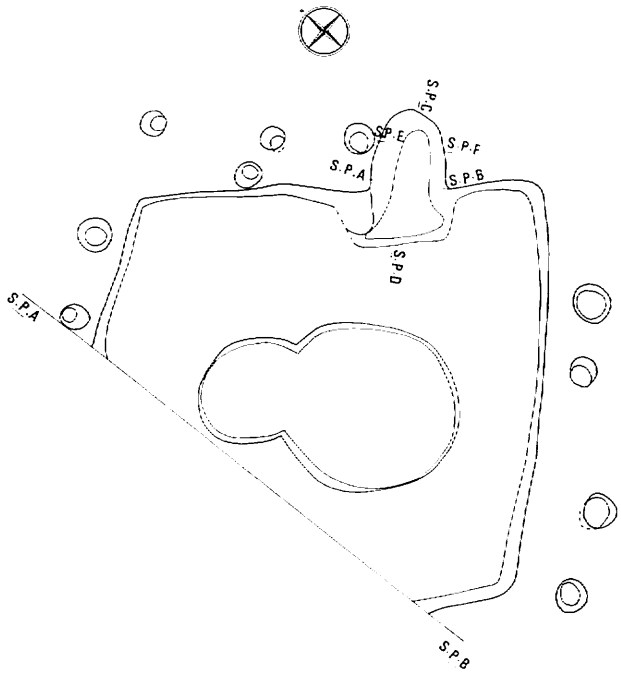
丸山・4号住居

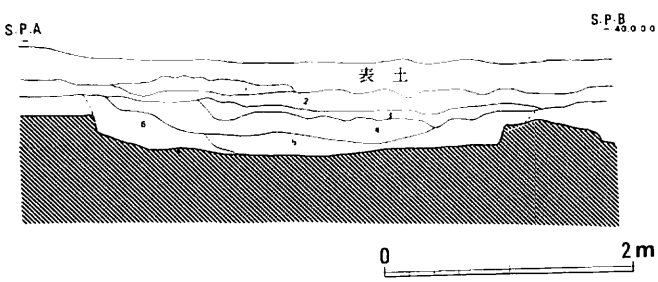
1	暗茶褐色土	しまり、粘性やや強、ローム粒ブロック状含
2	茶褐色土	しまり、粘性やや強、ローム、炭化粒微量含
3	黄褐色土	しまり、粘性やや弱、ローム多含、粒子細
4	黄茶褐色土	しまり、粘性やや強、ロームブロック少、焼土微量含、粒子粗
5	暗褐色土	しまり、粘性やや弱、焼土炭化粒微量含、粒子粗
6	茶褐色土	しまり、粘性やや弱、焼土炭化粒少量含、粒子粗
7	明茶褐色土	しまり、粘性やや弱、焼土やや多、炭化粒少量含、粒子粗
8	黄褐色土	しまり、粘性やや弱、黄色粒子少量含、焼土、炭化粒少量含、粒子細
9	赤褐色土	しまり、粘性やや弱、焼土多、黄色粒子少量、炭化粒少量含、粒子細
10	焼土層	しまり、粘性やや強、焼土多、炭化粒微量含、粒子やや粗
11	明黄褐色土	しまり、粘性やや弱、ローム粒多、焼土微量含、粒子粗
12	黄茶褐色土	しまり、粘性やや強、ロームやや多、焼土微量含、粒子やや粗
13	黄褐色土	しまり、粘性強、ローム、ロームブロックやや多含、粒子粗

第8図　丸山遺跡第4号住居跡平面図（1/60）



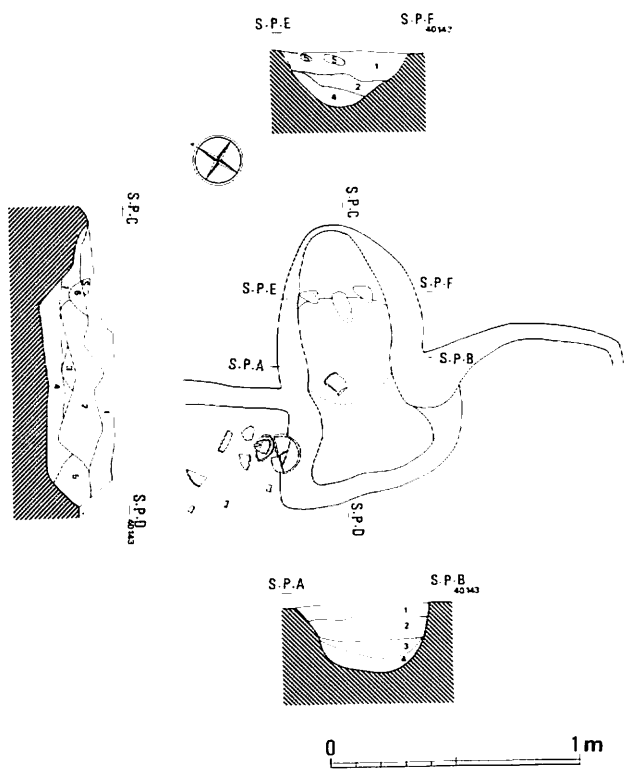
第9図　丸山遺跡第4号住居跡出土遺物分布図





丸山・5号住居

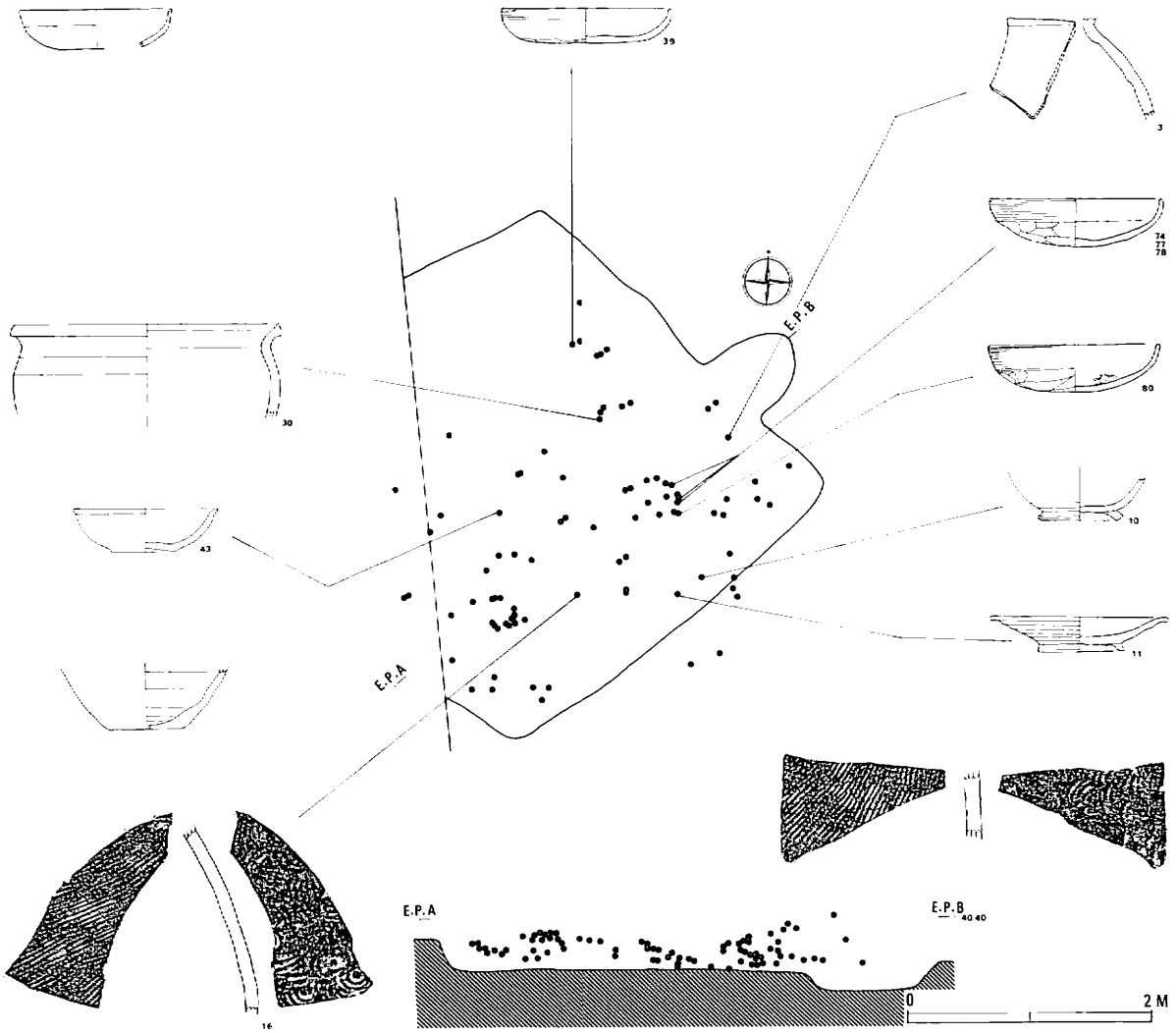
1	明茶褐色土	しまり、粘性やや強、粒子粗
2	暗褐色土	しまり、粘性やや強、粒子やや粗
3	暗茶褐色土	しまり、粘性やや強、ローム微量含、粒子やや細
4	茶褐色土	しまり、粘性やや強、ローム少量含、粒子やや細
5	茶褐色土	しまり、粘性やや強、ローム少量炭化粒微量含、粒子やや粗
6	暗茶褐色土	しまり、粘性やや強、ローム微量含、粒子やや粗



5号住　カマド

1	明茶褐色土	しまり、やや弱、粘性やや強、焼土少量含、粒子やや粗
2	茶褐色土	しまり、やや弱、粘性やや強、焼土やや多含、粒子やや粗（天井落土）
3	暗茶褐色土	しまり、やや弱、粘性やや強、焼土、炭化粒微量含、粒子やや粗
4	茶褐色土	しまり、やや弱、粘性やや強、焼土微量含、粒子やや粗(火床)
5	明茶褐色土	しまり、やや弱、粘性やや強、焼土、炭化粒微量含、粒子やや粗、2に近い
6	黄茶褐色土	しまり、やや弱、粘性やや強、ローム多、焼土微量含、粒子粗
7	黄褐色土	しまり、やや弱、粘性やや強、ローム多含、粒子粗

第10図　丸山遺跡第5号住居跡平面図（1/60）、同カマド跡平面図（1/30）

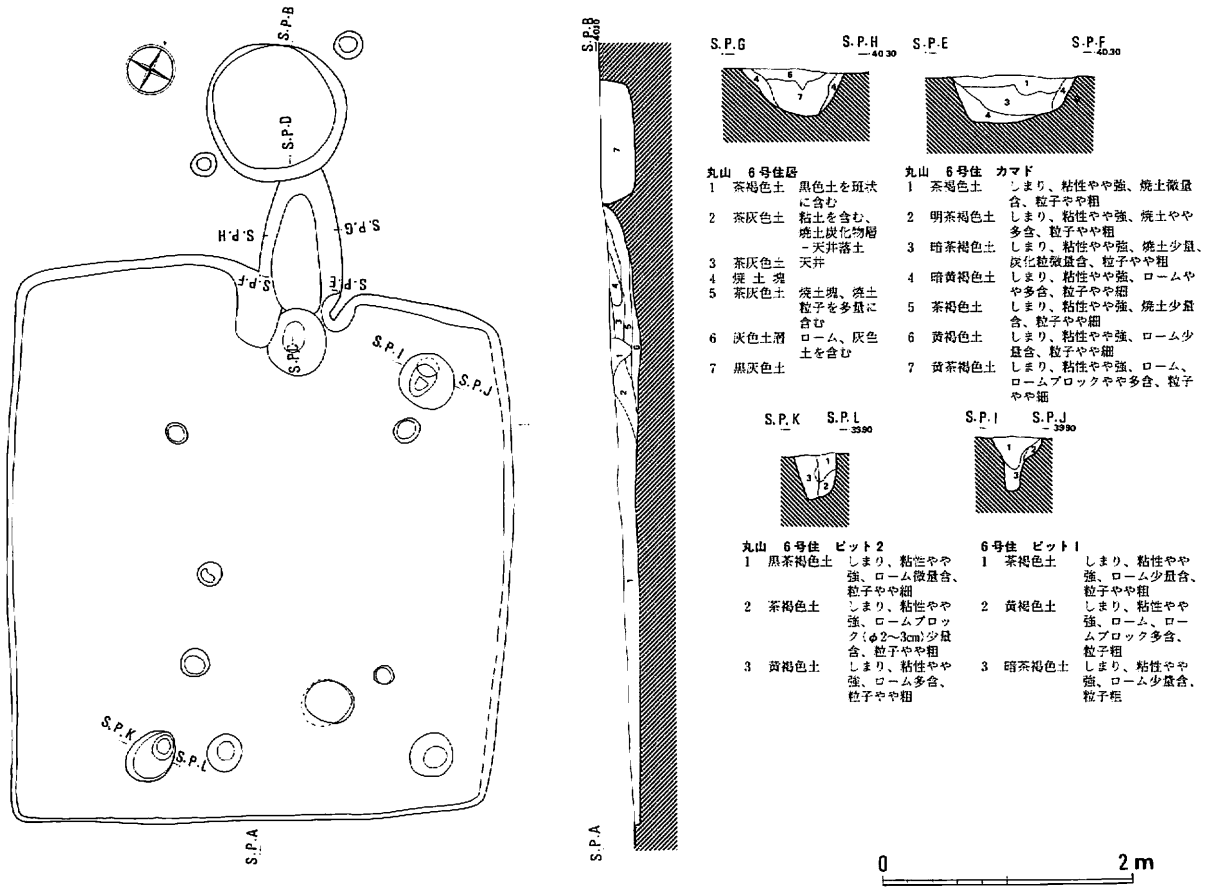


第11図　丸山遺跡第５号住居跡出土遺物分布図

第５号竪穴住居跡［SI－５］（第10.11.39図）

調査区Ｅ－１グリット内に位置する。南西隅付近が区域外に延びている。ほぼ方形をしており、3.6×(3.4)m、床面積は(12.24)m²、主軸はN－47°－Wの方位を持つ。床面は直床だが、中央付近に床下土壙をもつ。床下土壙は割合浅く10～15cm、ロームブロックを主体とする覆土であった。長軸2.0、短軸1.4mを測る。壁の外周には柱穴が巡るが、本住居跡との関係は良くつかめない。壁外柱穴にしては不規則な配列をしておりはやや疑問である。竈は東壁に位置し、袖は地山を掘り残して構築されている。燃焼部をほとんど壁外に出して作られていた。

遺物は竈周辺にまとまって出土しており、土師器坏４点・須恵器坏・碗・皿などが出土している。土師器坏はいずれも口径が13cm前後と大きく平底のものとやや丸底のものがあった。

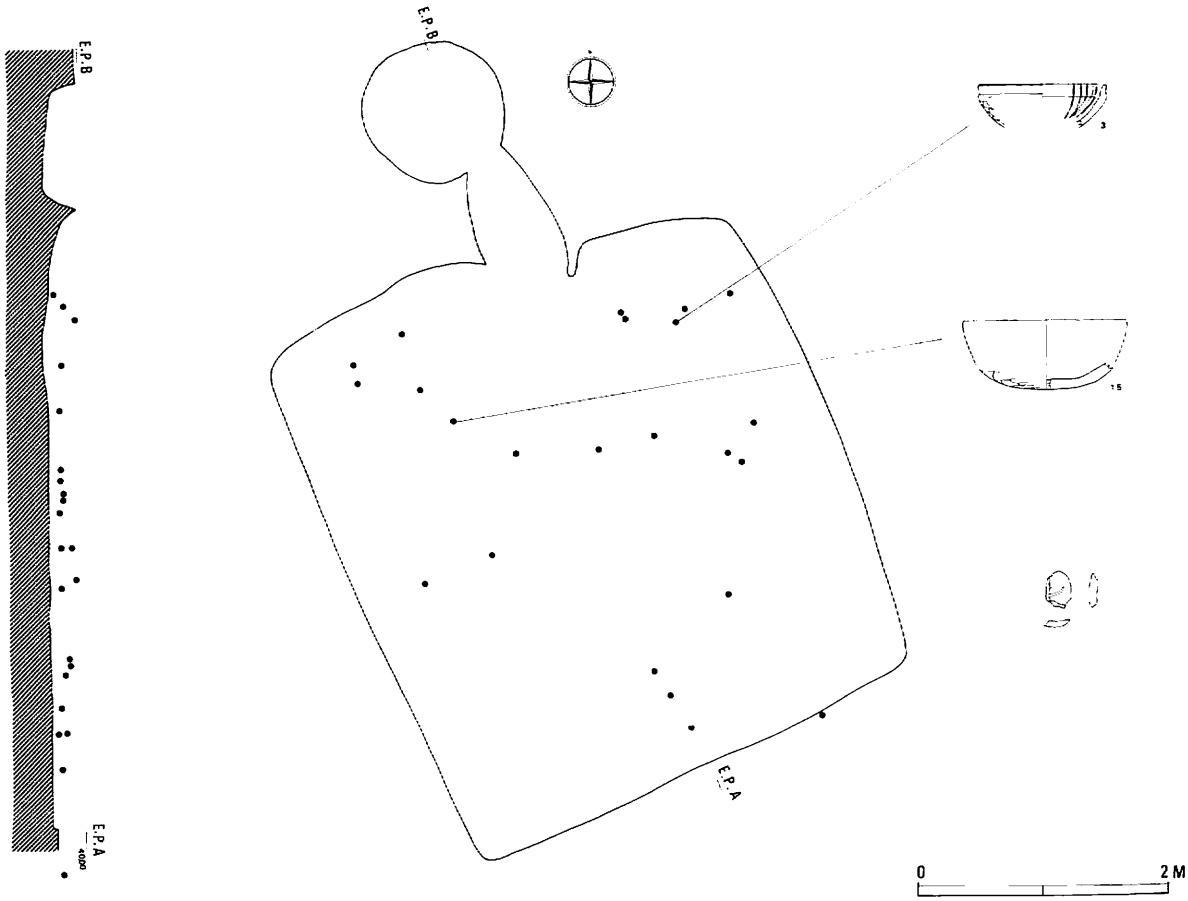


第12図　丸山遺跡第６号住居跡平面図（1/60）

第６号竪穴住居跡［SI－６］（第12.13.40図）

調査区D－５～D－６グリット内に位置する。完掘しており、ほぼ方形をしているが、掘込みは比較的浅い。壁は直線的で、4.55×3.82m、床面積は17.38㎡、主軸はN－20°－Wの方位を持つ。床面は直床、主柱穴は4本、柱間約1.8～1.5mを測る。柱穴の位置する南壁部分より、西壁から西北コーナ付近がやや広目の床をもつ。竈の右側に貯蔵穴状の小土壙がある。竈は北壁の中央部分に位置し、燃焼部を壁内に設けている。燃焼部幅42cm、奥行50cm、煙道は長く延び70cmの長さを測る。

遺物はほとんど出土しておらず、わずかに土師器細片が出土している。



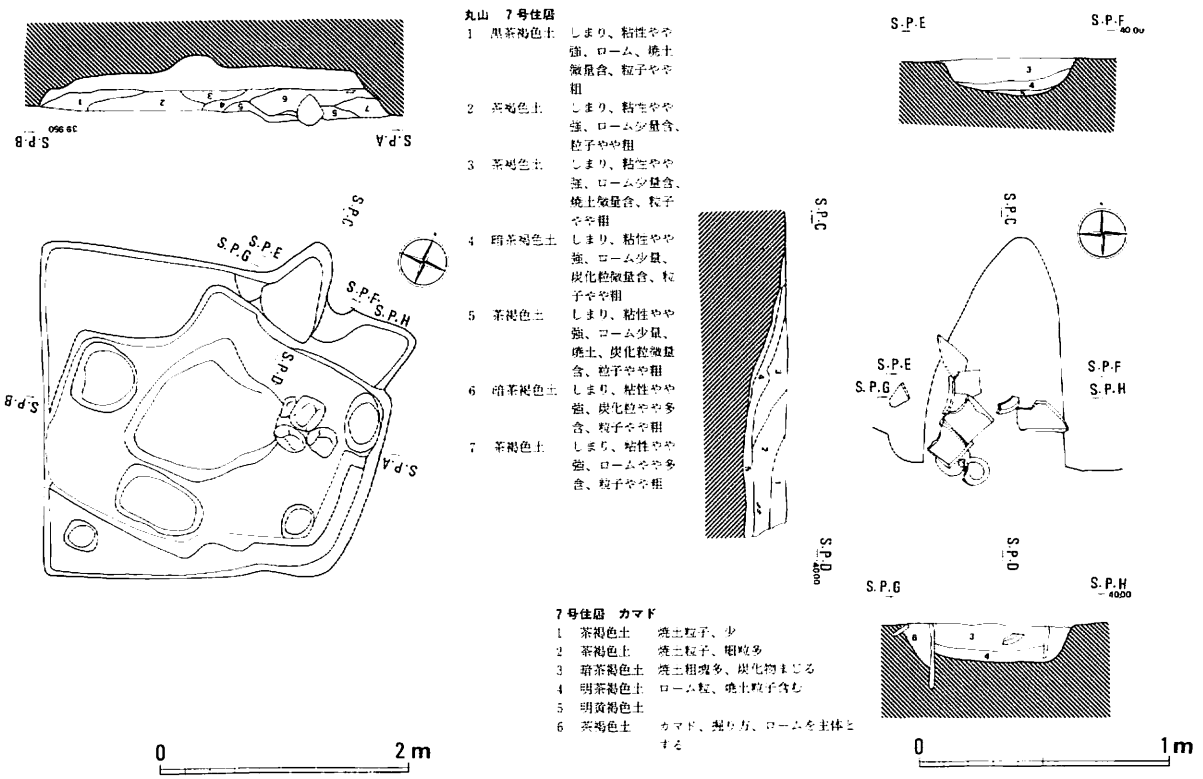
第13図　丸山遺跡第６号住居跡出土遺物分布図

第７号竪穴住居跡［SI-７］（第14.15.40.41図）

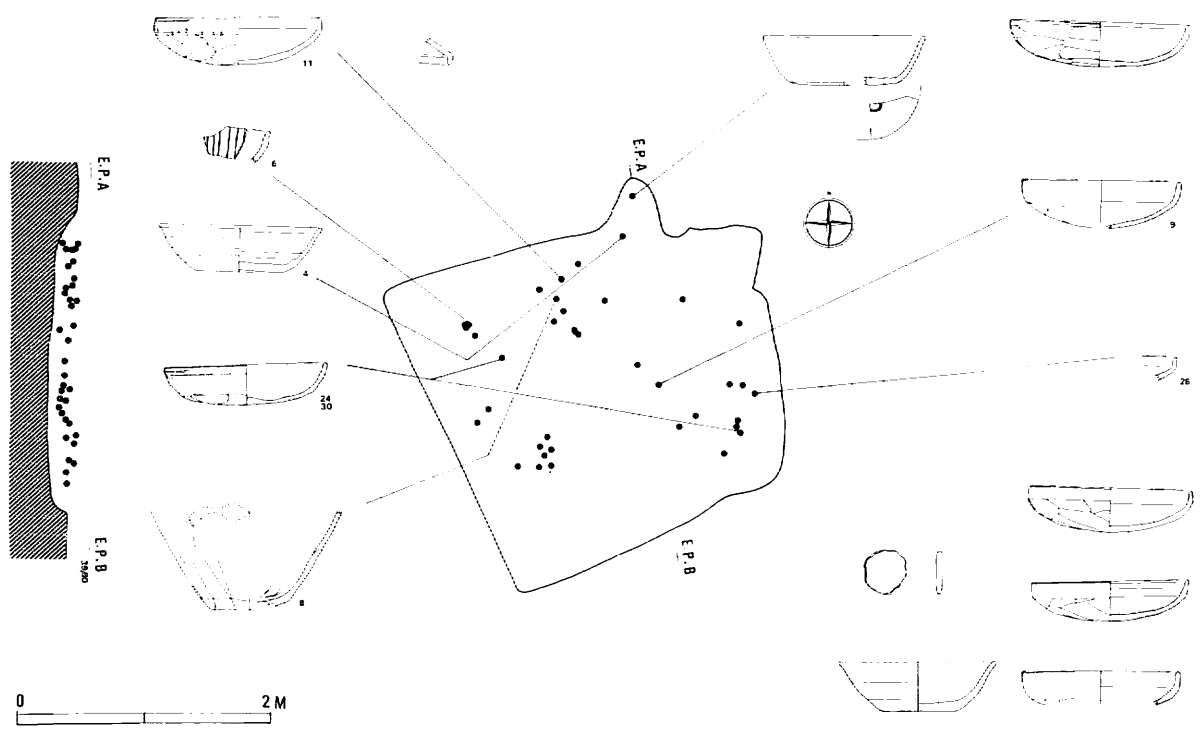
調査区D-６、E-６グリット内に位置する。不正方形であるが、2.66×2.27mを測る。床面積は6.03㎡、主軸はN-２°-Wの方位を持つ。床は貼床がされており、下面には床下土壙が掘られていた。柱穴は南側壁沿いに検出されているが、北側では不明である。竈は北壁の東よりに位置し、軸線も東に片向いている。燃焼部を壁内に設けており袖は地山を掘り残しており、補強材として瓦を用いていた。竈前面から西側には土師器坏・須恵器坏等が床上から出土している。

また、竈前面の東側からは大型の円礫三個が出土している。礫は敲打による細かな剝離が認められ、金床石等の台石として使用されていたと推定される。これらのことから本住居は小鍛冶等の金属加工を行う工房的な性格をもっていたと考えられる。

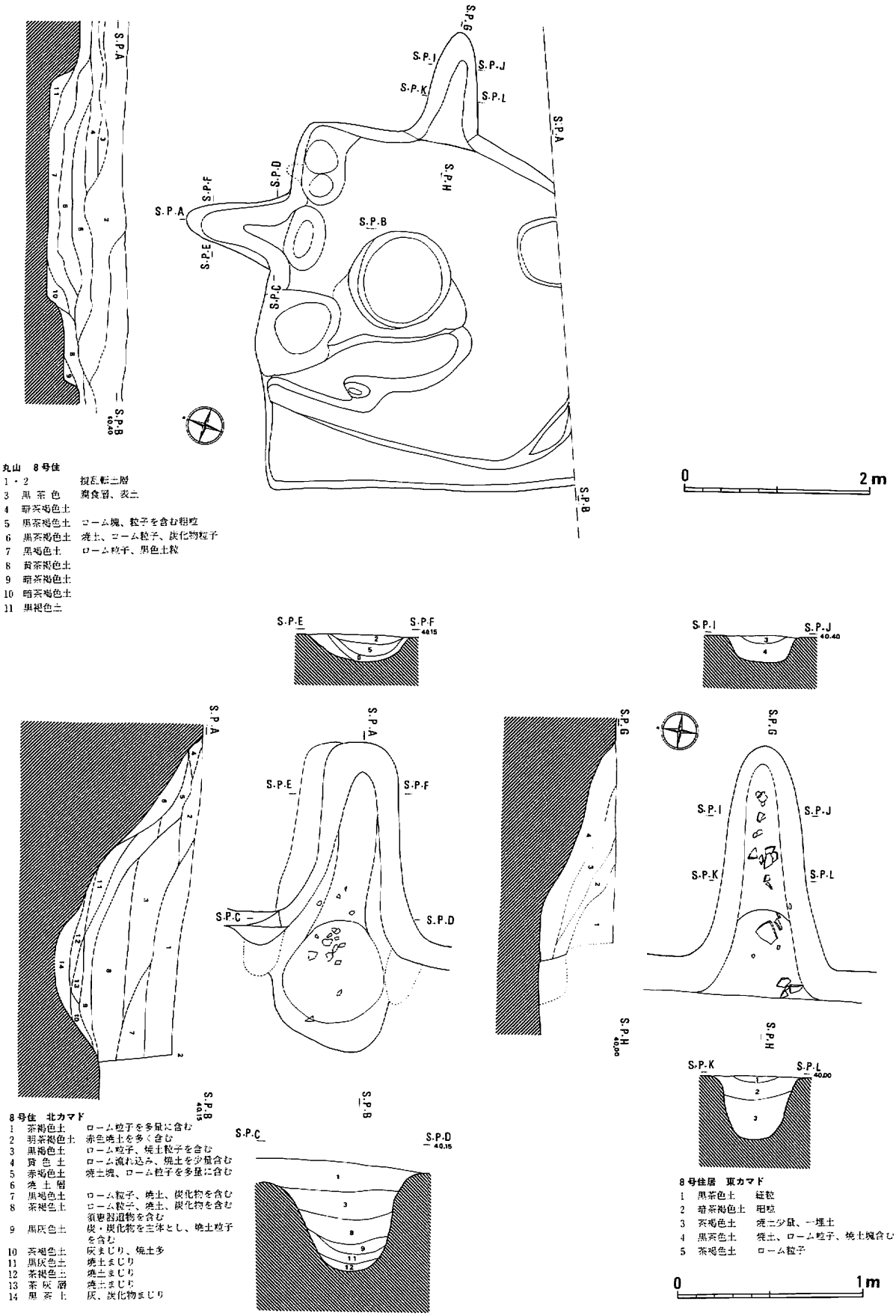
遺物は竈前面と竈より出土している。須恵器坏には底部に墨書の書かれたものがある。土師器坏の内外面に「×」という器号もしくは「＋」文字の刻書された土師器坏があった。瓦には丸瓦と平瓦が認められた。



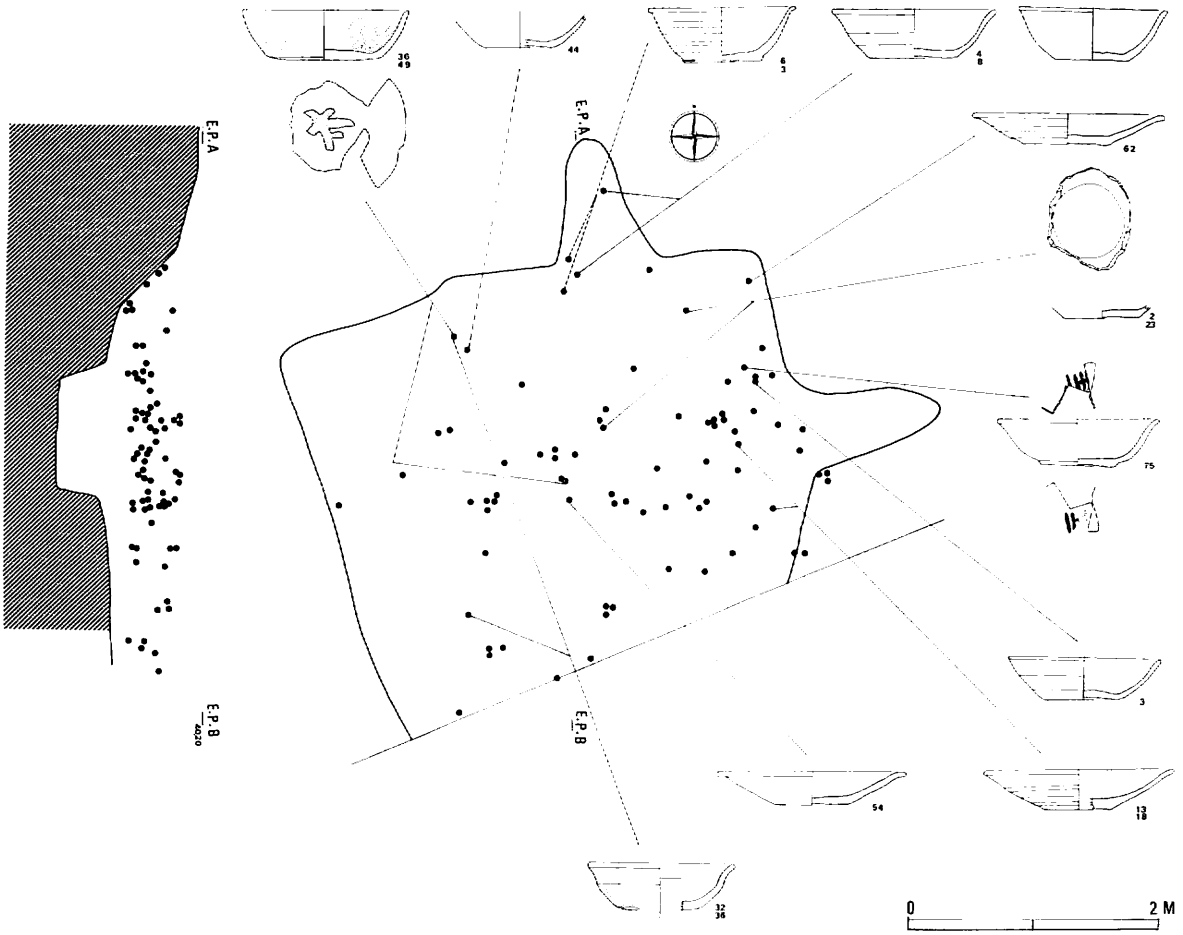
第14図　丸山遺跡第７号住居跡平面図（1/60）、同カマド跡平面図（1/30）



第15図　丸山遺跡第７号住居跡出土遺物分布図



第16図　丸山遺跡第８号住居跡平面図（1/60）、同カマド跡平面図（1/30）

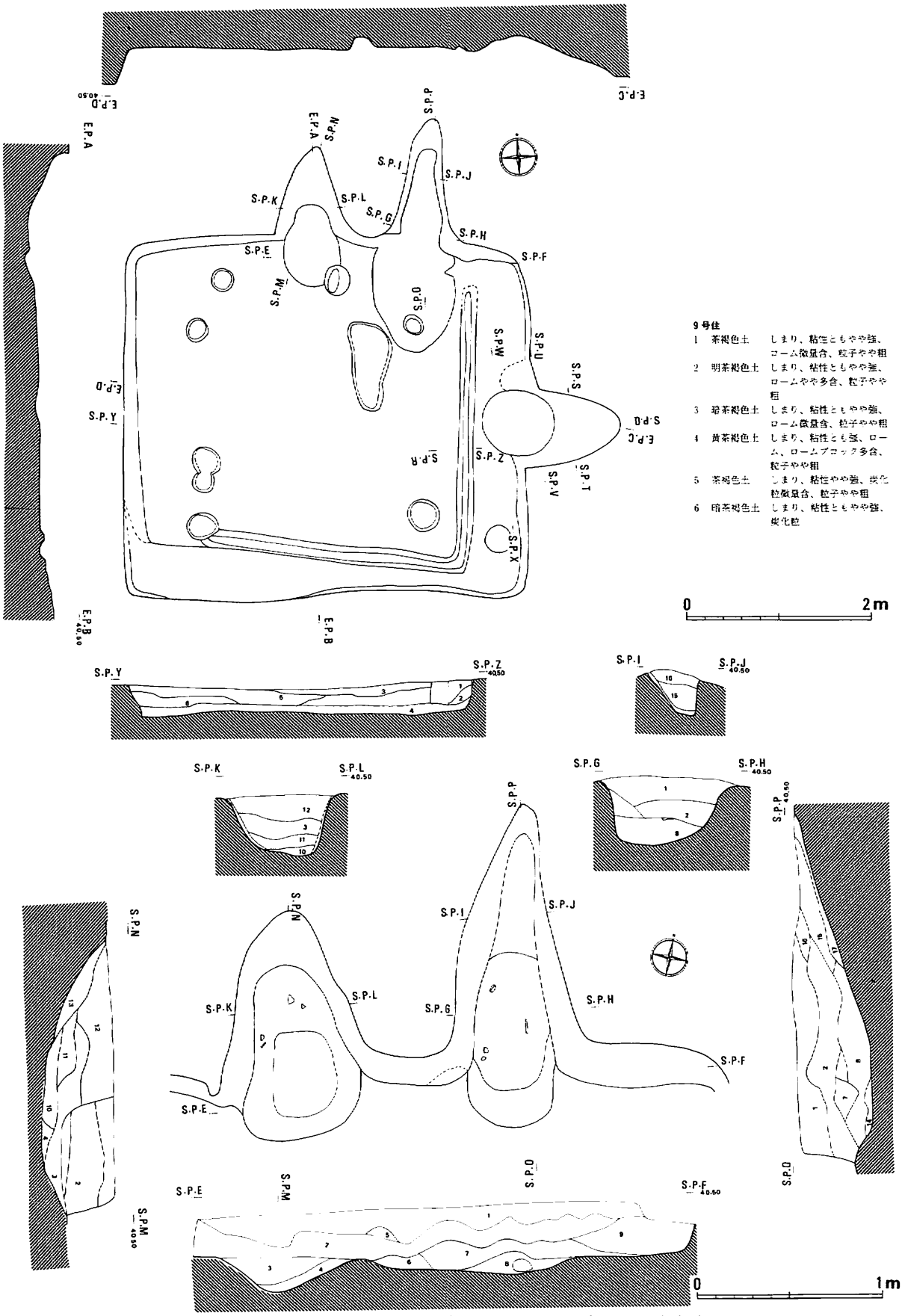


第17図　丸山遺跡第８号住居跡出土遺物分布図

第８号竪穴住居跡［SI-８］（第16.17.42図）

調査区D-７グリット内に位置する。南半部が調査区外に伸びる。2軒重複しており東竈を有する方を８ａ号住居とし、北竈を有する住居を８ｂ号住居とした。８ａ号住居は東竈と西壁を残すのみだが長方形の平面をしており、(3.3×2.71)m、床面積(8.94)m²、主軸はN-18.5°-Eの方位を持つ。床は残存部分から直床と考えられる。竈は燃焼部以下を切り取られており、煙道部を残す。遺物は竈内から土師器甕破片等をわずかに出土している。８ｂ号住居跡は８ａ号住居跡より一段床を下げて構築している。南東隅部を区域外に残すが、平面形はやや長方形で、3.32×3.3mの規模をもち、床面積は10.95m²、主軸はN-80°-Eを測る。床は貼床で床下土壙をもつ。竈は燃焼部のほとんどを壁外に出して構築されており、部分的に作り付けの袖が認められた。燃焼部から煙道へは急斜面で移行し、火床には地山土との間に間層を設けている。

遺物は東壁から床に分布していた。須恵器坏・碗等に完存品が認められた。また、「大」、「匡？」の墨書土器と転用硯等が出土している。



第18図　丸山遺跡第９号住居跡平面図（1/60）、同北カマド跡平面図（1/30）

第９号竪穴住居跡［SI-９］（第18.19.43.44図）

調査区Ｃ-６、Ｃ-７グリット内に位置する。完掘しているが、竈を３基もち住居の拡張が認められたことから時期別にａ・ｂ・ｃ号住居とした。９ａ号住居跡は、ほぼ方形で東壁・西壁が残り、９ｃ号住居貼床下に検出された溝が本住居の南壁・東壁を限ると推定された。約(3.7×3.43)m、床面積は(12.69)㎡、主軸はN-3.5°-Eの方位を持つ。床面は直床で、柱穴は壁溝の内側各隅に検出された四本がこれに当たる。竈は北壁の中央に位置し、燃焼部を壁ライン上に設置している。燃焼部は良く焼けており、傾斜をもって煙道部へ移行している。遺物は竈内より土師器破片が検出されたに過ぎない。

９ｂ号住居跡はａ号竈の東側に新に設けられたｂ号竈の時期とした。住居の平面形態はａ号住居を踏襲しており、竈主軸もほとんど変わらない。竈は燃焼部を壁外に設置しており、燃焼部から煙道部へは緩やかに移行しいる。焚き口の前面は前庭状に窪んでおり硬化していた。遺物は竈内より土師器片が出土している。

９ｃ号住居跡は前代の住居の東壁と南壁を拡張している。平面長方形で4.3×3.78m、床面積は16.32㎡、主軸はN-90°-Eの方位を持つ。貼床は黄褐色の粘質土が使われ、ａ、ｂ号竈前面まで被っていた。竈は壁ライン上に設置しており、袖を作り付けている。燃焼部幅1.0m長さ1.4mを測る。煙道はほとんど失われていた。

遺物は床上で竈周辺からの出土が多い、須恵器坏・碗・土師器坏甕等が出土している。須恵器碗は口径15cmを超えるが、指頭圧痕の残る平底風の土師器坏には油煤の付着したものが見られた。土師器甕はコの字状口縁だがやや不明瞭になっている。

第10号竪穴住居跡［SI-10］（第21.22.45図）

調査区Ｃ-６グリット内に位置する。完掘しているが遺存状態が不良で西半分を失っていた。長方形の平面をしていたと思われるが現状では、(2.55)×1.9m、床面積は(4.84)㎡、主軸はN-81.5°-Eの方位を持つ。床は直床で、柱穴は確認されていない。竈は短辺である東壁に、しかも南隅に寄せて設置されていた。

遺物は床上から須恵器坏が出土している。

第11号竪穴住居跡［SI-11］（第23.22.45図）

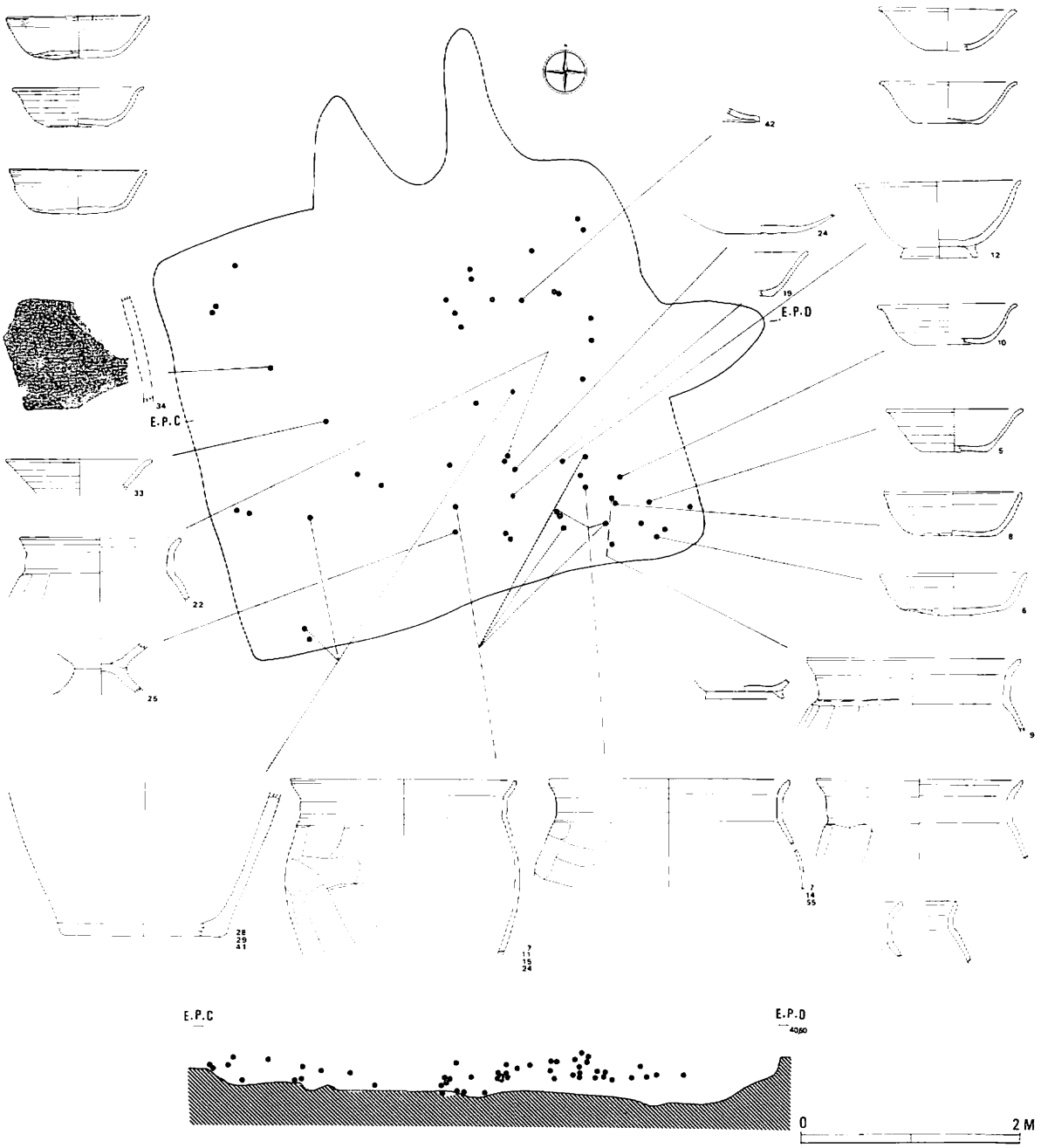
調査区Ｃ-５グリット内に位置する。完掘している。ほぼ方形を呈し、4.75×3.97m、床面積は18.85㎡、主軸はN-34°-Wの方位を持つ。壁の掘込みは浅く、床は貼床され西側が荒く20～30cmと深かった。柱穴は住居の各隅部に位置し、主柱穴は直径20cm前後と小さく、深さは30～40cmを測る。竈は北壁の中央部分に設置されていたが、住居の規模に比較してかなり小ぶりで、燃焼部幅40cm、長さ70cmを測る。燃焼部は壁内部より壁ライン上に懸かる、袖は地山を掘り残していた。

遺物は土師器碗と甕破片が床上から出土している。

第12号掘立柱建物跡［SB-12］（第24.25.45図）

調査区Ｃ-４グリット内に位置する。完掘している。ほぼ方形を呈し、4.75×3.43m、床面積は16.29㎡、主軸はN-4.5°-Wの方位を持つ。床面は中央部分を掘り残し、周囲を掘り下げ客土を入れ貼床としている。床面にはいくつかのPitが確認されたが柱穴とは特定できない。竈は北壁の中央付近に位置し、袖は地山を掘り残して構築されている。燃焼部は壁ライン上に懸かり、幅40cm,長さ80cmを測る。燃焼部より煙道部へは、段をもって移行するが、煙道部の大半は失われている。焚き口の前面は前庭状の窪みがあり略方形をしていた。

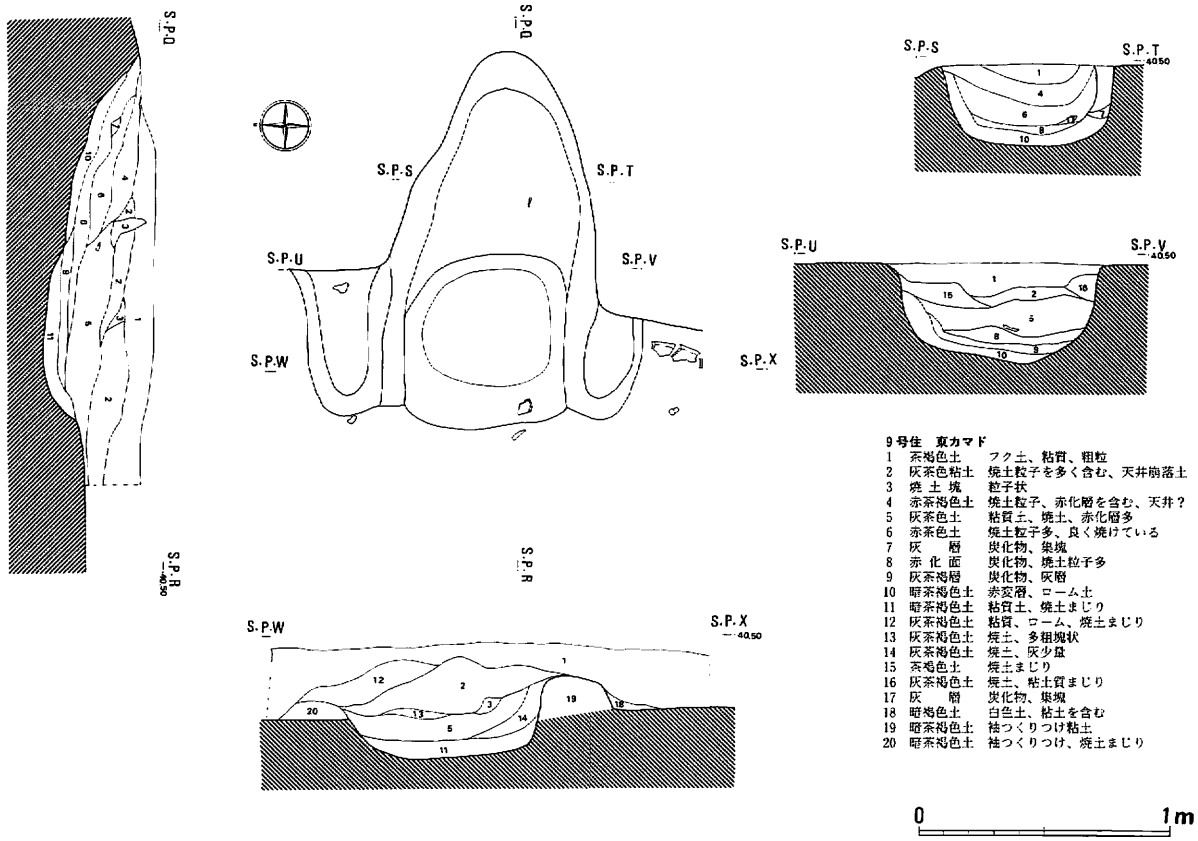
遺物は床上、竈中より須恵器坏・土師器甕・砥石等が出土している。土師器甕にはコの字状口縁。くの字状口縁がみられる。



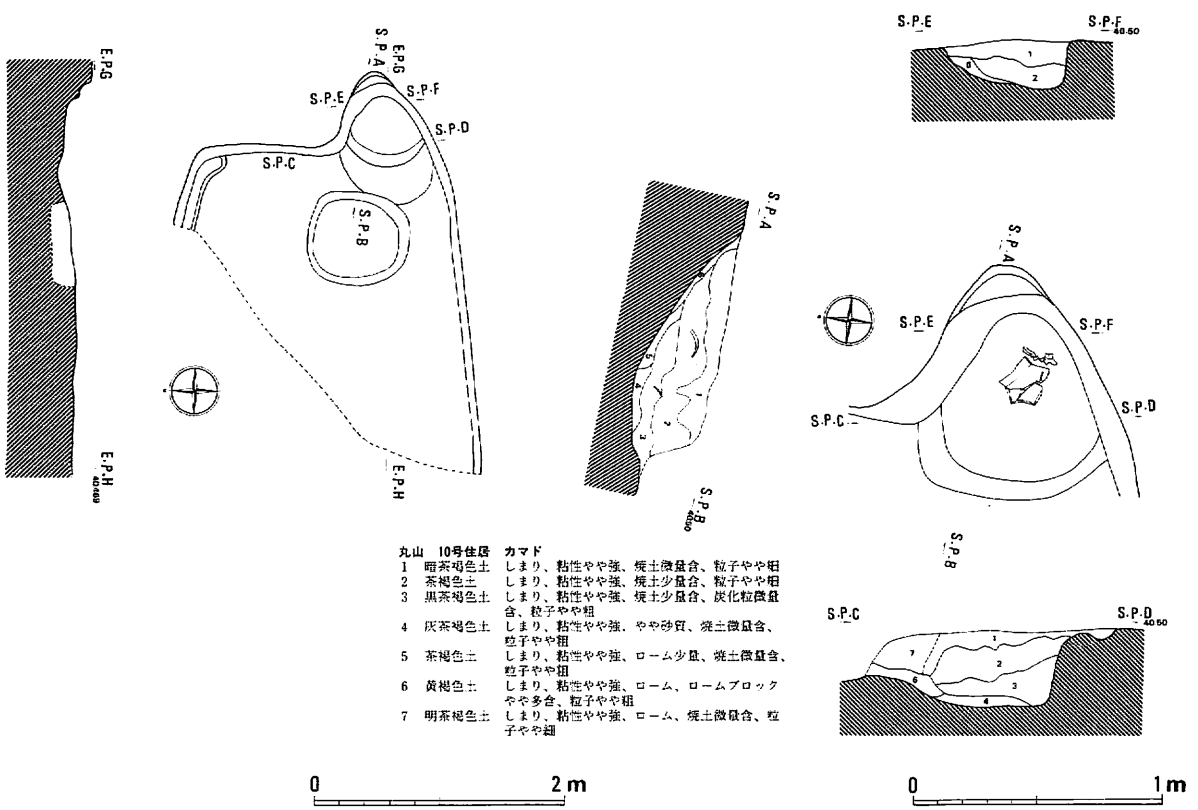
9号住　北カマド

1　暗茶褐色土　しまり、粘性やや強、焼土、炭化粒微量含、粒子やや細
2　茶褐色土　しまり、粘性やや強、焼土やや多、砂質ローム少量含、粒子やや粗
3　暗茶褐色土　しまり、粘性やや強、焼土、焼土ブロックやや多含、粒子粗
4　黄茶褐色土　しまり、粘性やや強、砂質ローム多、焼土微量含、粒子粗
5　黄褐色土　しまり、粘性やや強、ローム多含、粒子やや粗
6　茶褐色土　しまり、粘性やや強、焼土微量、砂質ローム少量含、粒子粗
7　明茶褐色土　しまり、粘性やや強、焼土少量含、粒子粗
8　暗茶褐色土　しまり、粘性やや強、焼土、炭化粒少量含、粒子粗
9　暗黄褐色土　しまり、粘性強、ローム少量含、粒子やや粗
10　黒褐色土　しまり、粘性やや強、炭化粒やや多含、粒子やや粗
11　暗褐色土　しまり、粘性やや強、焼土少量含、粒子やや粗
12　明黄褐色土　しまり、粘性やや強、ロームやや多、焼土少量含、粒子やや粗
13　暗茶褐色土　しまり、粘性やや強、焼土炭化粒やや多含、粒子やや粗
14　黄茶褐色土　しまり、粘性強、ローム多焼土微量含、粒子やや粗
15　赤褐色土　しまり、粘性やや強、焼土多含、粒子やや粗
16　赤黄褐色土　しまり、粘性やや強、焼土多含、ローム少量含、粒子やや粗
17　茶褐色土　しまり、粘性やや強、焼土微量、ローム少量含、粒子やや粗

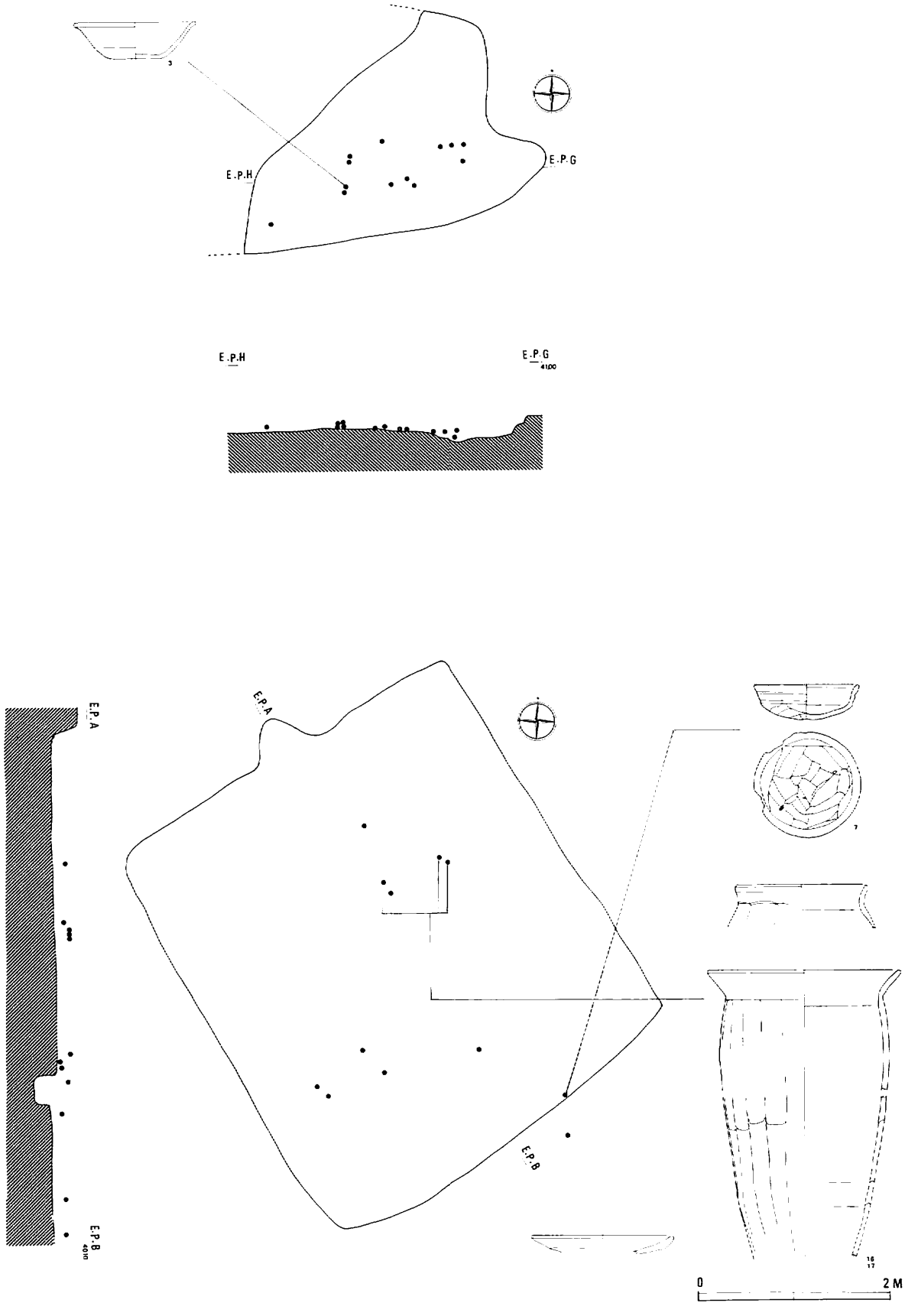
第19図　丸山遺跡第9号住居跡出土遺物分布図



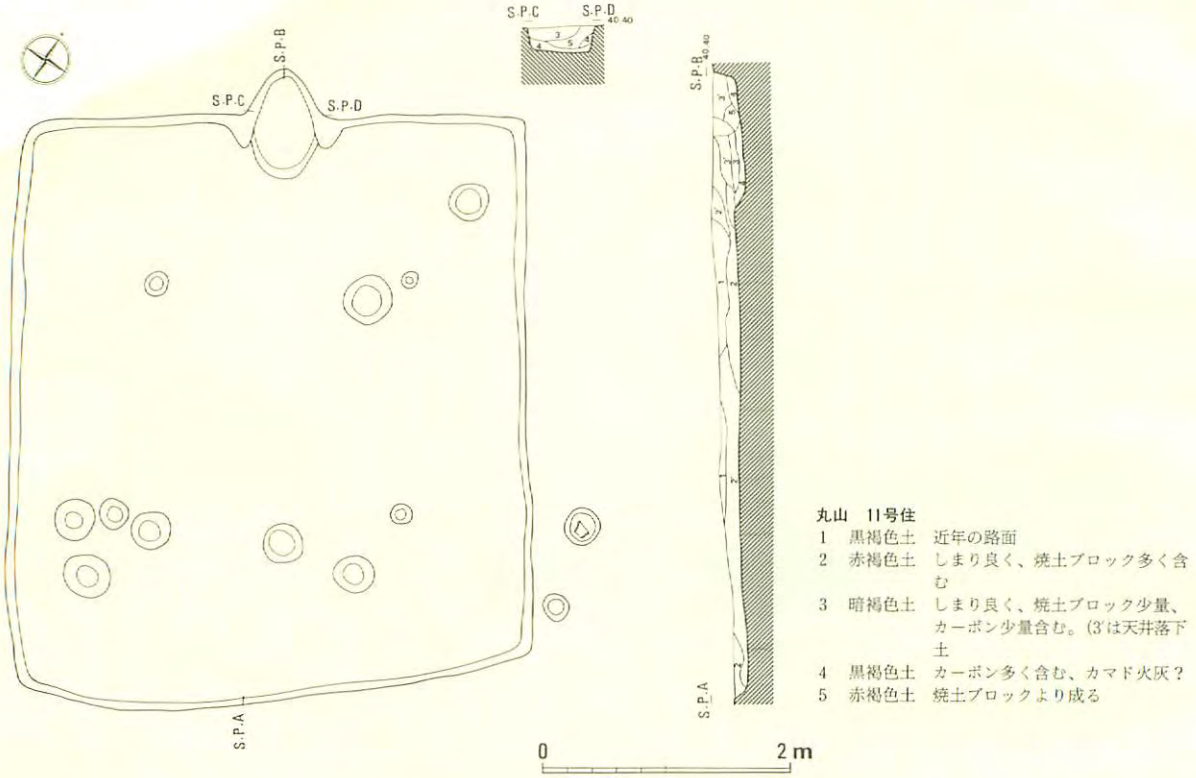
第20図　丸山遺跡第９号住居跡東カマド跡平面図（1/30）



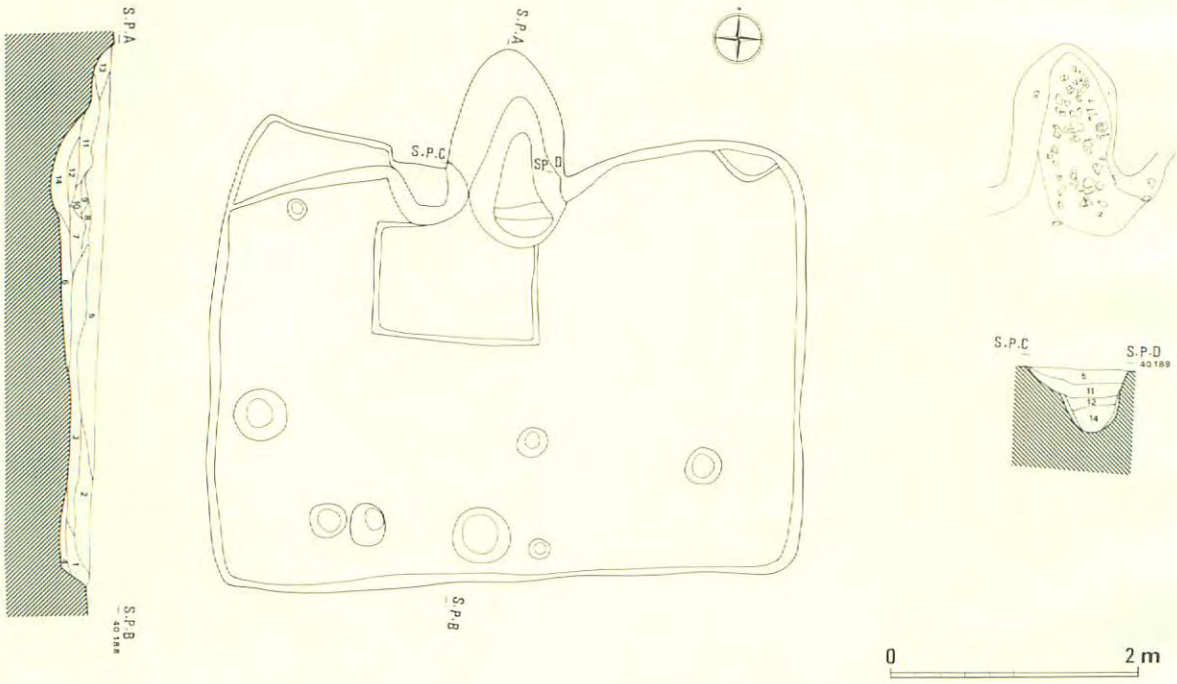
第21図　丸山遺跡第10号住居跡平面図（1/60）、同カマド跡平面図（1/30）



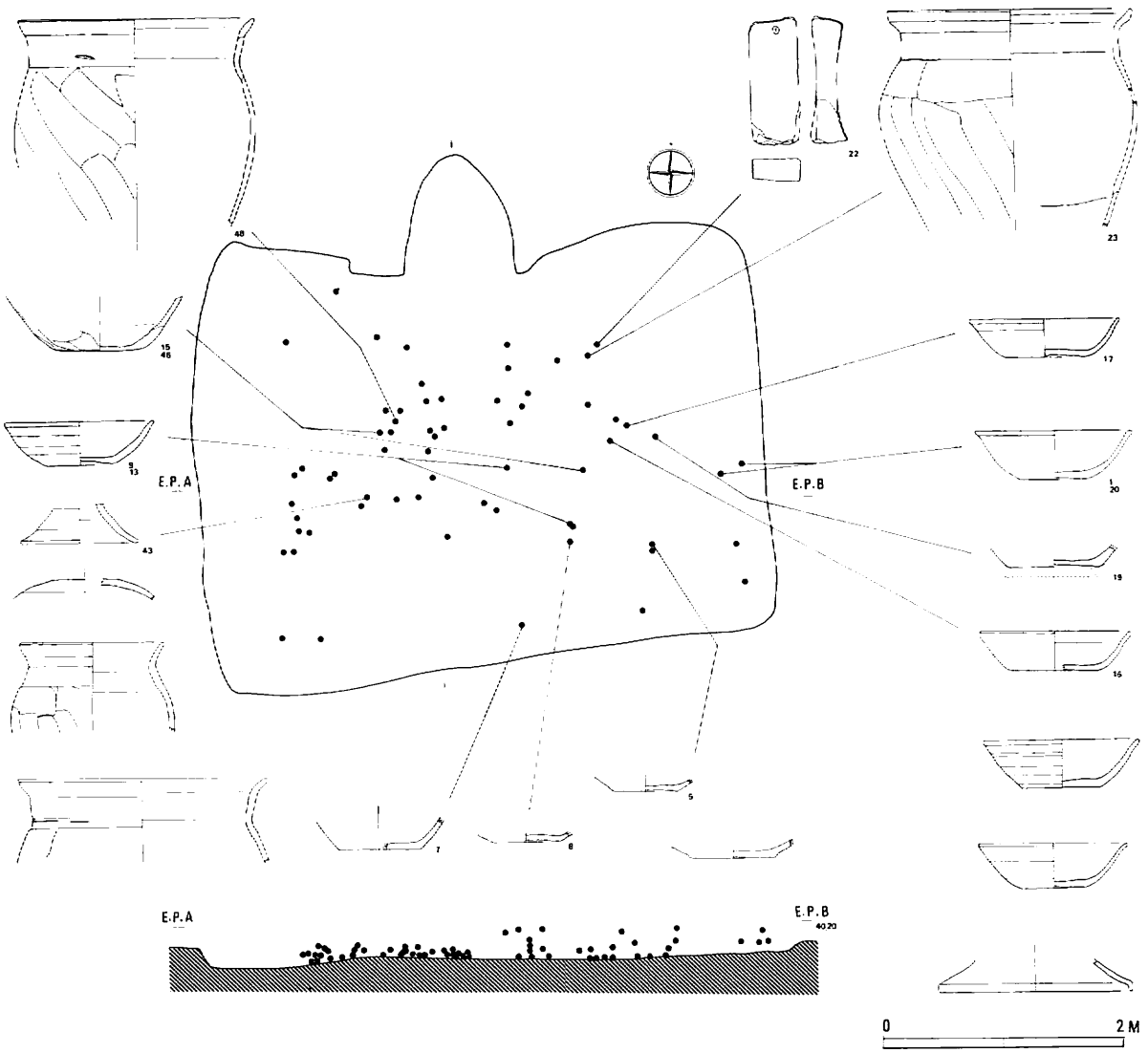
第22図　丸山遺跡第10・11号住居跡出土遺物分布図



第23図　丸山遺跡第11号住居跡平面図（1/60）



第24図　丸山遺跡第12号住居跡平面図（1/60）



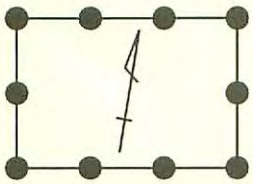
丸山　12号住居

1　茶褐色土　しまり、粘性やや強、炭化粒微量含、粒子やや粗
2　茶褐色土　しまり、粘性やや強、ローム微量含、粒子やや粗
3　明茶褐色土　しまり、粘性やや強、焼土、ローム粒微量含、粒子やや粗
4　暗茶褐色土　しまり、粘性強、ローム微量含、粒子やや粗
5　茶褐色土　しまり、粘性やや強、焼土、ローム、炭火性微量含、粒子やや粗
6　灰茶褐色土　しまり、粘性やや強、粘土性、焼土性ややや多含、粒子やや粗、凝灰岩片やや多含
7　暗灰茶褐色土　しまり、粘性やや強、焼土粘土粒少量含、粒子粗
8　茶褐色土　しまり、粘性やや強、焼土砂粒微量含、粒子粗
9　灰茶褐色土　しまり、粘性やや強、粘土性少量、焼土微量含、粒子粗
10　明灰茶褐色土　しまり、粘性やや強、粘土少量含、粒子やや粗
11　茶褐色土　しまり、粘性やや強、焼土、粘土微量含、粒子やや粗
12　明褐色土　しまり、粘性強、焼土、粘土ム微量含、粒子やや粗
13　茶褐色土　しまり、粘性強、ローム多く、焼土微量含、粒子やや粗
14　赤茶褐色土　しまり、粘性やや強、焼土多量、凝灰岩片やや多含、粒子粗

第25図　丸山遺跡第12号住居跡出土遺物分布図

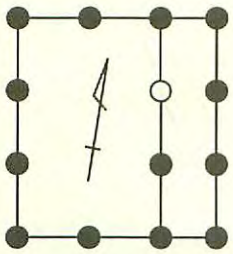
b. 掘立柱建物跡

第１号掘立柱建物跡［SB-１］（第26図）



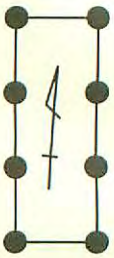
調査区G-３グリット内に位置する。東西棟、３×２間、全柱穴がそろう。5.42×3.4m、柱間距離は桁行約1.8m、梁行約1.8m測る。床面積は18.42㎡、主軸はN-80.5°-Wの方位を持つ側柱建物である。柱穴の掘方は略規模の等しい円形で、直径は60～70cm、深さ40～50cmを測る。P34・P32・P36・P33・P32には直径25～32cmほどの柱痕が確認できることから建て替えはなされていない。遺物は土師器の小破片が柱穴より出土したのみで時期を特定できるものはなかった。

第２号掘立柱建物跡［SB-２］（第27図）



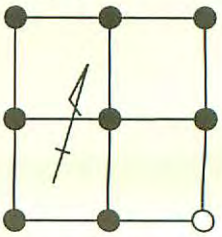
調査区G-２グリット内に位置する。南北棟、３×２間、東面に庇がつく。柱穴は攪乱のため一部未確認。5.32×3.36m・柱間距離は桁行約1.8m、梁行約1.6m測る。床面積は17.84㎡、主軸はN-９°-Wの方位を持つ側柱建物である。柱穴の掘方は、略円形または楕円形で直径は60～70cmを測る。P17・P41・P42では直径25～28cmほどの柱痕が確認できるが掘方のずれる柱穴もあり、建て替の可能性がある。遺物は土師器の小破片が柱穴より出土したのみで時期を特定できるものはなかった。しかし、隣接する第３号掘立柱建物跡の柱穴を切って本建物跡が建てられている。また、南側柱列に沿って柱間約1.8mの柱穴列があり、規模の小さい庇か柵・塀等の遮蔽物が設けられていた可能性もある。

第３号掘立柱建物跡［SB-３］（第27図）

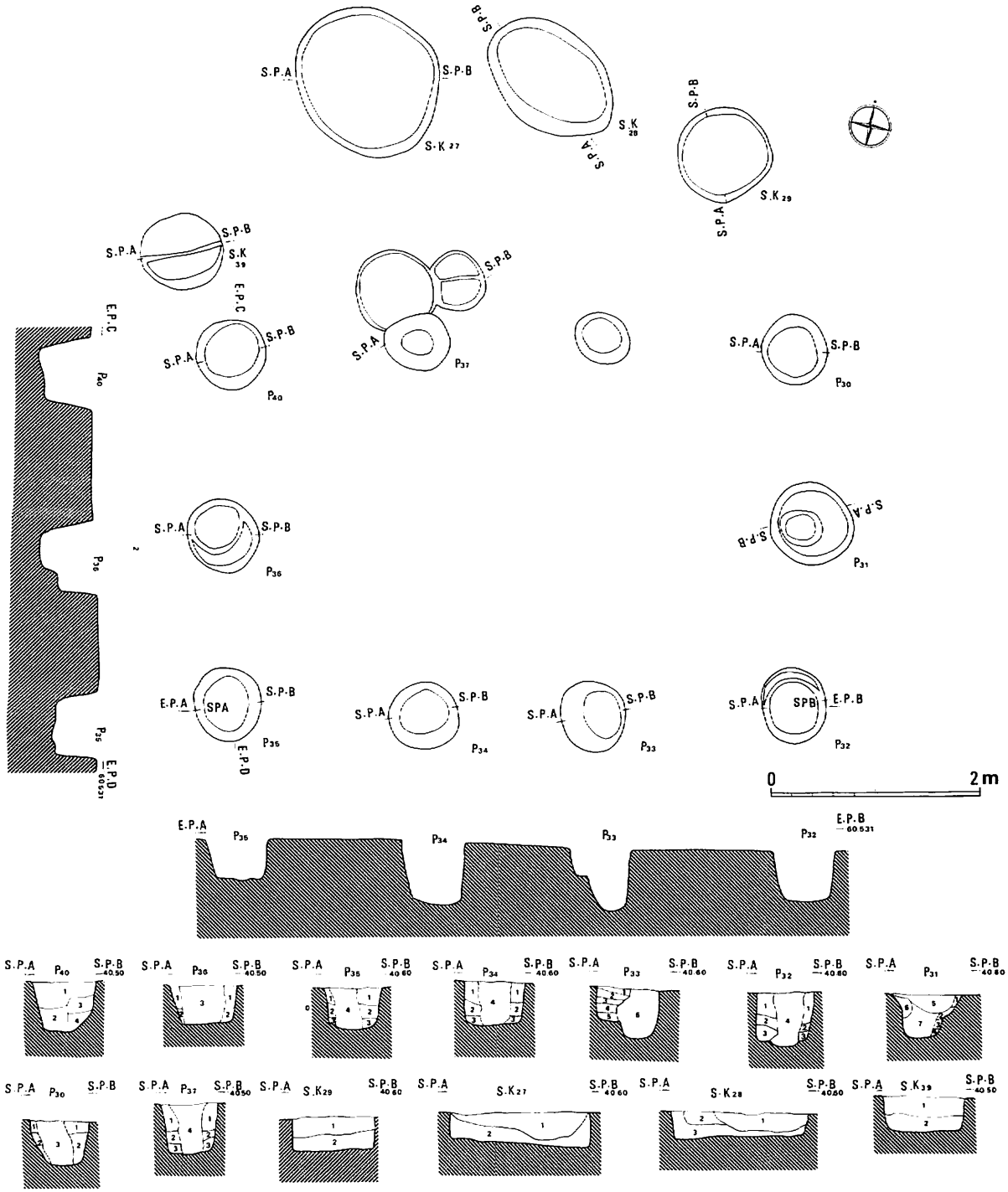


調査区G-２グリット内に位置する。南北棟、３×１間、全柱穴がそろう。５×1.73m、柱間距離は桁行約1.8m、梁行約1.8m測る。床面積は8.65㎡、主軸はN-3.5°-Wの方位を持つ側柱建物である。柱穴の掘方は略規模の等しい円形で、直径は30～35cm、深さ35～45cmを測る。柱痕は確認できないが建て替えはなされていない。遺物は柱穴埋め土中より須恵器坏が出土している。切り合から第２号掘立柱建物跡より前に建てられている。

第４号掘立柱建物跡［SB-４］（第28図）



調査区F-２グリット内に位置する。３×３間、柱穴は攪乱のため一部未確認。4.55×4.2m、柱間距離は桁行・梁行とも約3.3～1.8mを測る、不ぞろいで平面形がやや歪んでいる。床面積は19.11㎡、主軸はN-17.5°-Wの方位を持つ総柱建物と推定するが、南側に庇をもつ建物であるかもしれない。柱穴の掘方は、略円形または楕円形で直径は30～40cmを測る。遺物は土師器の小破片が柱穴より出土したのみで時期を特定できるものはなかった。重複する第５号掘立柱建物跡との前後関係は不明である。



40　柱穴
1　黒褐色土
2　暗茶褐色土　柱穴
3　暗茶褐色土 ｝埋土
4　灰褐色土

36　柱穴
1　茶褐色土　ローム塊、黒色土混り
2　暗褐色土　ローム塊、黒色土混り
3　黒褐色土　ローム塊、黒色土混り、柱穴

30　柱穴
1　黒褐色土　ローム粒子混り　黒褐
2　茶褐色土　黒色土混り
3　黒褐色土　砂質

37　柱穴
1　暗褐色土
2　黒茶色土　ローム粒子
3　黒茶色土　ローム粒子
4　黒　色　土　ローム粒子、焼土混り、柱穴

35　柱穴
1　黒茶色土　ローム粒子混り ｝埋土
2　茶褐色土　ローム塊混り
3　茶褐色土　ローム塊混り
4　暗褐色土　ローム塊混り、柱穴

34　柱穴
1　黒茶色土　ローム塊混り
2　黒茶色土　ローム塊混り
3　茶褐色土　ローム塊混り
4　黒褐色土　ローム粒子混り

29　土坑
1　黒褐色土
2　茶褐色土

27　土壙
1　黒色土　ローム粒子が多い
2　黒色土　褐色味が強い

33　柱穴
1　茶褐色土　ローム塊混り
2　黒　色　土　ローム塊混り
3　黒褐色土　ローム塊混り
4　茶褐色土　ローム塊
5　褐　色　土
6　黒茶褐色土　細粒、ローム粒子

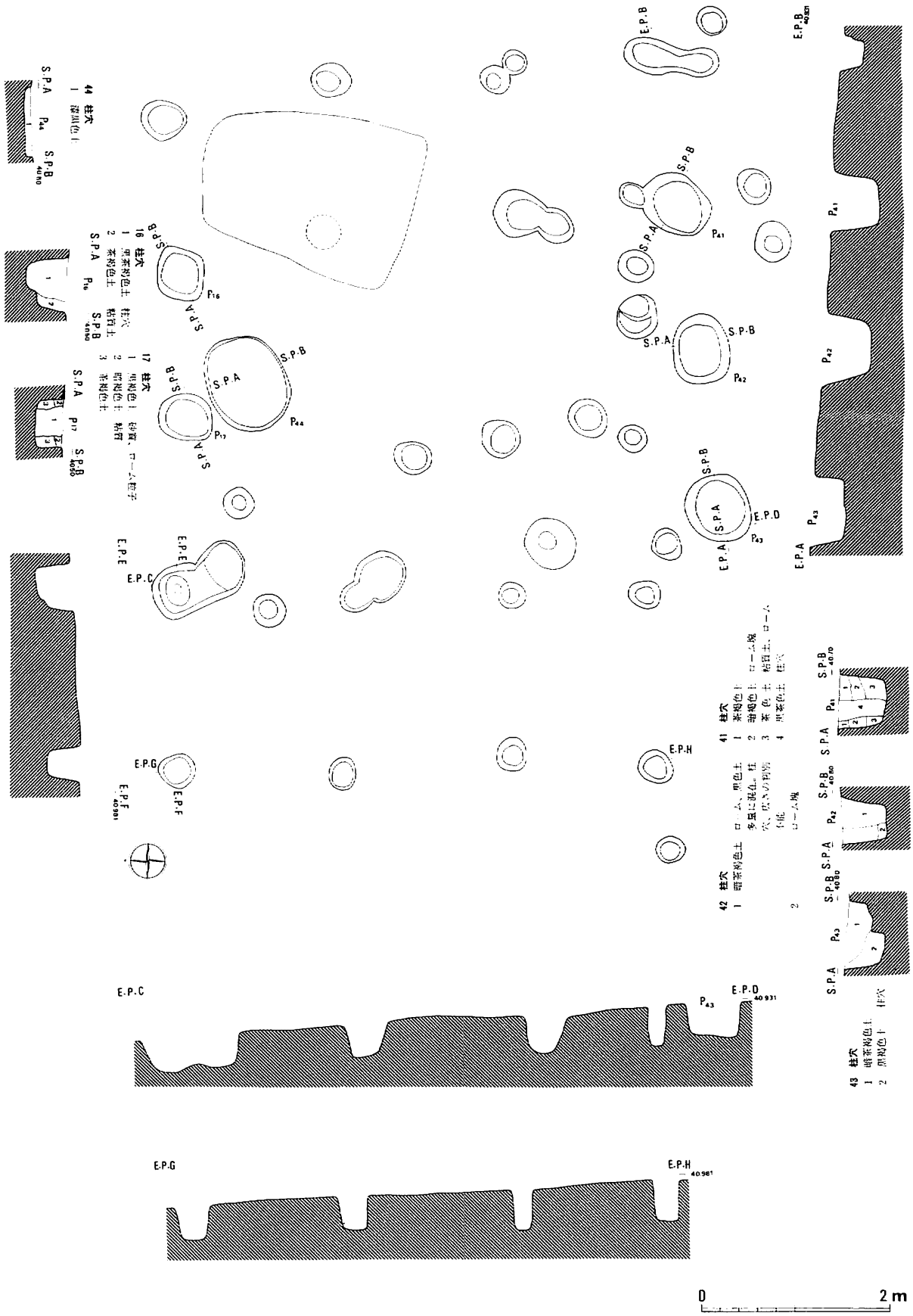
32　柱穴
1　黒褐色土　ローム混り ｝埋土
2　黒褐色土　ローム塊混り
3　黒茶色土　ローム塊混り
4　黒茶色土　柱穴

28　土壙
1　黒茶色土　ローム粒子
2　黒　色　土　炭化物が多い
3　茶褐色土

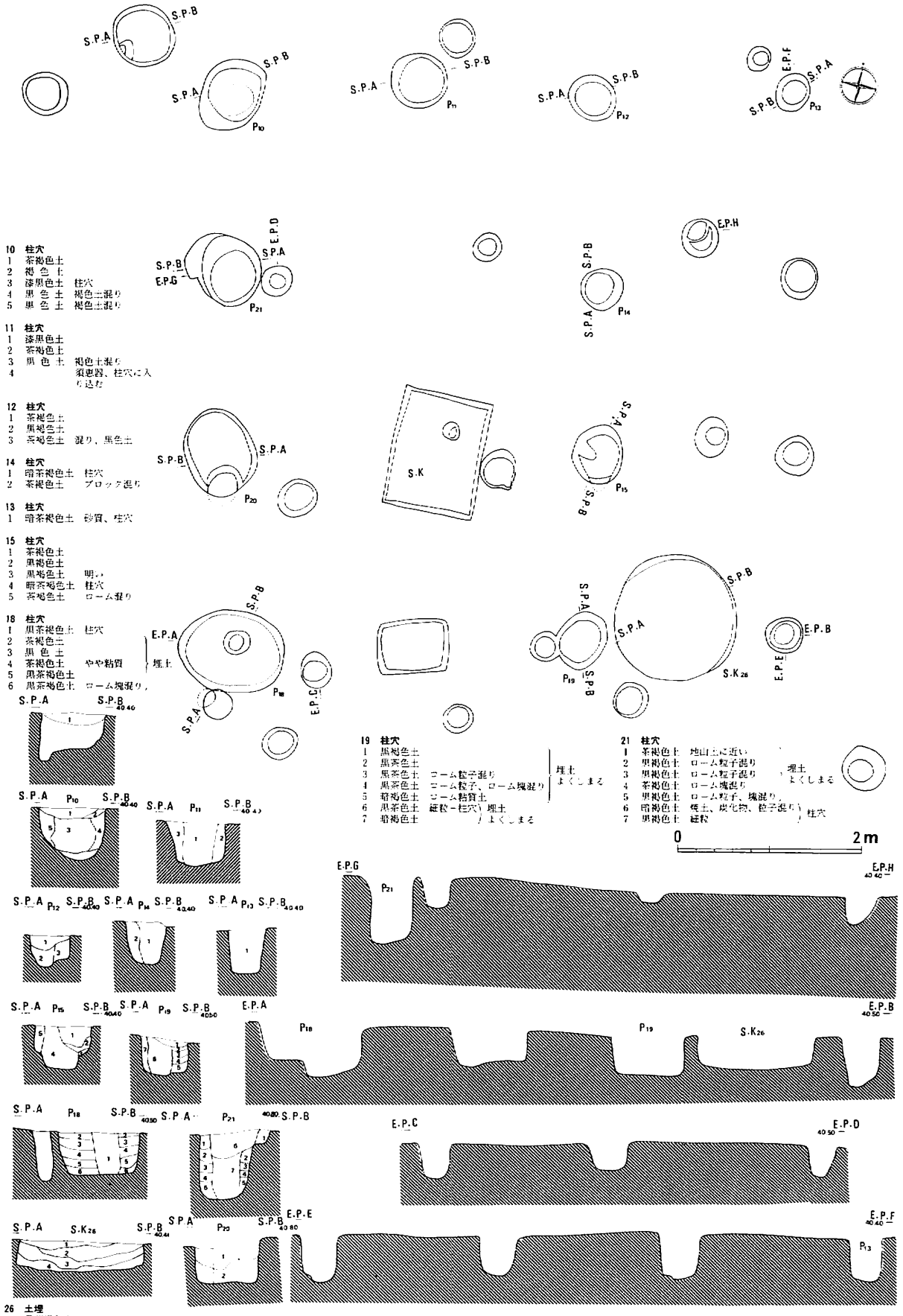
31　柱穴
1　暗茶褐色土
2　暗茶褐色土　ローム粒子が多い
3　茶褐色土
4　茶褐色土　ローム塊
5　黒褐色土　ローム粒子混り
6　茶褐色土
7　黒茶色土　砂質、柱穴

39　土壙
1　茶褐色土
2　暗褐色土

第26図　丸山遺跡第１号堀立柱建物跡平面図（1/3）

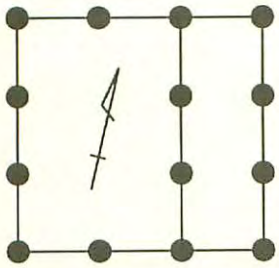


第27図　丸山遺跡第２・３号堀立柱建物跡平面図（1/60）



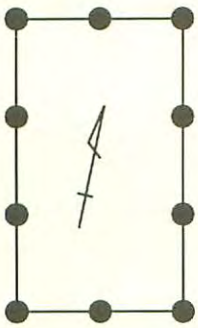
第28図　丸山遺跡第４・５号堀立柱建物跡平面図（1/60）

第５号掘立柱建物跡［SB-５］（第28図）



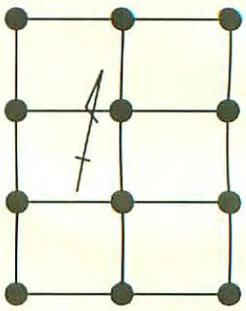
調査区Ｆ-２グリット内に位置する。南北棟、３×２間、東面に庇がつく。柱穴は攪乱のため一部未確認。6.1×3.89m、柱間距離は桁行約1.8m、梁行約1.9m測る。床面積は23.72m²、主軸はN-12.5°-Wの方位を持つ側柱建物である。西側柱列では70～90cmの大きな掘方をもち、Ｐ21、Ｐ20の柱穴は掘り方に建て替えの切り合が見られる。東側柱列は直径60～45cmとやや小ぶりである。庇の出は2.1mを測る。庇柱は30～40cmの小さな掘方で建て替えの跡は見られないことから、身舎の建て替え時に庇を取り付けたものと思われる。Ｐ11からは柱を建てた際に埋め込まれた須恵器坏が出土しており、建て替え時期を示すと考えられた。また、北側柱列と南側柱列に沿って柱間約1.8mの柱穴列があり、規模の小さい庇か柵・塀等の遮蔽物が設けられていた可能性もある。

第６号掘立柱建物跡［SB-６］（第29図）

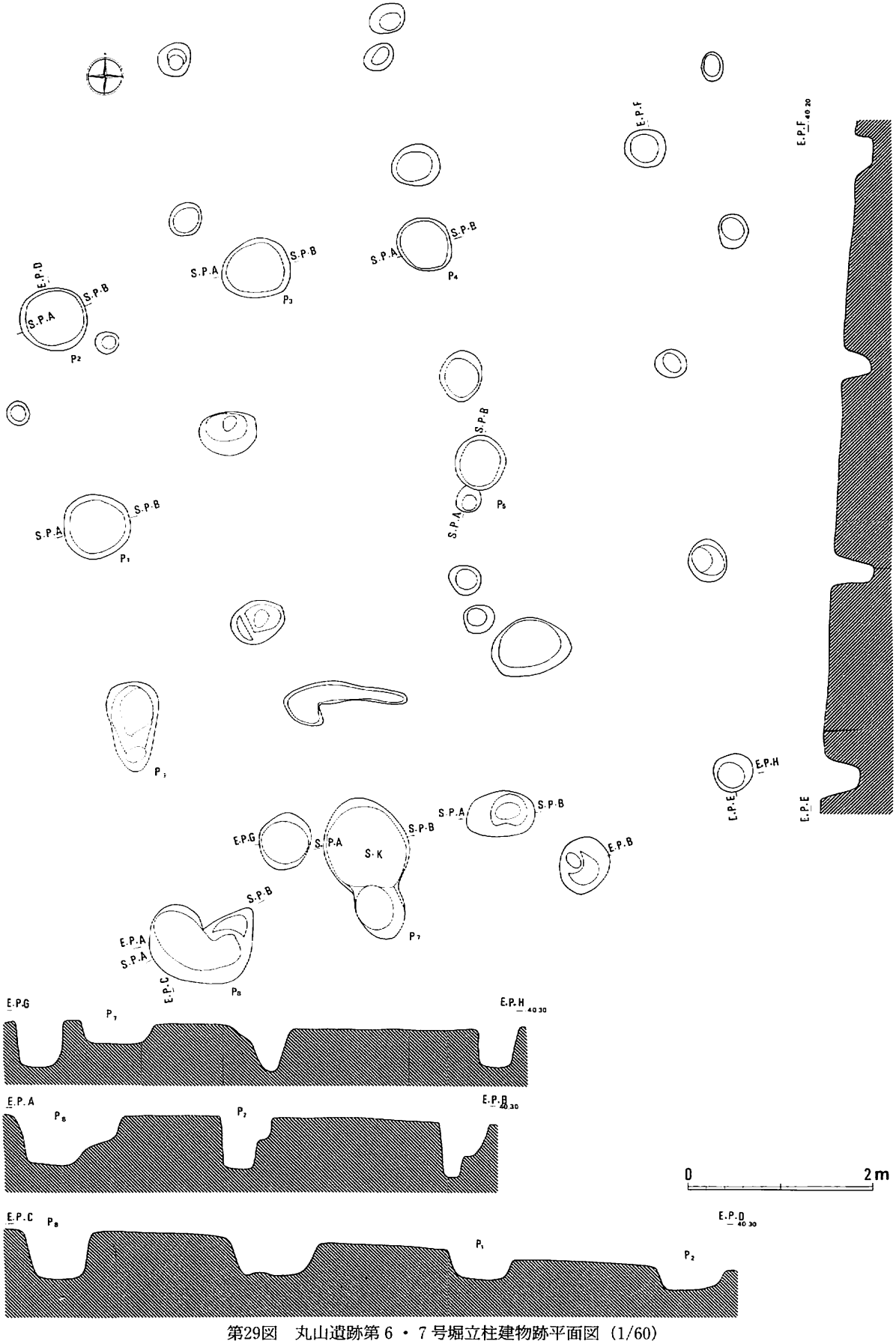


調査区Ｅ-２グリット内に位置する。南北棟、３×２間、柱穴は全部そろっている。6.75×4.1m、柱間距離は桁行約2.2m、梁行約2.0mを測る。床面積は27.67m²、主軸はN-9.5°-W の方位を持つ側柱建物である。柱穴掘方は円または楕円形で直径50～70cmを測る。Ｐ８、Ｐ９には掘方の切り合があり、建て替えられている。遺物はほとんど出土しておらず時期を特定できるものはない。第７号掘立柱建物跡と重複するが切り合がなく前後関係は不明である。

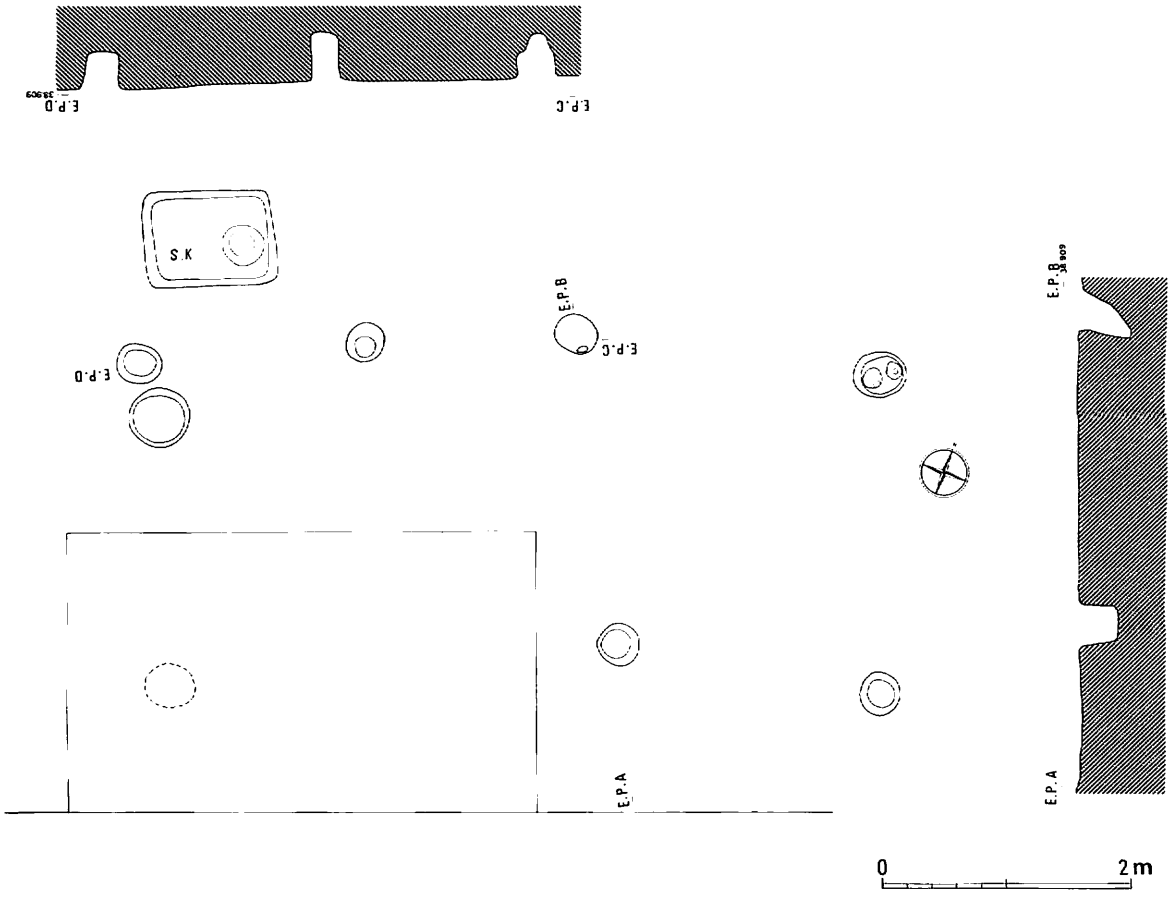
第７号掘立柱建物跡［SB-７］（第29図）



調査区Ｅ-２グリット内に位置する。南北棟、３×２間、柱穴全部そろっている。6.95×4.25m、柱間距離は桁行約2.4m、中央間2.1m、梁行約2.1mを測る。床面積は29.53m²、主軸はN-12.5°-Wの方位を持つ総柱建物である。柱穴掘方は円または楕円形で直径30～50cmを測る。遺物はほとんど出土しておらず時期を特定できるものはない。第６号掘立柱建物跡より規模が大きく、また重複するが切り合がなく前後関係は不明である。

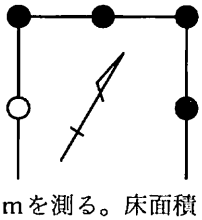


第29図　丸山遺跡第６・７号堀立柱建物跡平面図（1/60）

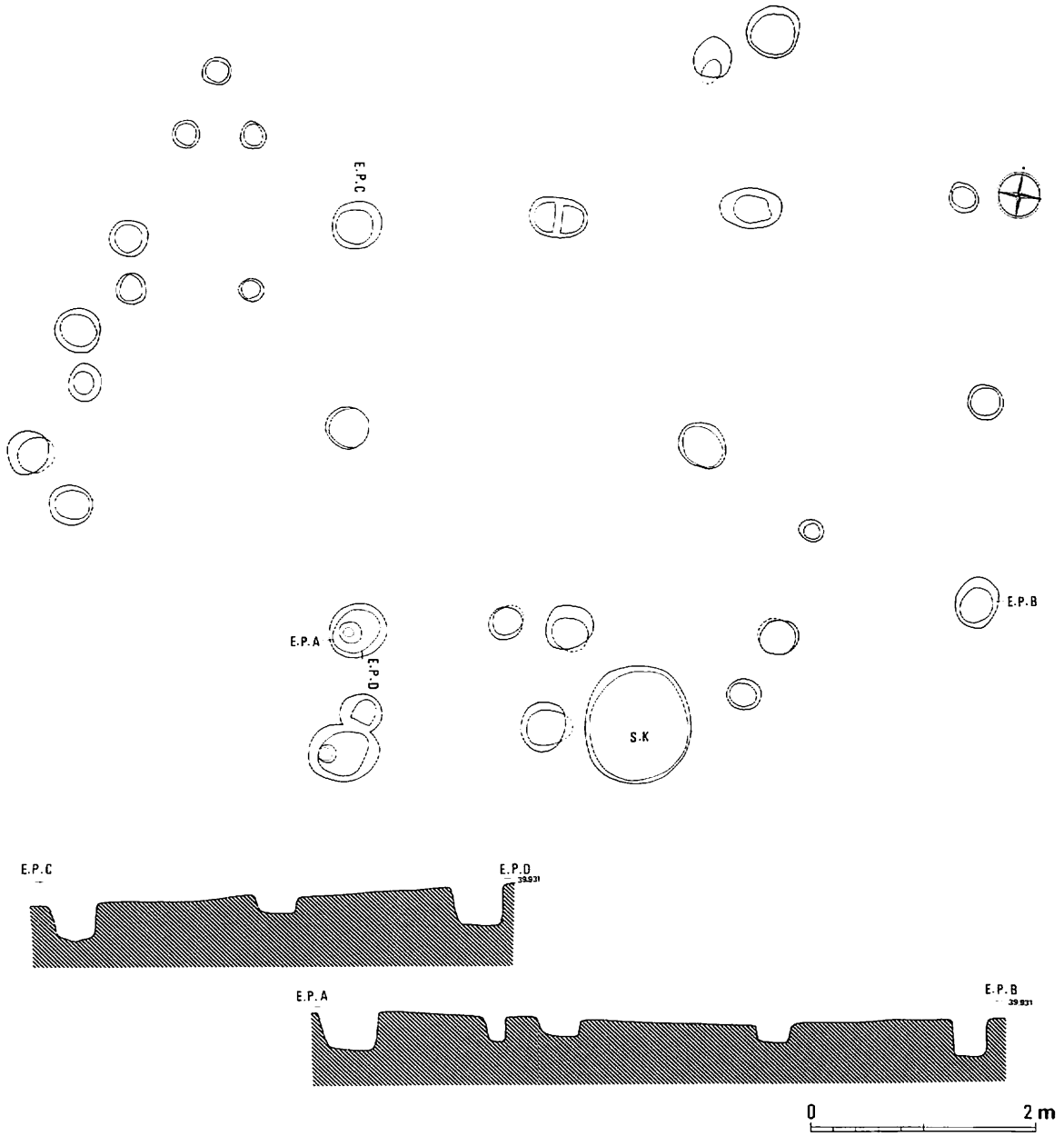


第30図　丸山遺跡第８号堀立柱建物跡平面図（1/60）

第８号掘立柱建物跡［SB-８］（第30図）

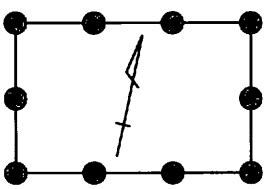


調査区E-４グリット内に位置する。南半部が調査区外に伸びると推定される。南北棟、-×２間、(3.65)×3.6m・柱間距離は桁行約2.4m、梁行約1.8mを測る。床面積は(13.14)m²、主軸はN-31°-Wの方位を持つ総柱建物である。柱穴掘方は円または楕円形で直径25～40cmを測る。遺物はほとんど出土しておらず時期を特定できるものはない。

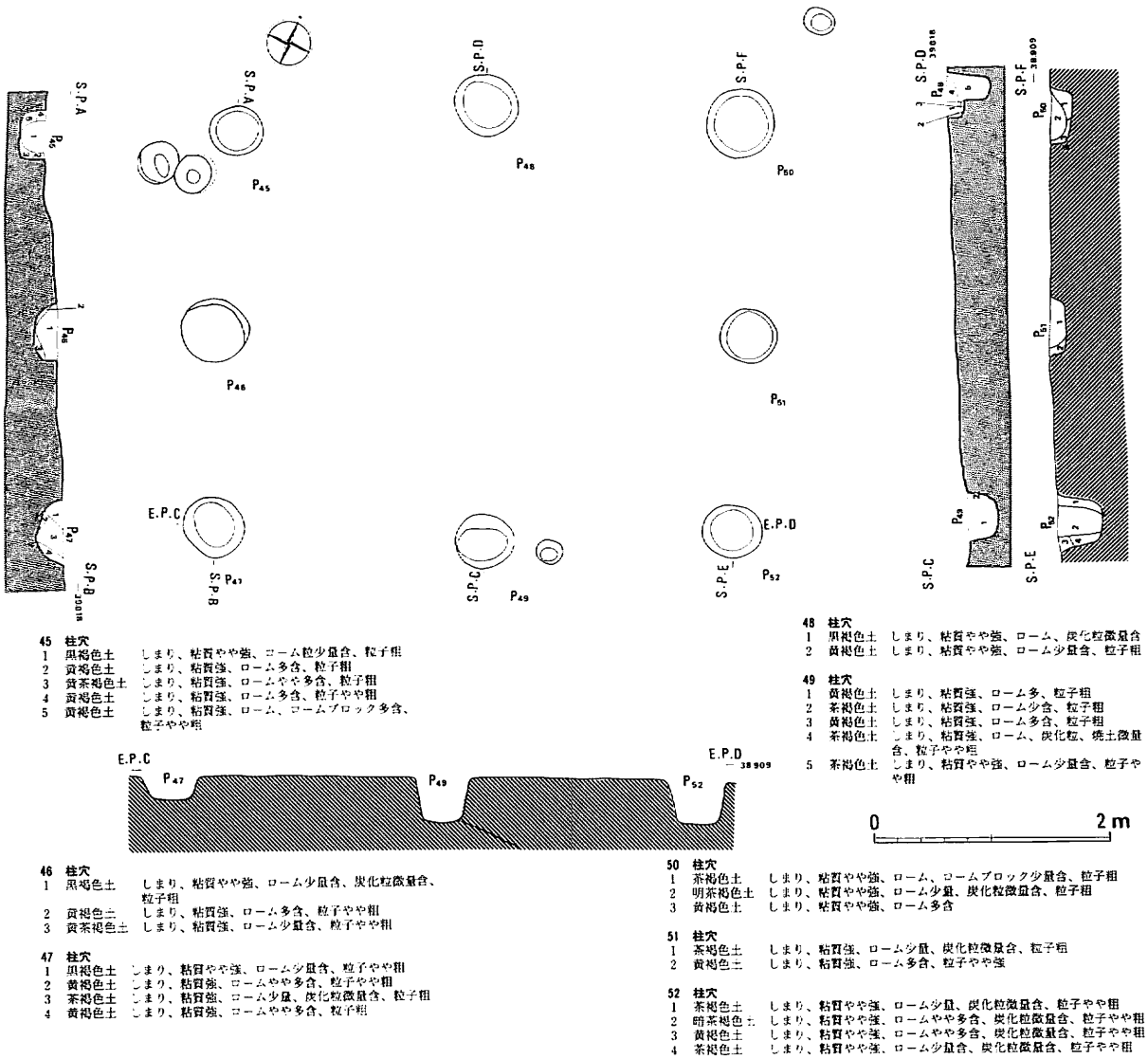


第31図　丸山遺跡第９号堀立柱建物跡平面図（1/60）

第９号掘立柱建物跡［SB-９］（第31図）

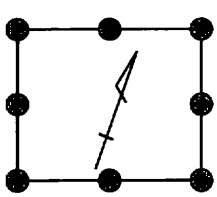


調査区E-３グリット内に位置する。東西棟、３×２間、5.5×3.65m、柱間距離は桁行約1.8m、梁行約1.8mを測る。床面積は20.07m²、主軸はN-77°-Wの方位を持つ側柱建物である。柱穴掘方はほぼ円形で直径30～45cmを測る。遺物はほとんど出土しておらず時期を特定できるものはない。北側柱列から西隅にかけて柱穴列が認められることから塀等の遮蔽物があったとも考えられる。また南側柱列の二間分に柱間の等しい柱穴列があり部分的な庇があったとも考えられる。

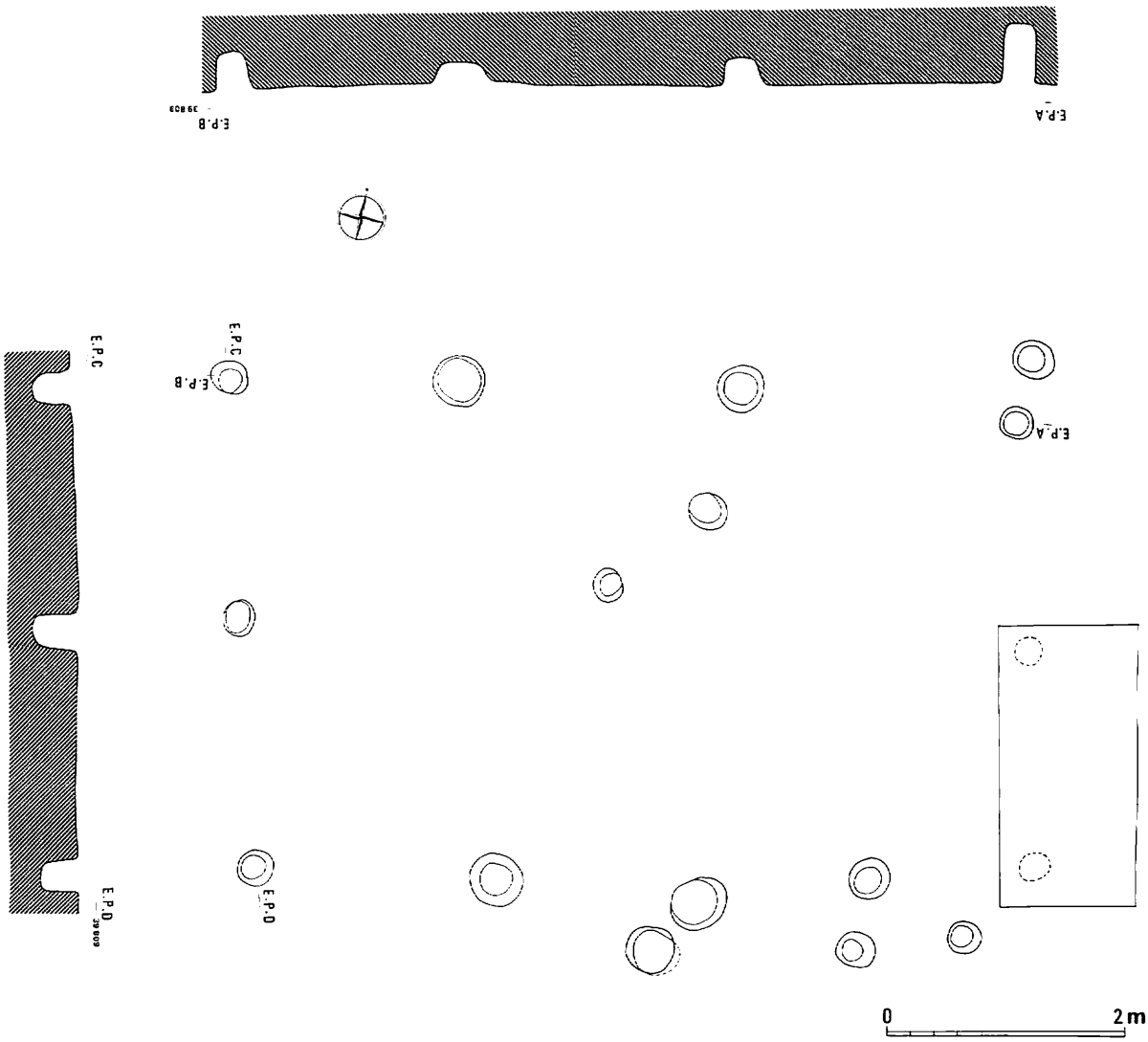


第32図　丸山遺跡第10号堀立柱建物跡平面図（1/60）

第10号掘立柱建物跡［SB-10］（第32図）

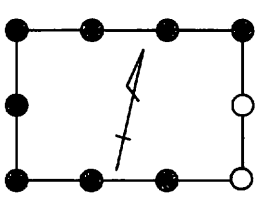


調査区E－4グリット内を中心に位置する。東西棟、2×2間、4,4×3.5m、柱間距離は桁行約2.1m、梁行約1.8mを測る。床面積は15.4m²、主軸はN-70.5°-Eの方位を持つ側柱建物である。柱穴掘方はほぼ円形で直径30～50cmを測る。遺物はほとんど出土しておらず時期を特定できるものはない。

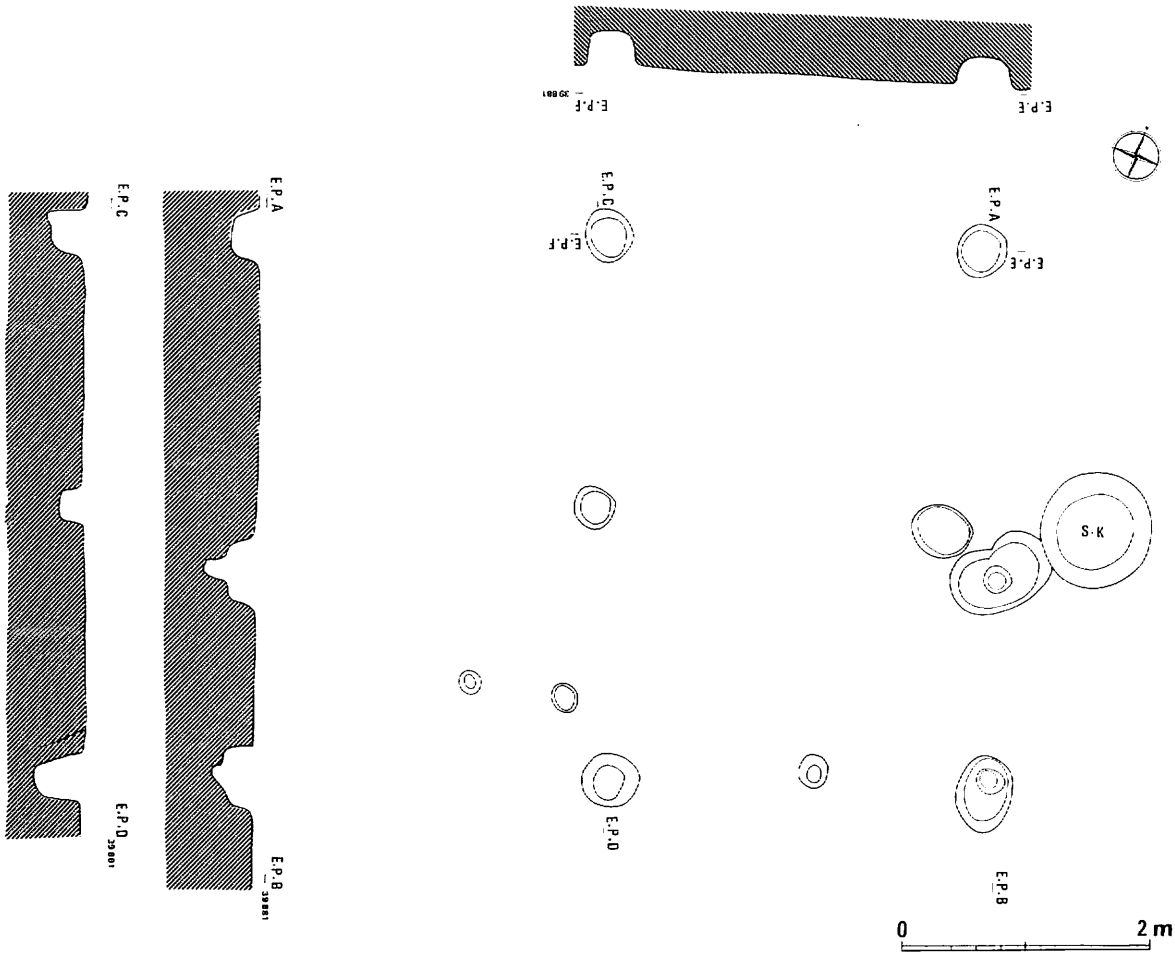


第33図　丸山遺跡第11号堀立柱建物跡平面図（1/60）

第11号掘立柱建物跡［SB-11］（第33図）

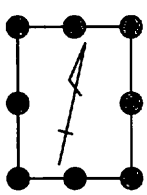


調査区D-4～D-5グリット内に位置する。東西棟、3×2間、6.6.×3.88m、部分的な攪乱のため柱穴は一部未確認である。柱間距離は桁行約1.8～2.4m、梁行約1.8mを測るが一定しない。床面積は25.6m²、主軸はN-85.5°-Eの方位を持つ側柱建物である。柱穴掘方はほぼ円形で直径30～40cmを測る。遺物はほとんど出土しておらず時期を特定できるものはない。

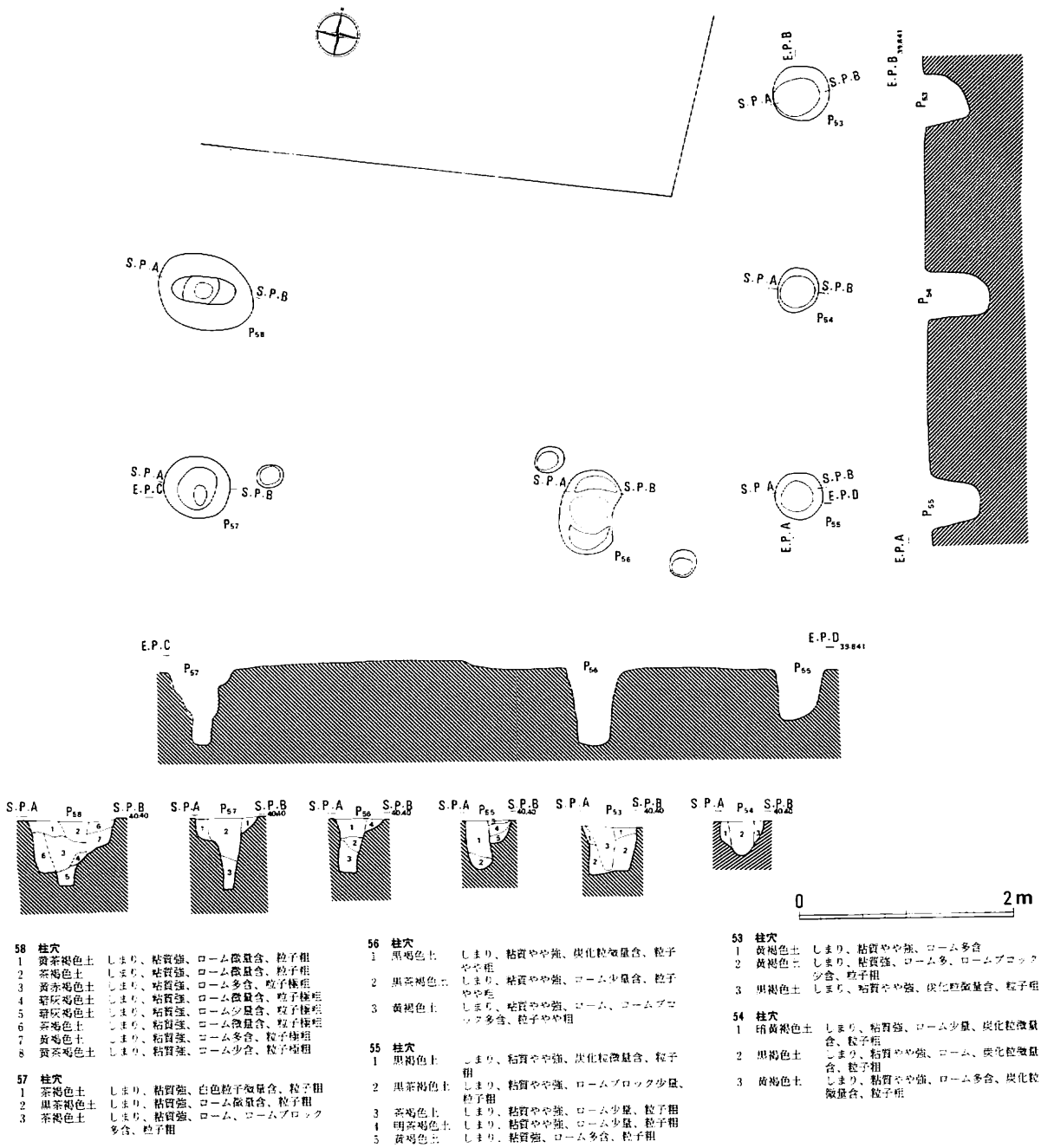


第34図　丸山遺跡第12号堀立柱建物跡平面図（1/60）

第12号掘立柱建物跡［SB-12］（第34図）

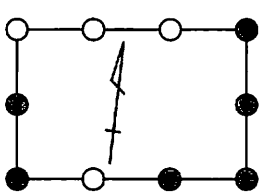


調査区C-4、D-4グリット内に位置する。南北棟、2×2間、4.37×3.08m、柱間距離は桁行約2.1m（西側柱）、1.5～2.7m（東側柱）、梁行は約3mを測るが、南側柱間では中央間の等分する位置に柱穴がある。床面積は13.45m²、主軸はN-18°-Wの方位を持つ側柱建物である。柱穴掘方はほぼ円形で直径38～50cmを測る。遺物はほとんど出土しておらず時期を特定できるものはない。北側柱列から西方にかけて柱穴列が認められることから第13号掘立柱建物跡まで続く塀等の遮蔽物があったとも考えられる。また西側では第13号掘立柱建物跡との間に柱穴列が認められる。



第35図　丸山遺跡第13号堀立柱建物跡平面図（1/60）

第13号掘立柱建物跡［SB-13］（第35図）



調査区D-3グリット内に位置する。北側柱列の大部分は区域外に延びている。東西棟、3×2間、5.45×3.73m、すべての柱穴を確認できていないが柱間距離は桁行約1.8m、梁行は約1.8mを測る。床面積は20.32m²、主軸はN-81°-Eの方位を持つ側柱建物である。柱穴掘方はほぼ円形で直径40～50cmを測る深くしっかりした掘方である。遺物はほとんど出土しておらず時期を特定できるものはない。また東側では第12号掘立柱建物跡との間に柱穴列が認められる。

c. その他の遺構

1）遮蔽施設

掘り方・規模・埋土状況・柱間寸法・そして建物との位置関係によって判断される柱穴列のあるものを考えている。これらの特徴を総合的にみても必ずしも納得のいく配置にはならない場合があり、検出し得なかった柱穴または復元し得なかった柱穴列が漏れている畏れが十分あるが、建物の周囲に配置していたと考えられるこれらの遺構が建物と一体のものであったと考え報告することにした。具体的には柵・塀・庇等の施設を考えているが、建物建設時の足場穴の可能性もあろうかと思われる。

以下に各々関係する建物の報告で取り上げた可能性の高いと思われる柱穴列(SA)を記しておく。

SA-1・第2号掘立柱建物跡の南側柱に並行する。2間分の柱穴列、柱間1.8m

SA-2・第5号掘立柱建物跡の南側柱に並行する。2間分の柱穴列、柱間1.8m

SA-3・第5号掘立柱建物跡の北側柱に並行する。2間分の柱穴列、柱間3.3m

SA-4・第7号掘立柱建物跡北～東側に並行する。4間分の柱穴列？、柱間不規則

SA-5・第9号掘立柱建物跡北～西側に並行する。3間分の柱穴列、柱間不規則

SA-6・第12～13号掘立柱建物跡の間　南北方向。2間分の柱穴列、柱間1.8m

SA-7・第12～13号掘立柱建物跡の北側　東西方向に柱間不規則

SA-8・第11号掘立柱建物跡の北方～東側に柱間不規則、SA-5と連続するかもしれない。

2）道状遺構(全体図・第36図土層)

調査区東方台地斜面部、40～38m部分に検出された。長さ8.6m上面幅約1.2～2.0m、底面通路幅70～80cmを測る。斜面部のため法面を広く開削しているが底面通路部分は一定の幅にしている。底面は段丘礫層まで掘削するため、法面には礫が露出するが、路面とした土層中には土師器・須恵器片を混じていた。検出地点は、台地上の集落から東側に侵入する小支谷に沿って谷開口部へ至ると推定される位置に当たり、下方には水場である湧水点、また耕作地であった和田川の沖積地を控えている。上方へは第10号と12号住居跡の間を通り掘立柱建物群へ通じていたと推定される。

3）土　壙

調査区には円形・長方形を呈する土壙が大まかに5群のまとまりをみせて検出された。竪穴住居跡・掘立柱建物跡と重複するものを除いては建物群を避けるような配置をみせ、台地縁辺部や建物周辺に分布の中心がある。土壙内からは出土遺物がほとんどないため時期の特定が困難だが、古代の遺構を主とする比較的短期間の遺跡であることを考慮すれば、これらの土壙も他の遺構と並行して掘削されたものと考えたい。そうであれば、特定地の集中傾向は当時の集落の行動規範に沿った結果と推定される。

A群　SB-1の北側　4基

B群　SB-5の西側　4基

C群　SB-11の東側～SI-5の間　6基

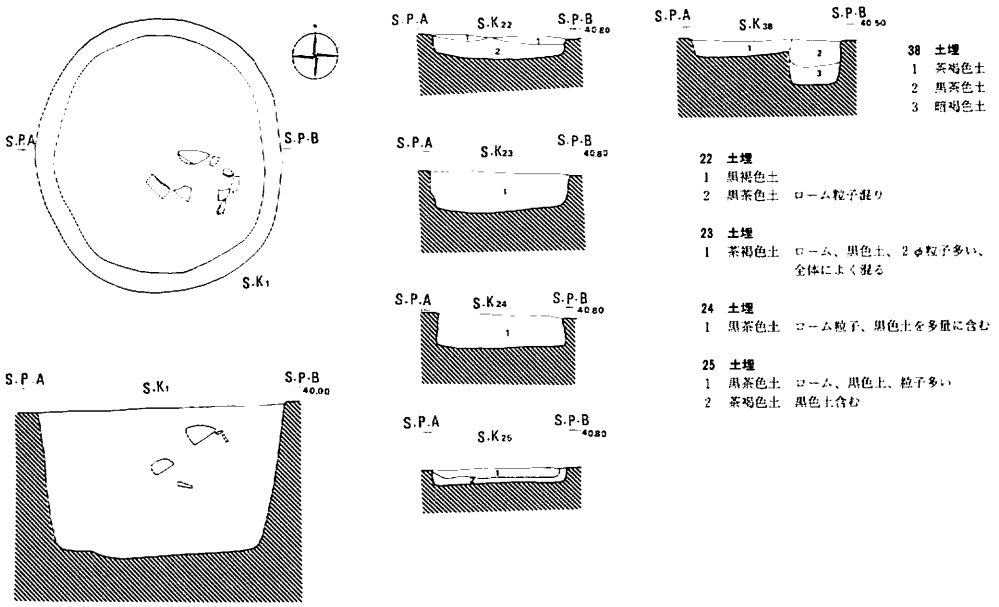
D群　SI-9の東側7基

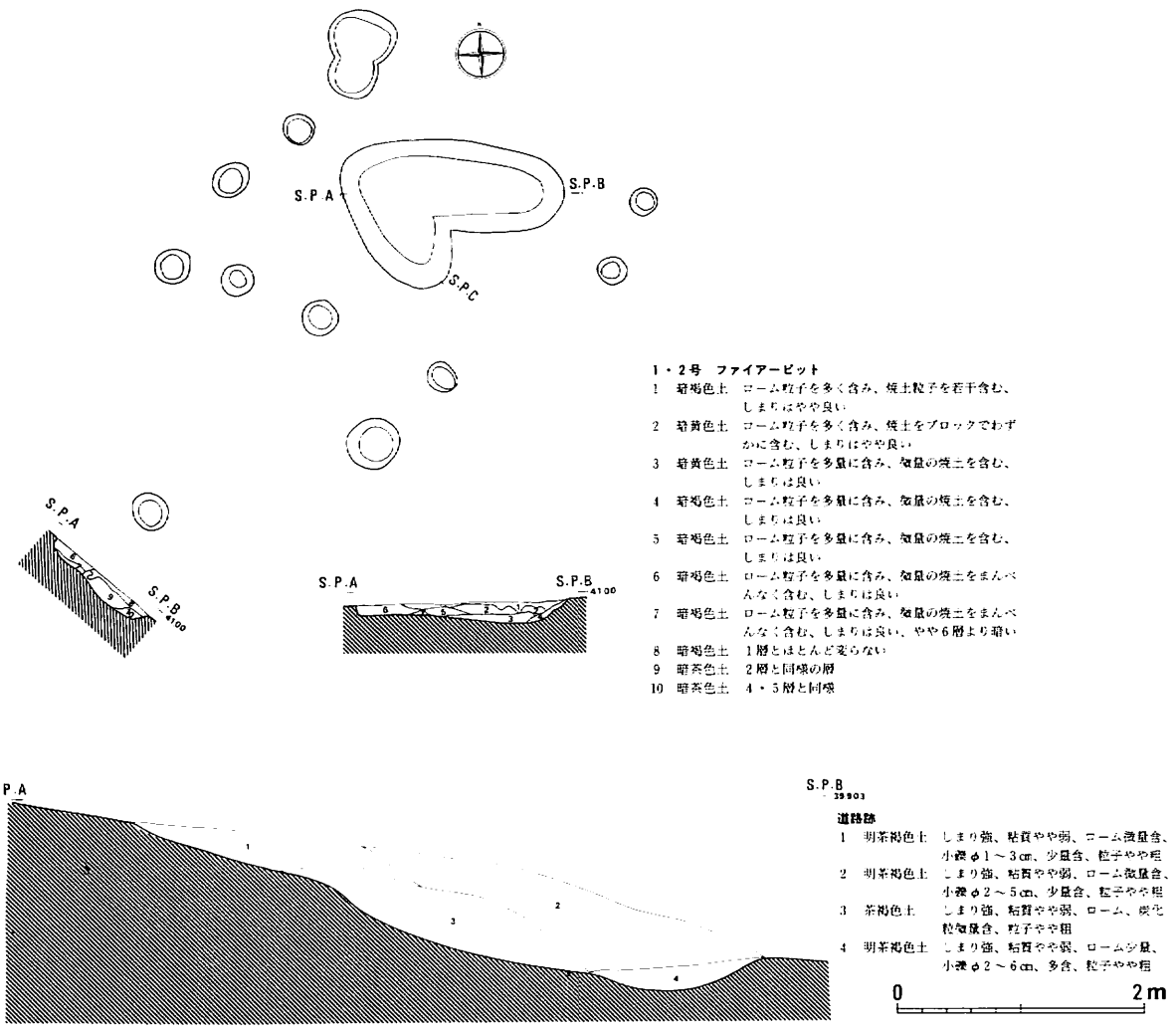
E群　SI-12の北側8基

なお、掘立柱建物等の建物内に位置する土壙などは地鎮の可能性も考えられるが確証がない。

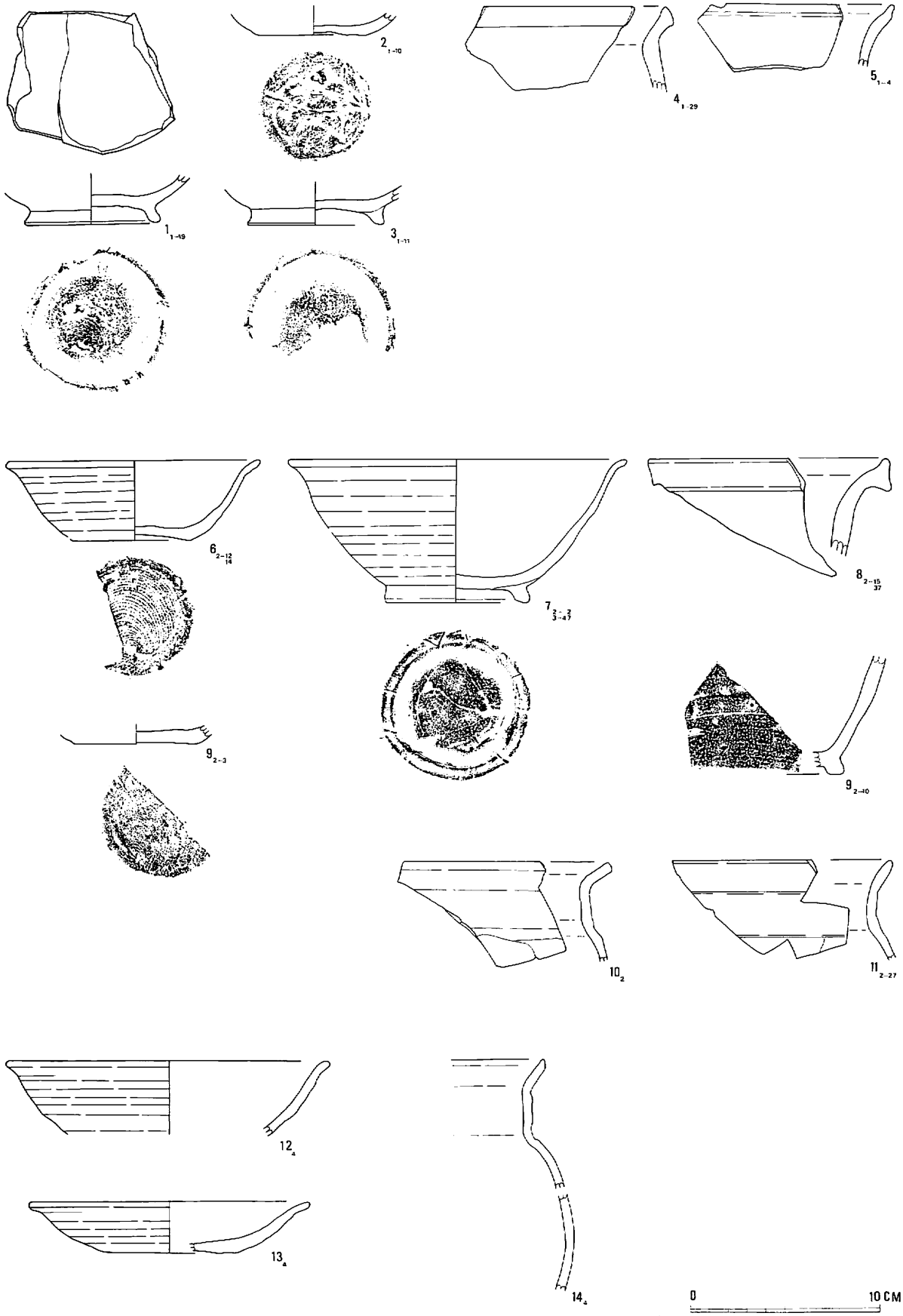
4）炉　穴

D-6に位置する。2基の重複によって構成されている。長径1.72m、短径0.72m、深さ最深部で21cmを測る大形の炉穴が新しい。西側に炉床がある。小形の炉穴は、長径0.64m、短径0.36cm、深さ最深部で32cmを測る。炉床は確認されていないが、大形の炉穴に切られた北側に位置していたものと推測される。周囲に、深さ20cm前後の小ピットが不規則に位置するが、本遺構に伴うものかは不明。覆土中より、遺物の出土は認められない。周囲からは、主に条痕文系土器が出土しており、本遺構も早期条痕文期に属する可能性が高い。

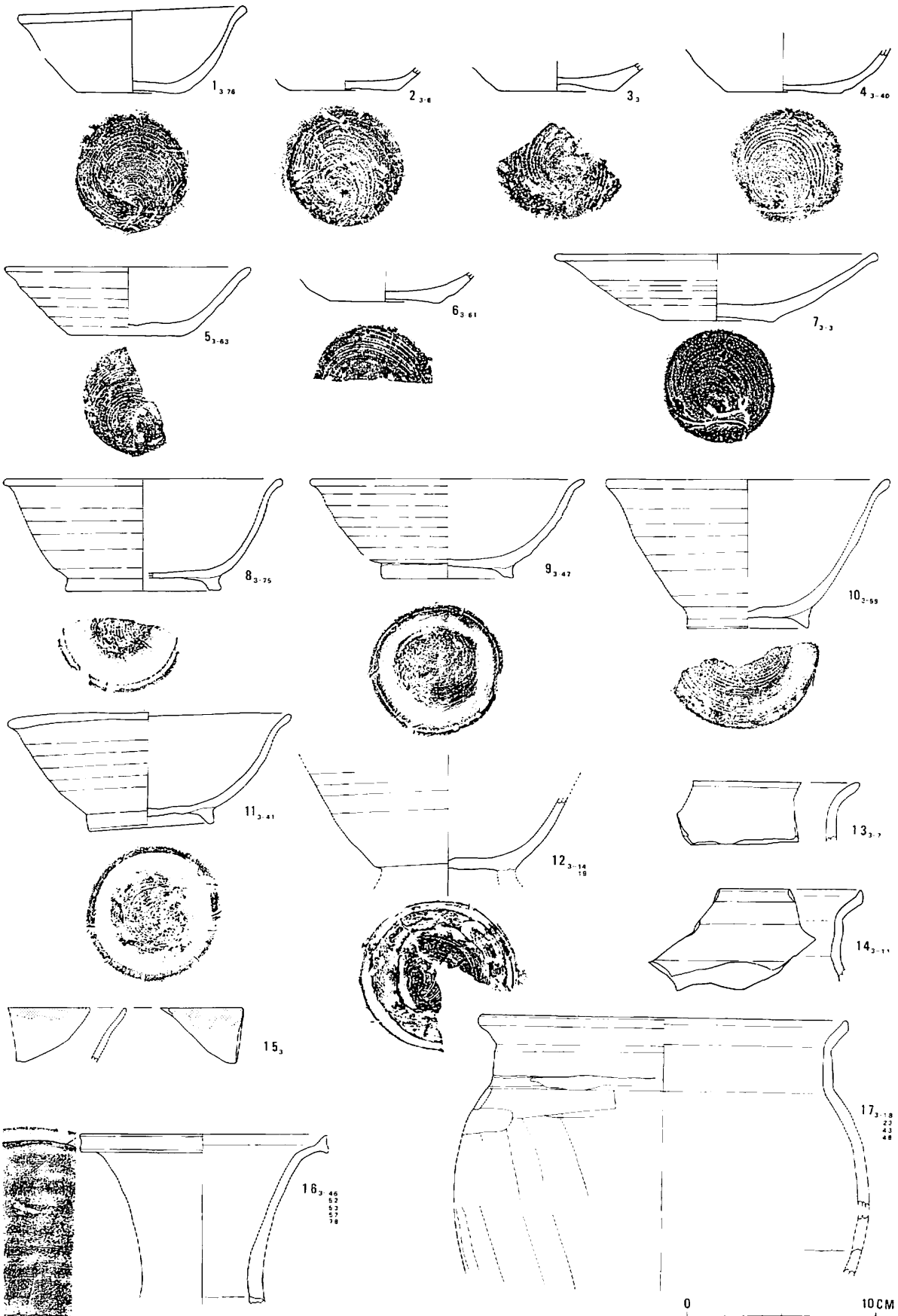




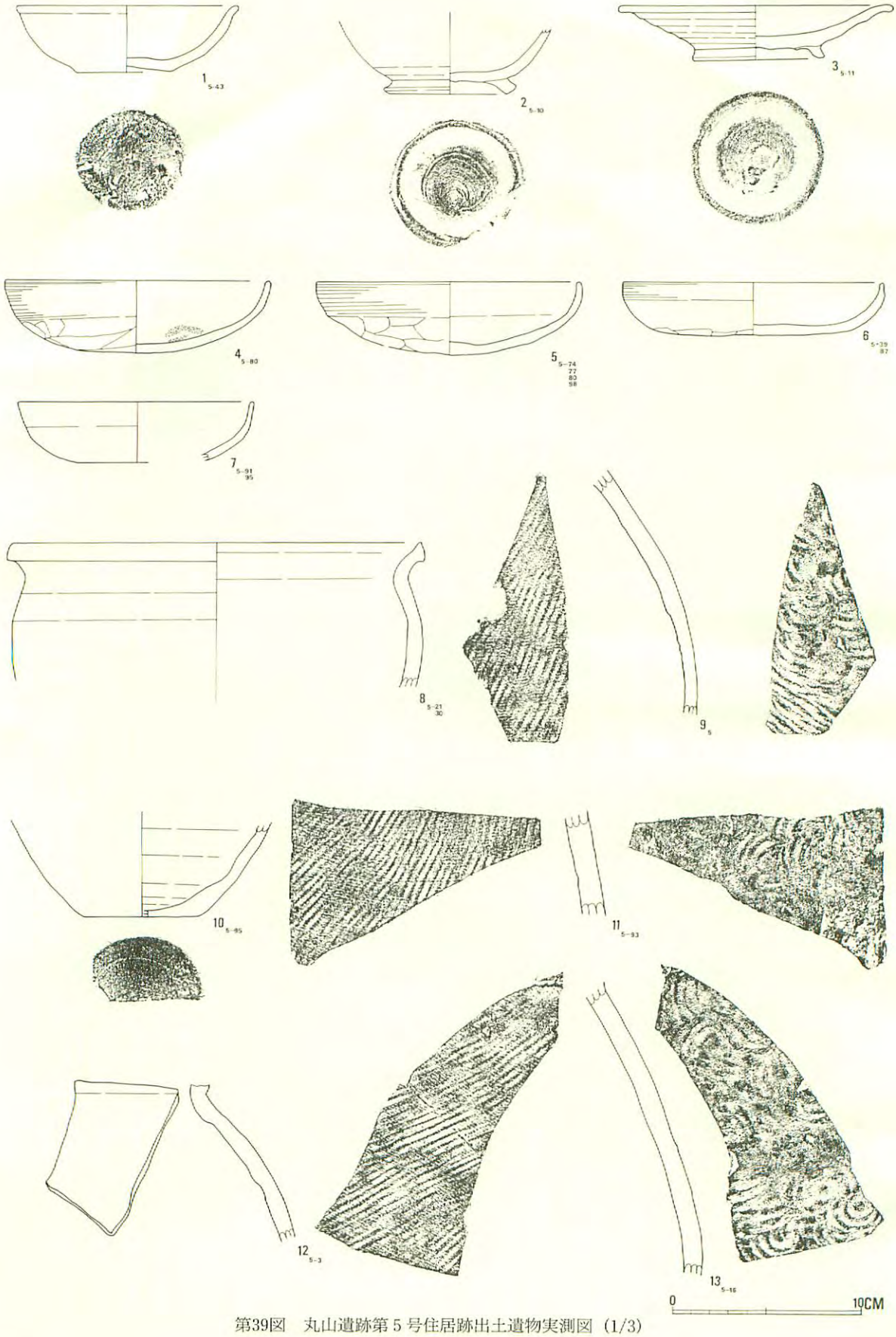
第36図　丸山遺跡第1号土壙・第1・2号炉跡平面図（1/60）



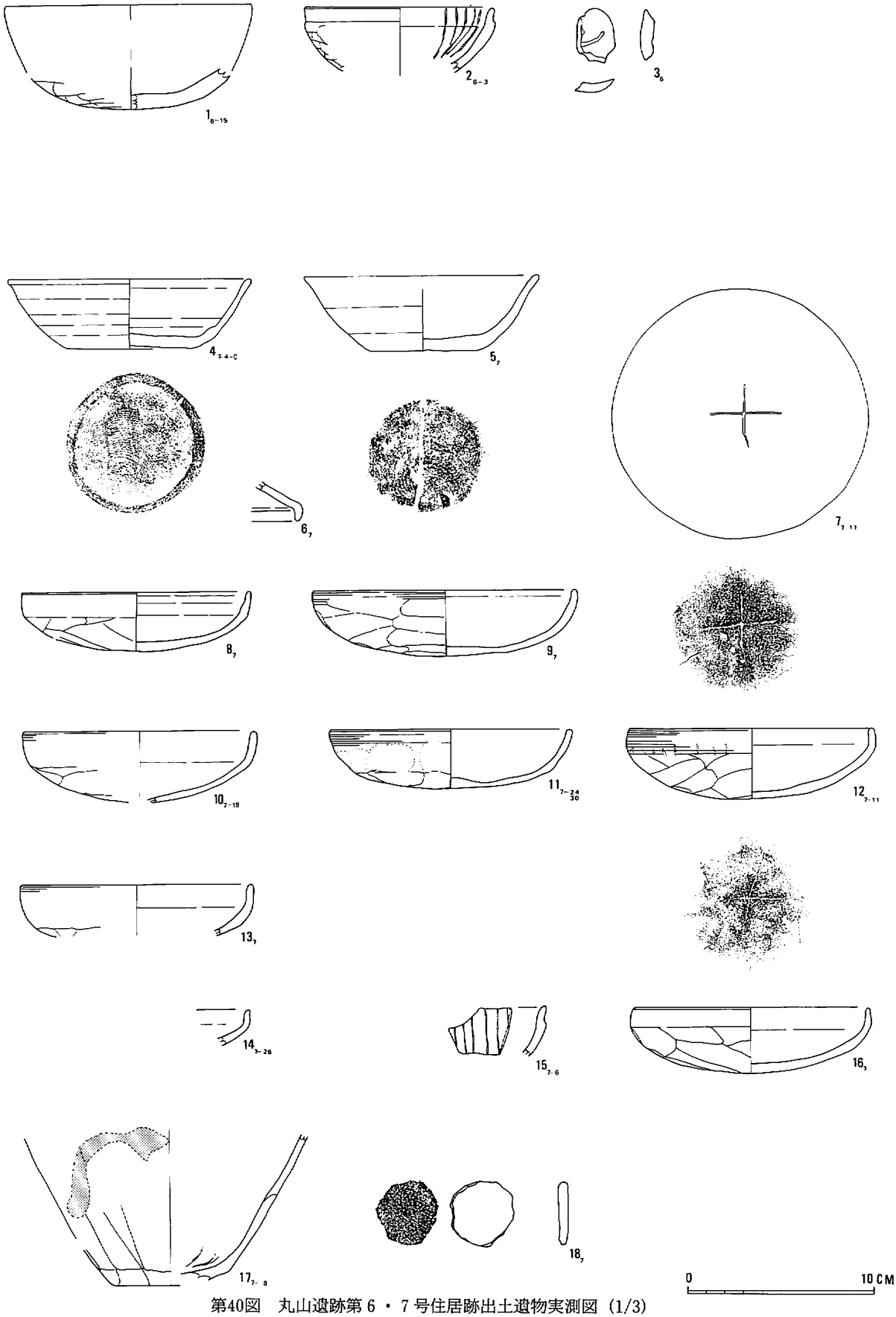
第37図　丸山遺跡第１・２・４号住居跡出土遺物実測図（1/3）



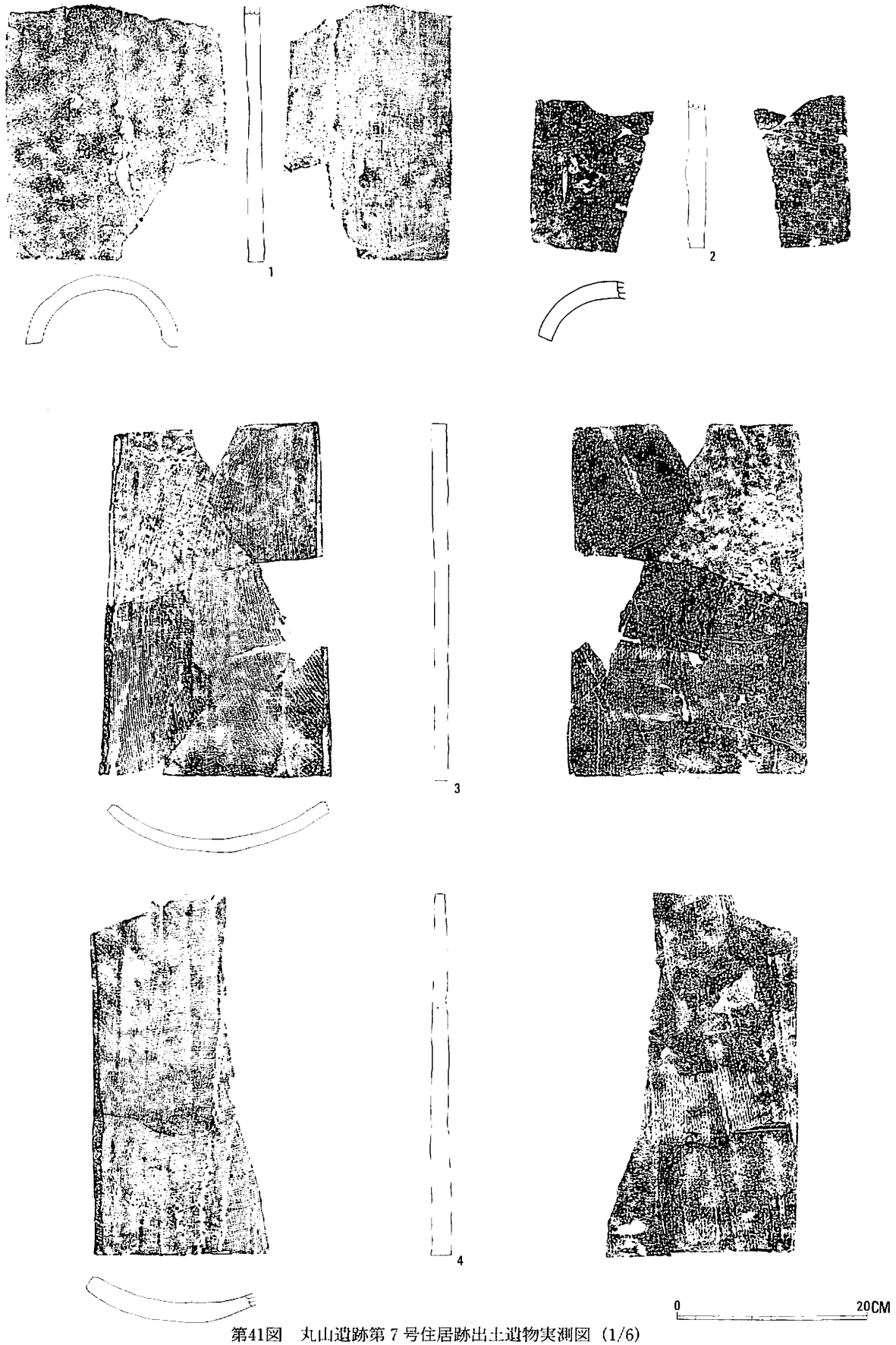
第38図　丸山遺跡第３号住居跡出土遺物実測図（1/3）



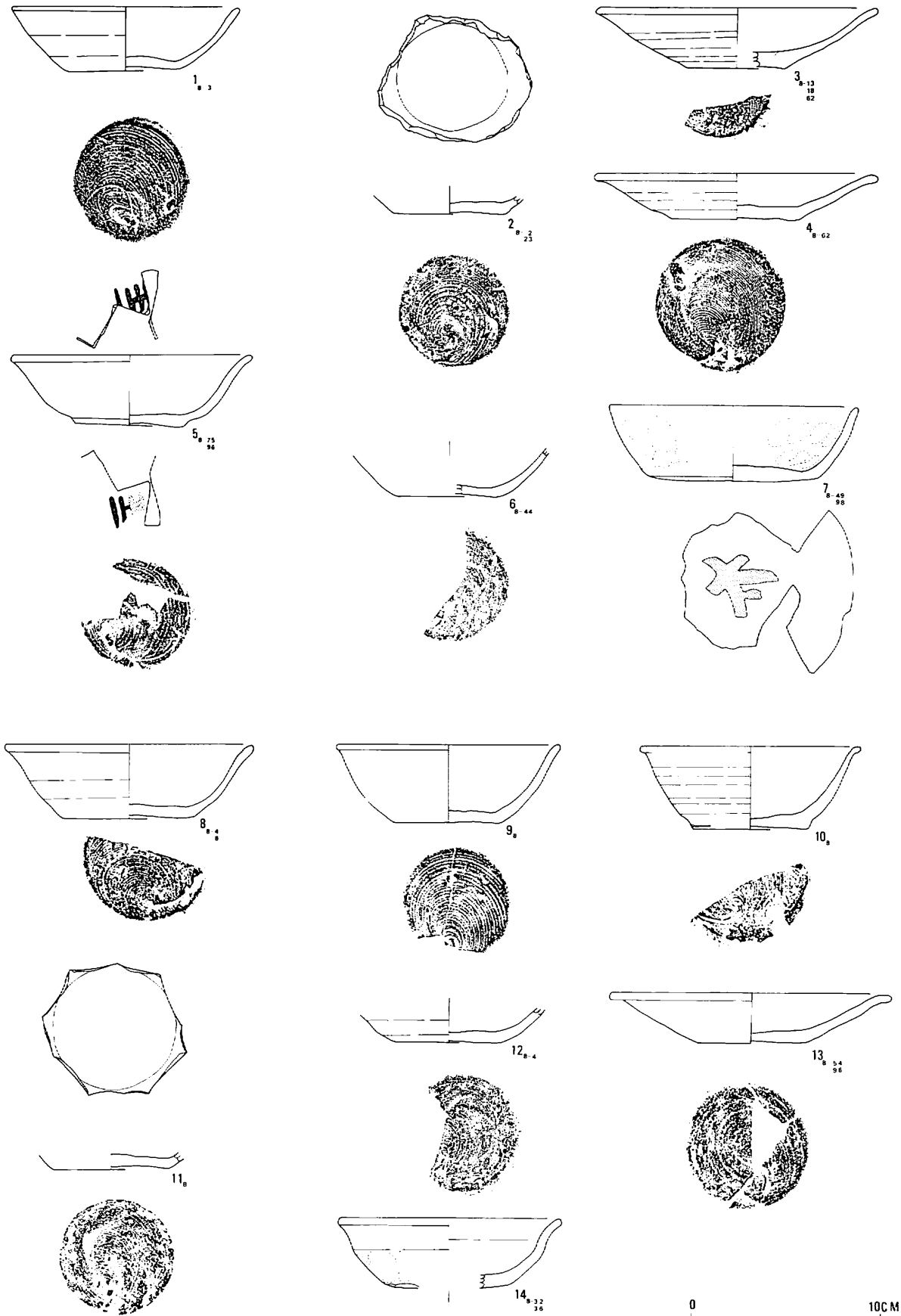
第39図　丸山遺跡第５号住居跡出土遺物実測図（1/3）



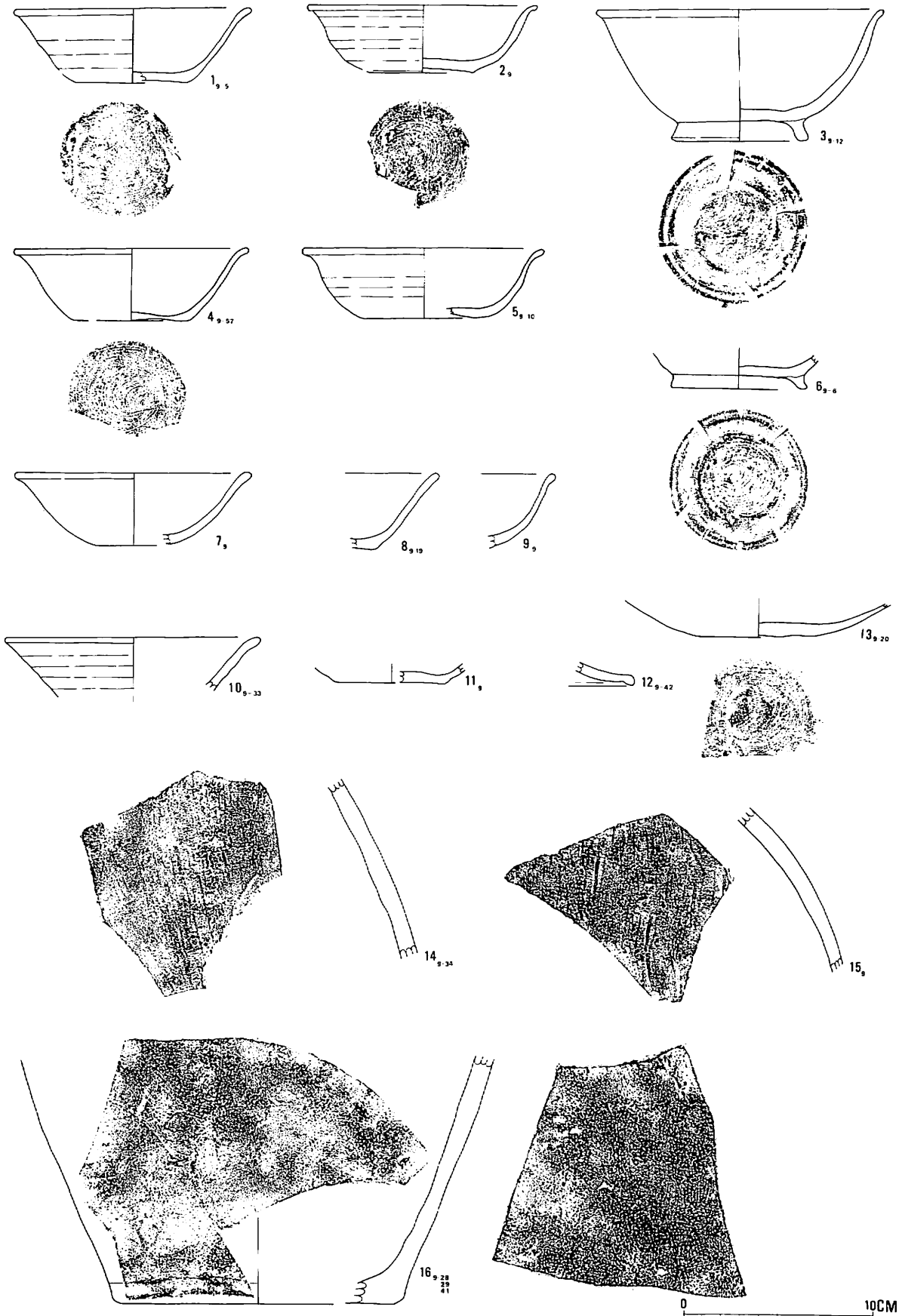
第40図　丸山遺跡第６・７号住居跡出土遺物実測図（1/3）



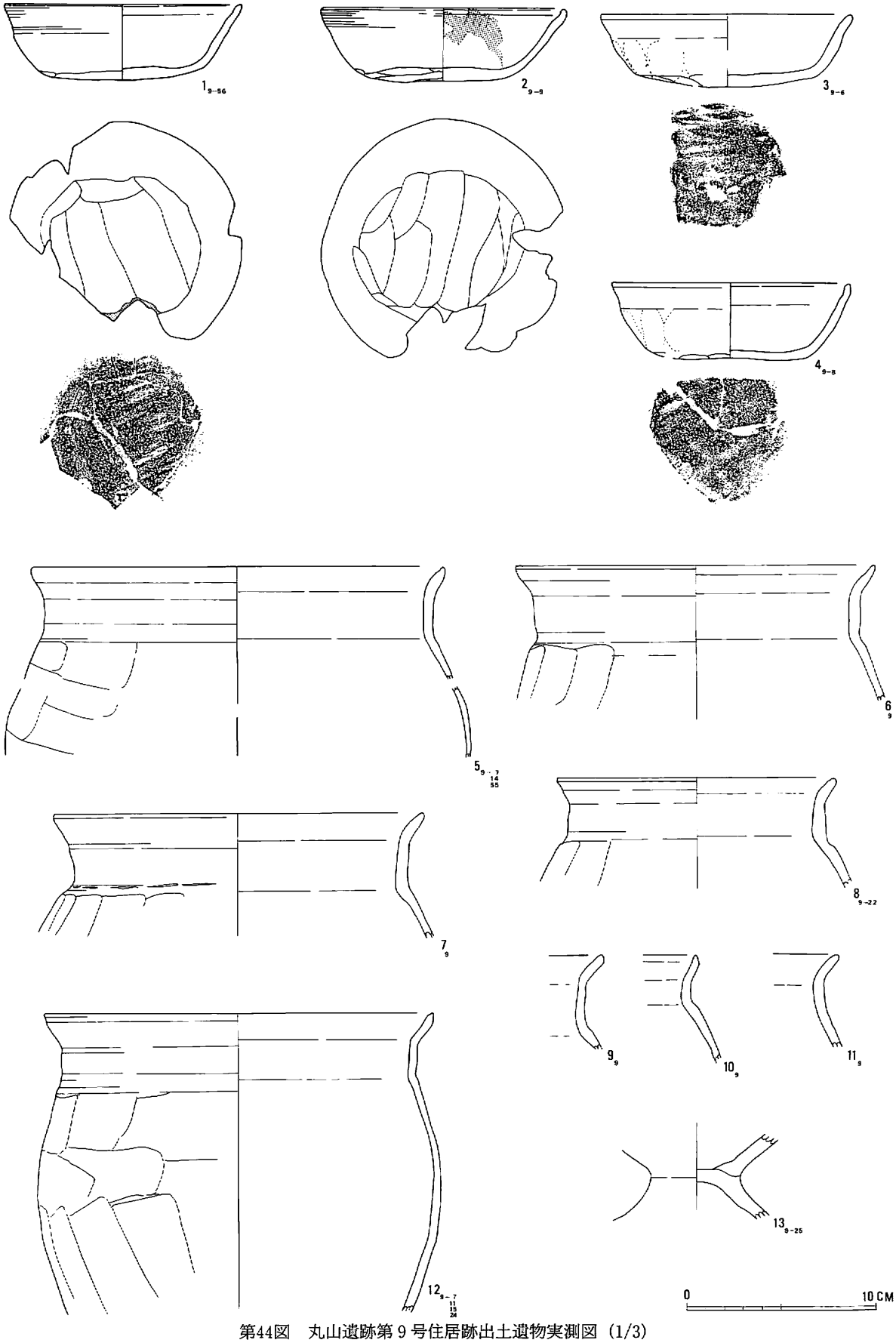
第41図　丸山遺跡第７号住居跡出土遺物実測図（1/6）



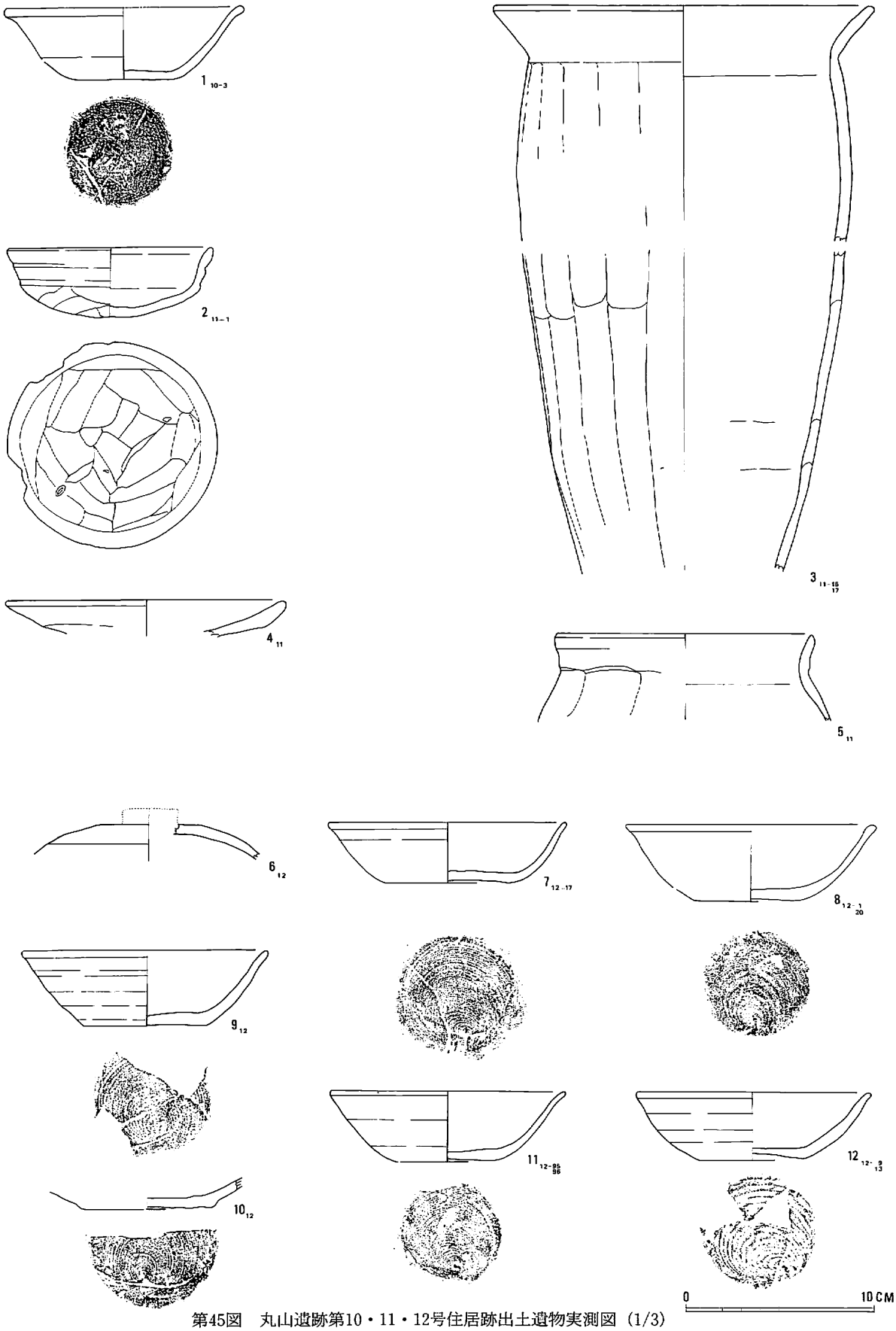
第42図　丸山遺跡第８号住居跡出土遺物実測図（1/3）



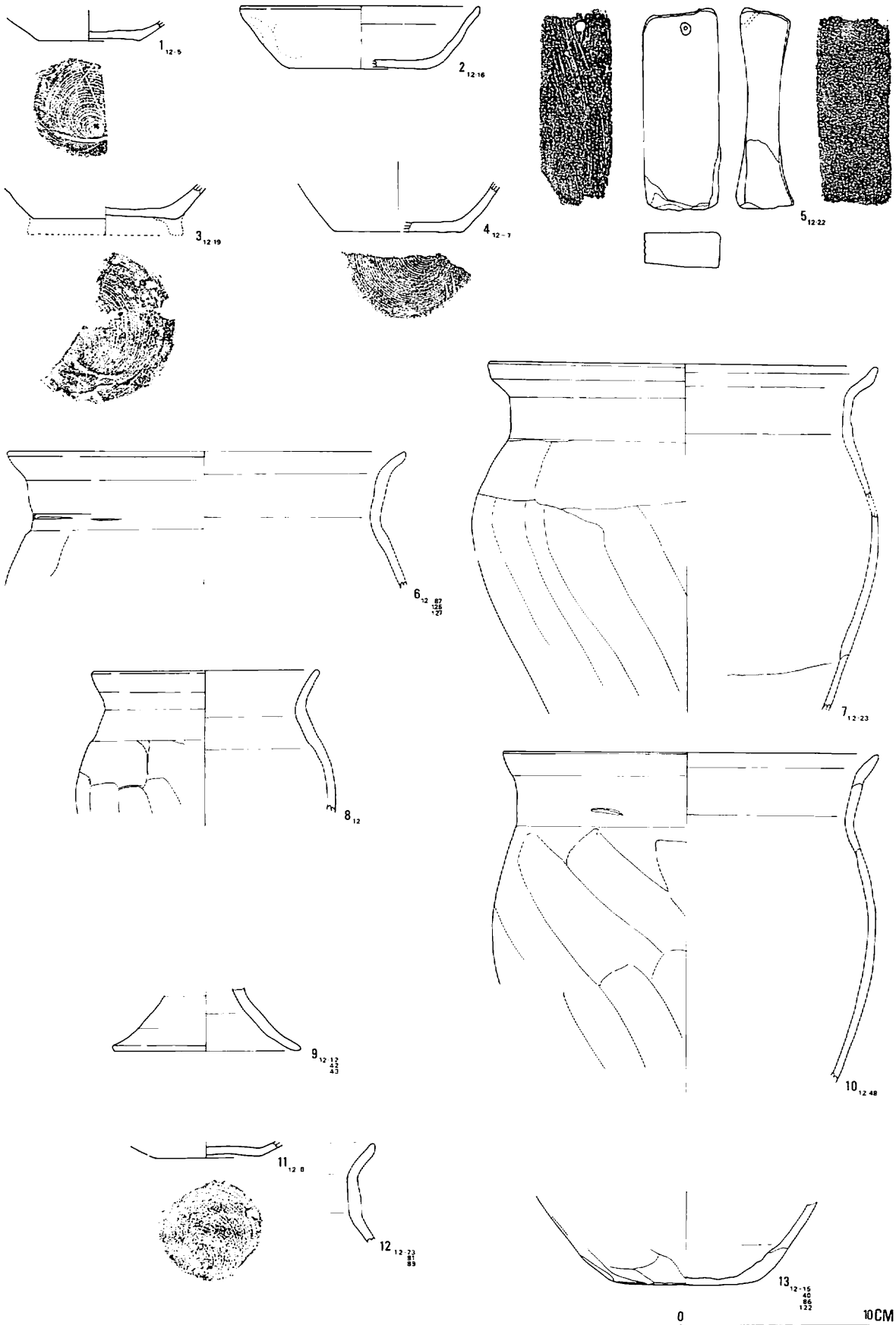
第43図　丸山遺跡第９号住居跡出土遺物実測図（1/3）



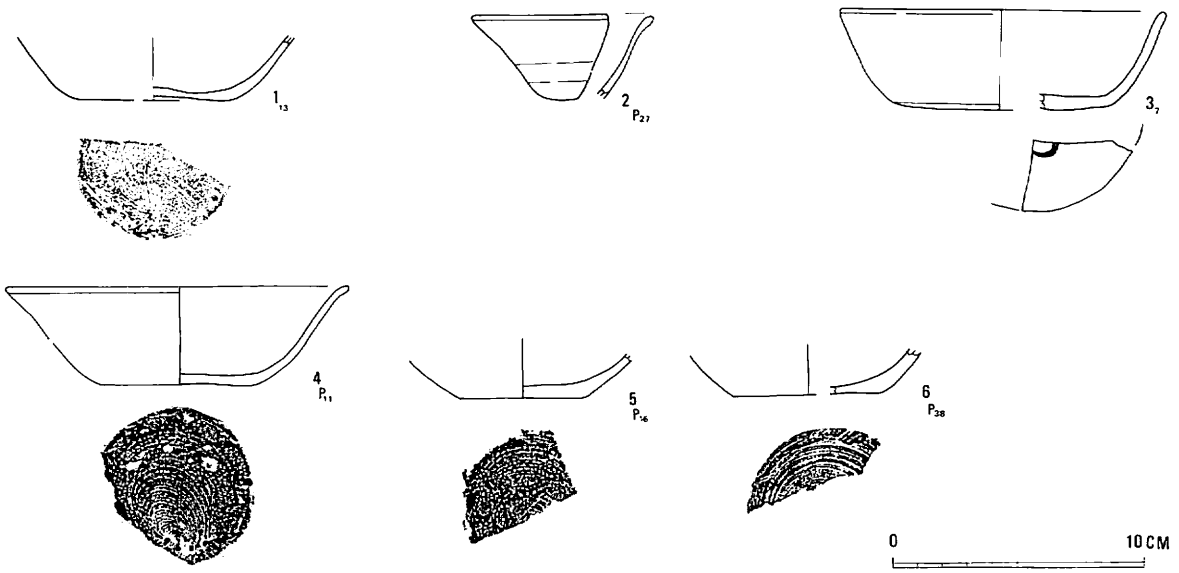
第44図　丸山遺跡第９号住居跡出土遺物実測図（1/3）



第45図　丸山遺跡第10・11・12号住居跡出土遺物実測図（1/3）



第46図　丸山遺跡第12号住居跡出土遺物実測図（1/3）



第47図　丸山遺跡出土遺物実測図（1/3）

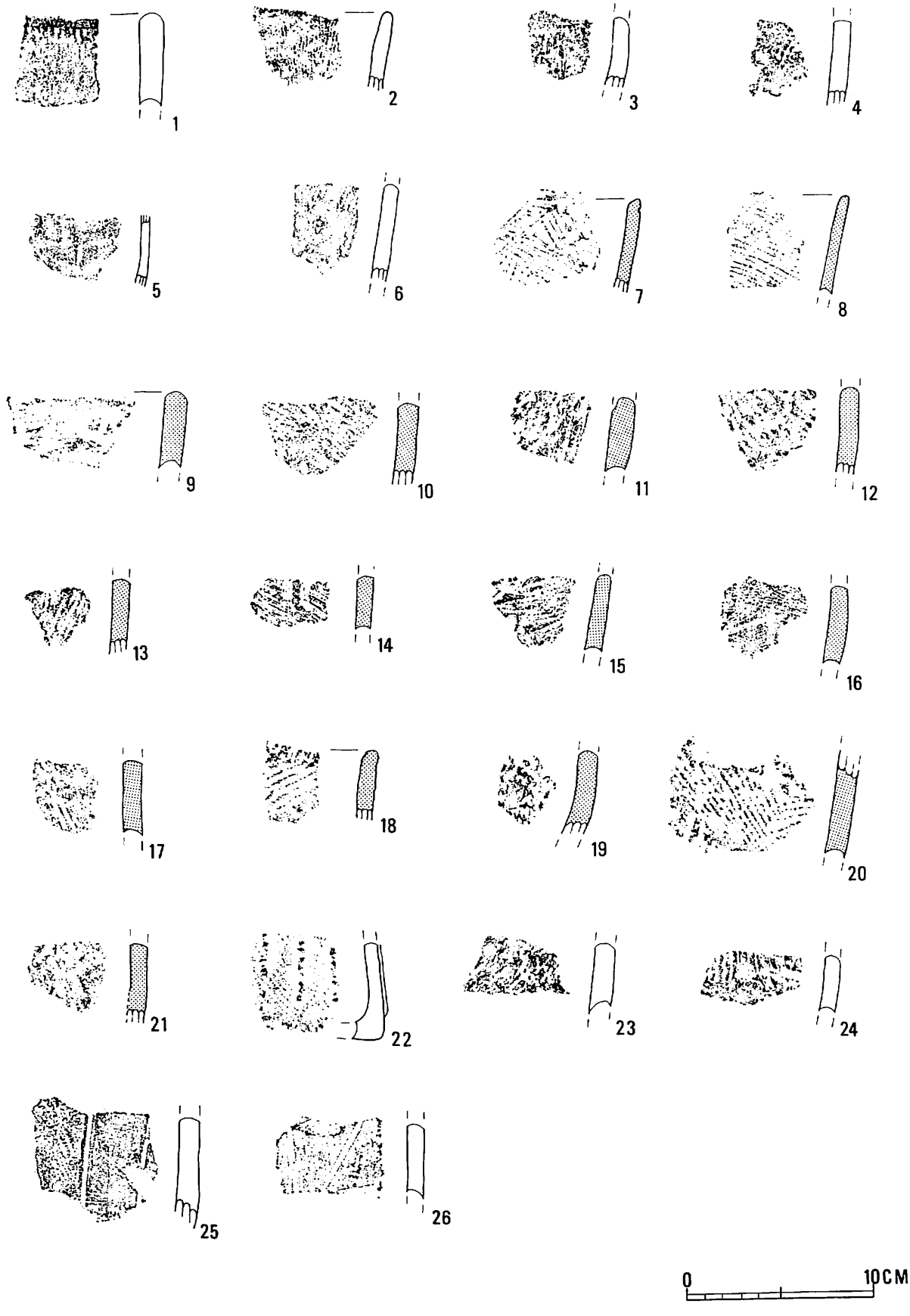
2、検出された遺物

土器（第37図）

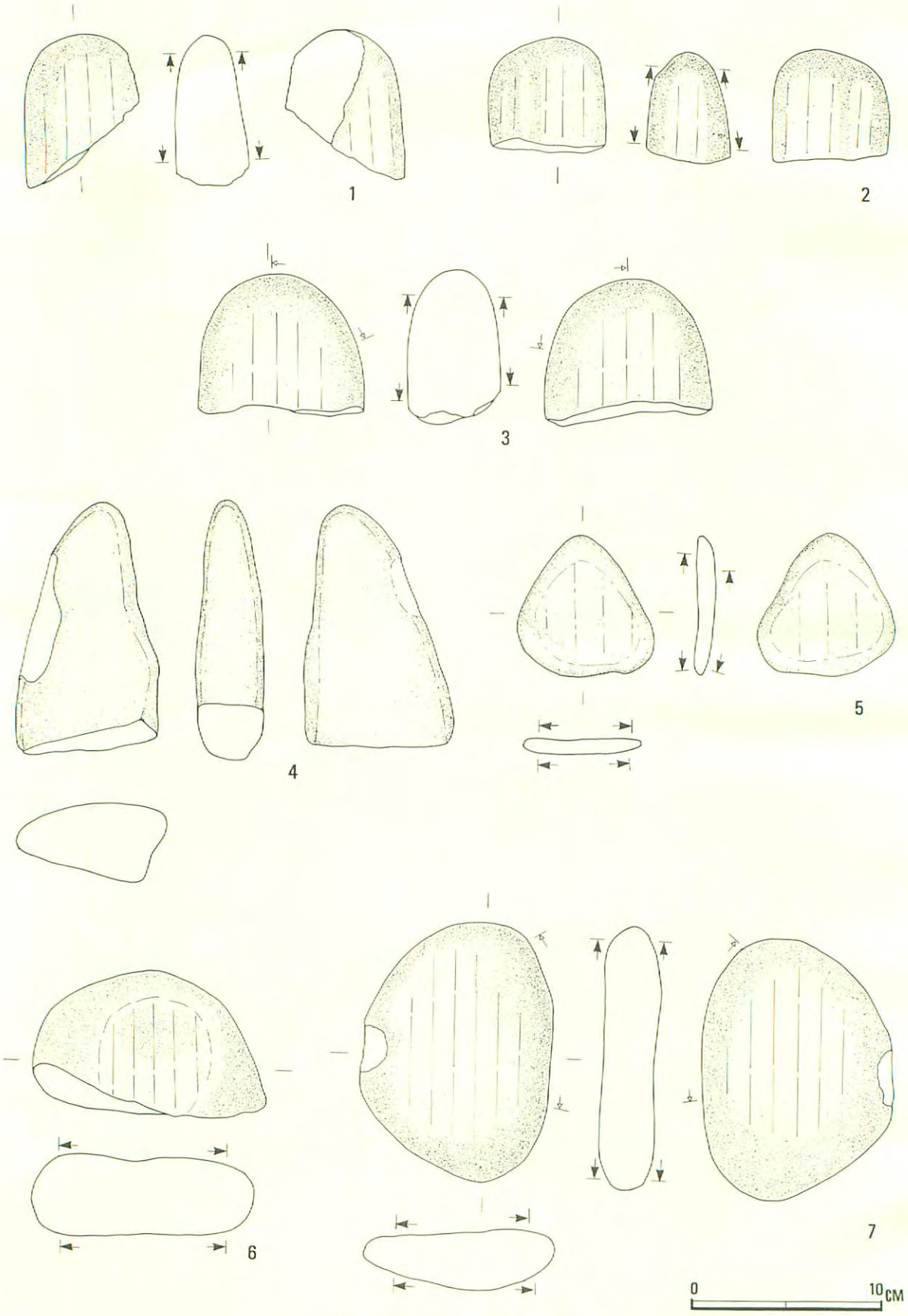
本遺跡からは、58点の縄文土器が出土している。内訳は、早期撚糸文土器９点、条痕文系土器23点、前期花積下層式土器６点、諸磯式土器６点、中期が加曽利Ｅ式土器10点、後期称名寺式土器４点である。第37図１～６は撚糸文土器。１は太い撚糸文を施文した後に、口唇部全面に撫で整形を施す。太いが条間が詰まった撚糸が施文される。２は細い撚糸Ｌを施文した後に、口唇部全体に撫で整形を施す。３～６は胴部破片で、条間の粗い撚糸文を施文する。７～17は条痕文系土器。７は唯一口縁部文様帯をもつ。器面を条痕で整形後、鋭い沈線で文様帯内に区画文を描出する。区画沈線内には、太い集合沈線が斜位に充填され、交点には細い竹管状工具による円形刺突が加えられる。胎土に繊維を小量含。８・９は口縁部破片、斜位に条痕が施される。胎土に繊維を多量に含む。10～17は胴部破片。いずれも、斜位に条痕が施されており、胎土に繊維を多量に含む。18～21は花積下層式土器。18は口唇部上に細かい刻みが加えらる。０段多条の斜縄文が施文される。胎土に繊維を多量に含む。20は０段多条ＲＬの縄が横位の羽条に施文される。胎土に繊維を多量に含む。22～24は諸磯式土器。22は底部付近の破片。縦位に、半截竹管による押引きを加えた隆帯を３条貼付する。地文はＲＬの斜縄文が施文される。23・24は、ＲＬの斜縄文が施文される。25は加曽利Ｅ式土器。地文にＲＬの斜縄文が施文され、２本の垂下する沈線間の地文が磨り消される。26は堀之内式土器。器面は丁寧に整形され、沈線が２条施文される。

石器（第38図・図版）

本遺跡からは、磨石３点、石皿３点、スタンプ形石器１点が出土している。第38図１～３は磨石。１は表裏面に磨面が認められる。１／２を欠損する。重量210ｇ、石質は閃緑岩。３は表裏面に磨面が、先端部に敲打痕が認められる。１／２を欠損する。重量475ｇ、石質は閃緑岩。４はスタンプ形石器。底面に若干の摩耗が認められる。重量は470ｇ、石質は閃緑岩。５～７は石皿。５は小型の石皿。表裏面に使用痕が認められる。重量は65ｇ、石質は砂岩。被熱の痕跡が認められる。６は表裏面使用痕が認められる。約１／２を欠損する。重量は520ｇ、石質は閃緑岩。７はほぼ完形の石皿。表裏面に使用痕が認められる。重量は560ｇ、石質は閃緑岩。（森田）



第48図　丸山遺跡出土遺物実測図（1/3）



第49図　丸山遺跡出土遺物実測図（1/3）

第2表　出土物観察表

番号	出土番号	大きさ（cm）	形態の特徴	手法の形態	色調・胎土	
1	1 —19	須恵碗	底　7.2	転用硯　内面研磨される	貼付高台　底面回転糸切	青灰色.末野？
2	1 —10	須恵坏	底　5.8	底部小片	底部回転糸切　手刃の圧痕？あり	赤褐色.末野産？
3	1 —11	須恵碗	底　7.4	底部のみ	貼付高台　底面回転糸切	黒灰色.末野産？
4	1 —23	須恵甕	小片	口縁部外反つまみ出し		黒灰色
5	1 —24	土師甕	小片	口縁部肥原つまみ出し		赤褐色
6	2 —12 13	須恵坏	口　13.6 底　6.4 高　4.3	体部体部立ち上がり口縁部外反 体部大きく外反	底部回転糸切	青灰色
7	2 — 2 3 —47	須恵碗	口　47.8 底　7.8 高　7.6	端部つまみ出し 口縁部小破片	高台貼付　底面回転糸切	黒灰色.黄灰色.末野産？ 青灰色.末野産？
8	2 —15 37	須恵甕	—	底部のみ遺存	口縁端部丸味をもつ	青灰色.末野産？
9	2 — 3	須恵坏	底　6.4	口縁部小片　コの字形口縁	底部回転糸	赤褐色
10	2 カマド	碗・甕		口縁小片　コの字形口縁	口縁部外反　丸味をもつ	赤褐色
11	2 —27	碗・甕		体部破片	口縁部直立気味	青灰色.末野産
12	4 カマド	須恵碗	口　17.0	体部短く大きく外反		褐灰色.末野産？
13	4 カマド	須恵皿	口　14.8 底　7.0 高　2.7	コの状口縁.内湾気味につまみ出す	底部回転糸切	橙褐色
14	4	碗・甕	小片	体部丸味を持って立ち上がる		
1	3 —76	須恵坏	口　(12.2) 底　5.8 高　4.3	底部小片 底部小片 底部小片　体部丸味を持って立ち上がる	口縁部つまみ出し 底部回転糸切	黄灰色.南比企産 黒灰色
2	3 — 6	須恵坏	底　5.8	体部直線的に外反	底部回転糸切	青灰色.末野産？
3	3	須恵坏	底　6.0		底部回転糸切	赤褐色.末野産
4	3 —40	須恵坏	底　6.0		底部回転糸切	
5	3 —63	須恵坏	口　13.0 底　6.0 高　3.6	底部小片 体部直線的に外反端部肥厚	底部回転糸切	黒灰色 赤褐色.末野産
6	3 —61	須恵坏	底　5.8		底部回転糸切	黄灰色.末野産？
7	3 — 3	須恵皿	口　17.2 底　6.2 高　3.5	体部直線的に外反端部つまみ出し 体部大きく外反端部外方へ引き出し	底部回転糸切	青灰色.末野産
8	3 —75	須恵碗	口　14.8 底　12.4 高　5.9	背高く身が深い.体部直立気味に外反. 端部つまみ出し	貼付高台.底面回転糸切	青灰色.末野産？ 灰色.末野産？
9	3 —47	須恵碗	口　14.6 底　7.0 高　5.3		貼付高台底面回転糸切 貼付高台底面回転糸切 青灰色末野産？	
10	3 —59	須恵碗	口　15.2 底　6.4 高　7.8	貼付高台.底面回転糸切		
11	3 —41	須恵碗	口　15.1 底　6.8 高　6.1	体部丸味をもって外反 端部外反	貼付高台.底面回転糸切	淡灰色.末野産？
12	3 — 14 19	須恵碗	—	体部のみ遺存	貼付高台.底面回転糸切	青灰色.末野産？
13	3 — 7	碗・甕		口縁部小片	口縁部大きく外反	赤褐色
14	3 —11	碗・甕		口縁部小片　コの字状口縁	端部つまみ上げ	赤茶褐色
15	3	碗・坏				
16	3 —46 52　53 57　78	灰釉長首壺	口　13.2	頸部外反　端部鋭い 外面細まわり良	内面.ロクロ痕明瞭.底部小片.接合しないが同一個体	黄灰色.緑灰色
17	3 —18 23　43 48	碗・甕	口　19.4	コの字状口縁 端部上方につまみ出し	体部ヘケズり 頸部ヨコナデ	橙茶褐色
1	5 — 43	須恵坏	口　11.6 底　5.4 高　3.5	体部丸味をもって外反 端部強くオサエ薄い	底部回転糸切	白灰色.末野産？
2	5 —10	須恵碗	底　7.0	体部外反　高台ハの字状にふんばる 高台付皿　体部大きく外方へ伸びる	貼付高台.底面回転糸切	灰色.末野産？
3	5 —11	須恵皿	口　12.6 底　7.2 高　3.8	身深く底部丸味をもつ 口縁丸く外反	貼付高台.底部回転糸切	茶褐色.末野産　重ね
4	5 — 80	土師・坏	口　14.0 高　3.8	体部丸く底部へ移行　口縁やや直立気味	底面ヘラケズり 内面油煤 —灯明皿	焼痕明瞭
5	5 —74 77　80 98	土師・坏	口　14.0 高　3.8	平底.口縁直立 口縁つまみ上げ	底面ヘラケズり	黄茶色
6	5 —39 87	土師・坏	口　12.8 高　3.8	口縁部直立 甑？　口縁部.陵をもち上方へつまみ出す	底面ヘラケズり 内面油煤 —灯明皿	黄褐色3
7	5 — 91 95	土師・坏	口　12.2 高　3.2		器厚薄く均一	茶褐色.細砂赤褐色
8	5 — 21 30	須恵甕	口　21.4	破片 小破片.底.体部立ち上がり急	内面.炭化物付着	青灰色.末野産？
9	5	須恵甕	底　6.0	甕小片		
10	5 —95	須恵壺？	小片		内面ロクロ痕明瞭	淡灰色.南比企産

番号	出土番号	器　種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の形態	色調・胎土
11	5－93	須恵甕	小片	甕小片	内面.同心円多き 外面.平行多き	青灰色
12	5－3	須恵甕	小片	甕体部片	内面円弧多き 外面ナデ	青灰色.南比企産
13	5－16	須恵甕		底部小片	内面.同心円多き 外面.平行多き 93と同一個体	青灰色
1	6－15	土師・碗		底部小片	粘土ひもづくり ヘラケズリ整形	白灰色
2	6－3	土師・碗	口　10.1	口縁部外面に段を持つ	内面暗文ヘラケズリ	赤褐色
3	6	土製品		円盤状一方になめらかな凸面を持つ	削カスか	茶褐色
4	7－4－c	須恵坏	口　13.0 底　6.8 高　3.7	体部丸味をもって外反	底部回転糸切後 周辺回転ヘラケズリ	黒灰色.南比企産
5	7フク土	須恵坏	口　12.6 底　6.2 高　4.0	体部立ち上り急	底部回転糸切	黄灰色.末野産？
6	7	須恵蓋		小破片		青灰色.南比企産
7	7－11		12と同一			
8	7カマド7	土師坏	口　12.2 高　3.2	底部丸味をもって立ち上がる 口縁直立内面に凹面を持つ	体部以下ヘラケズリ	茶褐色
9	7カマド5	土師坏	口　14.2 高　3.5	完形.体部と口縁部の境不明瞭. 内弯気味に立ち上がる	体部以下ヘラケズリ	黄茶褐色
10	7－19	土師坏	口　12.2 高　3.0	底部やや丸味をもつ 口縁外反	体部ヘラケズリ オサエ	茶褐色
11	7－24 30	土師坏	口　13.0 高　3.3	体.底丸味をもつ 口縁外反	体部ヘラケズリ	黄茶褐色
12	7－11	土師坏	口　13.2 高　3.8	身深く.底部丸味をもつ 口縁短く直立	体底部ヘラケズリ内外面に「x」刻まれる	黄茶褐色
13	7　床1	土師坏	口　12.2	口縁直立肥厚	体部ヘラケズリ	茶褐色
14	7－26	土師坏	小片	口縁直立気味		茶褐色
15	7－6	土師碗	小片	口縁部外面段をもつ		茶褐色
16	7フク土	土師坏	口　12.8 高　3.6	内面暗文 口縁部外面段をもつ完存口縁直立	体部ヘラケズリ 内底面に油煤付着	茶褐色
17	7－8	土師甕	底部	底部	ヘラケズリ	
18	7	土師円盤	3.6～3.3	長楕円の円盤	甕片利用	黒褐色
1	8－3	須恵坏	口　12.0 底　5.8 器　3.5	底部内底.底部外反 端部丸く納める	底部.体部腰周り内面に当りによる摩耗あり	赤褐色 青灰色.南比企産
2	8－2 23	須恵坏	底　6.0	転用硯	底部回転糸切	灰色
3	8－13 18	須恵皿	口　14.9 底　5.2 器　3.2	体部直線的に外反	青灰色.南比企産	
4	8－62	須恵皿	口　15.1 底　7.0 器　3.5	体部直線的に外反 端部つまみ出し	青灰色.末野産？	
5	8－75 96	須恵坏	口　13.0 底　5.8 器　3.8	墨書匡？ 底部円盤状.体部外反 口縁ややつまみ出し	青灰色.末野産	
6	8－44	須恵坏	底　5.6	体部大きく外反	淡灰色.末野産	
7	8－49 98	土師坏	口　11.2 高　4.0	墨書　大 平底.口縁直立気味に外反	底部ヘラケズリ 指オサエ底部外面墨書	茶褐色
8	8－4 8	須恵坏	口　13.2 底　7.1 器　3.9	体部内弯気味に立ち上がる	底部回転糸切	青灰色.末野産
9	8北カマド	須恵坏	口　11.8 底　5.8 器　4.1	体部外反 口縁部弱くオサエ	底部回転糸切	茶褐色.末野産
10	8北カ-3.6	須恵坏	口　15.8 底　6.0 器　4.3	体部上方へ外反 端部つまみ出し	底部回転糸切	青灰色.末野産
11	8北カ-7	須恵坏	底　6.2	転用硯	底部回転糸切	青灰色.末野産？
12	8-北カ4.3	須恵坏	底　5.9		底部回転糸切	青灰色.末野産
13	8－5.4 9.6	須恵皿	口　14.9 底　6.0 器　2.5	体部直線的に外反 端部つまみ出し		挟積物を特に多量に含む 末野産
14	8－32 36	土師坏	口　5.8	平底.体部外反 口縁部内反してつまみ出す	オサエ.ヘラケズリ	黄茶褐色
1	9－5	須恵坏	口　12.6 底　6.0 高　3.9	体部直線的に外反	端部肥厚 底部回転糸切	赤灰色　末野産？
2	9c期床	須恵坏	口　12.2 底　5.3 高　3.6	体部腰をつよく張り丸味をもって外反 端部つまみ出し	底部回転糸切	灰色　末野産
3	9－12	須恵・碗	口　15.1 底　7.3 高　7.0	高台付　深身の碗体部丸味をもってたち上る	貼付高台 底部回転糸切	灰褐色末野産
4	9－57	須恵坏	口　12.2 底　6.0 高　4.8	身深い.体部大きく外反 端部つまみ出し	底部回転糸切	赤褐色.末野産
5	9－10	須恵坏	口　12.8 底　6.2 高　3.6	口縁部つまみ出し	底部回転糸切	灰色.末野産？
6	9－6	須恵碗	底　7.1	貼付高台	底面回転糸切	青灰色.末野産？

番号	出土番号	器　種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の形態	色調・胎土
7	9北a期カマド	須恵坏	口 12.4 底 4.2	底径小さく.口縁大きく外反 端部つまみ出し	灰色.末野産？	
8	9－19	須恵坏	高 3.8	小破片	体部大きく外反	灰白色
9	9c期カマド	須恵坏	小片	体部丸味もつ.口縁端部肥原		灰白色.末野産
10	9－33	須恵坏	小片	体部小片.大きく外反	青灰色	
11	9カマド	須恵坏	口 14.4 底 5.8	底部小片		灰色.南比企産
12	9－42	須恵蓋	—	小片	底部回転糸切	黒灰色.末野産
13	9－20	須恵皿	底 6.0		底部回転糸切	黄灰色.末野産
14	9－34	須恵甕	破片		タタキ後ナデ	黒灰色.南比企産
15	9カ	須恵甕	破片		タタキ後ナデ	黒灰色.南比企産
16	9－28 29　41	須恵甕	底 15.4	平底.底部より体部直立気味に外反	タタキ後ナデ	黒灰色.南比企産
1	9－56	土師坏	口 12.5 器 4.0	平底.口縁直線的に外反端部凹面	底部ヘラケズリ.体部オサエ内面.油煤付着.灯明皿	黄茶褐色
2	9－9	土師坏	口 13.0 器 3.8	平底.体部大きく外反 端部凹面	底部ヘラケズリ.体部オサエ 灯心の焼付油煤付着灯明皿	黄茶褐色
3	9－6	土師坏	口 12.6 器 4.0	底部丸味をもつ.口縁直立気味に外反	底部ヘラケズリ.オサエ	黄茶褐色
4	9－8	土師坏	口 12.8 器 4.2	底部平底 口縁直立気味に外反端部内傾	底部ヘラケズリ.オサエ内外面 油煤付着　灯明皿？	黄茶褐色
5	9－7 14　55	土師甕	口 22.0	コの字状口縁緩やかに屈曲	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	黄茶褐色
6	9一括	土師甕	口 19.1	弱いコの字口縁状 口縁部内面を持つ	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	黄茶褐色
7	9東カマド	土師甕	口 19.6	コの状口縁 口縁部肥原	頸部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	茶褐色
8	9－22	土師甕	口 15.0	コの字状口縁	頸部強いヨコナデ 体部ヘラケズリ	赤褐色
9	9東カマド	土師甕	小片	コの字状口縁外方へ外反		茶褐色
10	9東カマド	土師甕	小片	弱いコの字口縁上方へつまみ出し	茶褐色	
11	9東カマド	土師甕	小片	口縁短く外反		—
12	9－7 11　15　24	土師甕	口 20.4	コの字状口縁.内甕気味に立ち上がる	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	茶褐色
13	9－25	土師甕　脚		甕.脚部		茶褐色
1	10－3	須恵坏	口 12.8 底 5.2 器 3.9	体部直線的に外反 端部肥厚丸味をもつ	底部回転糸切	白灰色末野産
2	11－1	土師坏	口 11.0 器 3.8	底部丸底 口縁部直立気味に外反.2段の凹線を配す	底部ヘラケズリ 痕アリ	黄茶褐色
3	11－16　17	土師甕	口 20.2	くの字状口縁 肩張.長胴甕	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	茶褐色
4	11	土師皿	口 15.0	浅身の皿状 口縁部肥厚くてたち上る	体部ヘラケズリ	黄茶褐色
5	11	土師甕	口 13.8	口縁短くほぼ直立	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	茶褐色
6	12	須恵甕	小片	—	—	灰色.末野産？
7	12－17	須恵坏	口 12.6 底 6.4 器 3.3	口縁部緩やかに外反	底部回転糸切	細砂.白灰色
8	12－1　20	須恵坏	口 13.0 底 5.0 器 4.1			
9	12－括	須恵坏	口 13.0 底 6.4 器 4.1	体部外反	底部回転糸切	白灰色.片岩.長石多
10	12	須恵皿？	底 9.0	体部大きく外反	底部回転糸切	南比企産
11	12－95　96	須恵坏	口 12.5 底 5.1 器 3.9	体部外反やや薄め	底部回転糸切	白灰色
12	12－9　13	須恵坏	口 12.4 底 5.6 器 3.6	体部丸味を持つ	底部回転糸切	白灰色.南比企産
1	12－5	須恵坏	底径 6.0	底部1/2残	回転糸切	白灰色.南比企産
2	12－16	土師坏	口径 (12.6) 底径 7.2 器高 3.3	口縁外返.つまみ出し	粘土ひもづくり オサエ	黄茶褐色
3	12－19	須恵高台付碗	底径 (8.1)	底部のみ	回転糸切付高台	末野産.酸化煤焼成
4	12－7	須恵坏	底径 6.7	体部たち上り急		末野産？
5	12－22	砥石	長さ 11.6 幅 4.0	砥面は表裏側面を使用	下げ穴を開けている	凝灰質砂岩
6	12－87 126　127	土師甕	口 21.0	コの字状口縁大きく外反	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	黄茶褐色
7	12－23	土師甕	口 20.4	コの字状口縁 端部外反しつつ上方へつまみ出す	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	黄褐色
8	12カマド	土師甕	口 (12.0)	くの字状口縁	口縁うすく外反	黄褐色
9	12－12 42　43	土師脚	底 10.0	台付甕・脚		黄褐色

番号	出土番号	器　種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の形態	色調・胎土
10	12—48	土師甕	口　19.2	くの字状を呈する 口縁より外反する端部をもつ	口縁ヨコナデ 体部ヘラケズリ	黄褐色
11	12—8	須恵坏	底部　5.8	底部のみ遺存	底部回転糸切	黄灰色.細砂.長石粒子
12	12—73 81　89	土師甕	小片	コの字状.やや不明瞭		茶褐色
13	12—15　40 86　128	土師甕	底部のみ	底部.平底		
1	13	須恵坏	底径　6.2	体部の立ち上がり急	茶褐色	
2	P27	須恵坏		口縁部小片		
3	7カマド	須恵碗	口　13.0 底　9.0 高　4.0	墨書　平底.体部直立気味に外反	底部回転糸切後周囲回転ヘラケズリ 底面墨書	末野産？砂小石多 灰色.南比企産 青灰色.南比企産
4	P11	須恵坏	口　13.6 底　6.2 高　3.9	体部外反.器厚薄い	底部回転糸切	淡灰色
5	P16	須恵坏	底　5.1	底部小片	底部回転糸切	白灰色　末野産？
6	P38	須恵坏	底　6.0	底部小片	底部回転糸切	淡灰色.末野産？
1	7カマド	丸瓦	幅　16.0 長　(26.2)	粘土板1枚造　側縁面取 粘土板1枚造　側縁面取	凸面ナデ　凹面布目	2次加熱　赤褐色 小石長石多
2	7カマド	丸瓦	—			小石.長石.灰色
3	7カマド	平瓦	広端　25.1 狭端　23.0 長　37.5	粘土板桶巻造 側縁面取	凹面布目　凸面布目 縄タタキ後ナデ済	2次加熱　黒灰色 茶褐色
4	7カマド	平瓦	長　38.1	粘土板桶巻造 側縁面取　1/2破片	縄タタキ後ナデ済 縄タタキ工具幅3.8cm	2次加熱.黒灰色.茶褐色

Ⅳ　地震跡について

1、発見の経緯

発掘調査も終盤の12月、遺構撮影時に地面の乾燥差が判然としていることに気づいた。このような地質の境目は遺構の掘込みである場合が多く、谷地形部分からは黒曜石剝片が出土していたので、トレンチを設定することとした。すると掘削面にくっきりと土層境界が現われた。鮮やかな断層であった。

発見はしたが、確認はできぬので、地質の専門家である堀口萬吉氏に現地調査を依頼した。氏の調査の結果断層であると判断された。調査結果については他地点の調査と合わせ堀口氏の報告に委ねるが、本文では発見の契機となつたＡトレンチの断層について概要を記すこととしたい。

2、断層の位置

発見地は遺跡内にあり、調査区のＣ５からＣ６区に位置する。座標では東経139°　22′34″、北緯36°　5′51″である。

3、地形と地質

発見地は江南台地の南縁であり台地末端に位置する。標高約40mから39mで、和田川との比高差は５から７mほどである。江南台地の地質性状は大まかに表土層以下大里ローム層・新期ローム層・チョコ帯・灰白色粘土層・新第三期層から成っている。

4、層序（第50図）

断層部分の層序は、図のとおりであり注記を参照されたい。特徴としては、第三期層が平野側から山側に衝上しており、逆断層となっていた。断層面は一直線状をしており、断層面では地層の引き連れがみられた。地層のずれは最大約３mを測る。

小結１

断層は次のような性質をもっていることが判る。

断層面の傾斜は30°より低い角度で東側（平野側）より西側（山側）へ衝き上げている。

断層の走行方向は、N－７０°－Wである。

断層の落差は2.7から3.0mを測る。地震による断層と考えられ、活断層と推定されること。

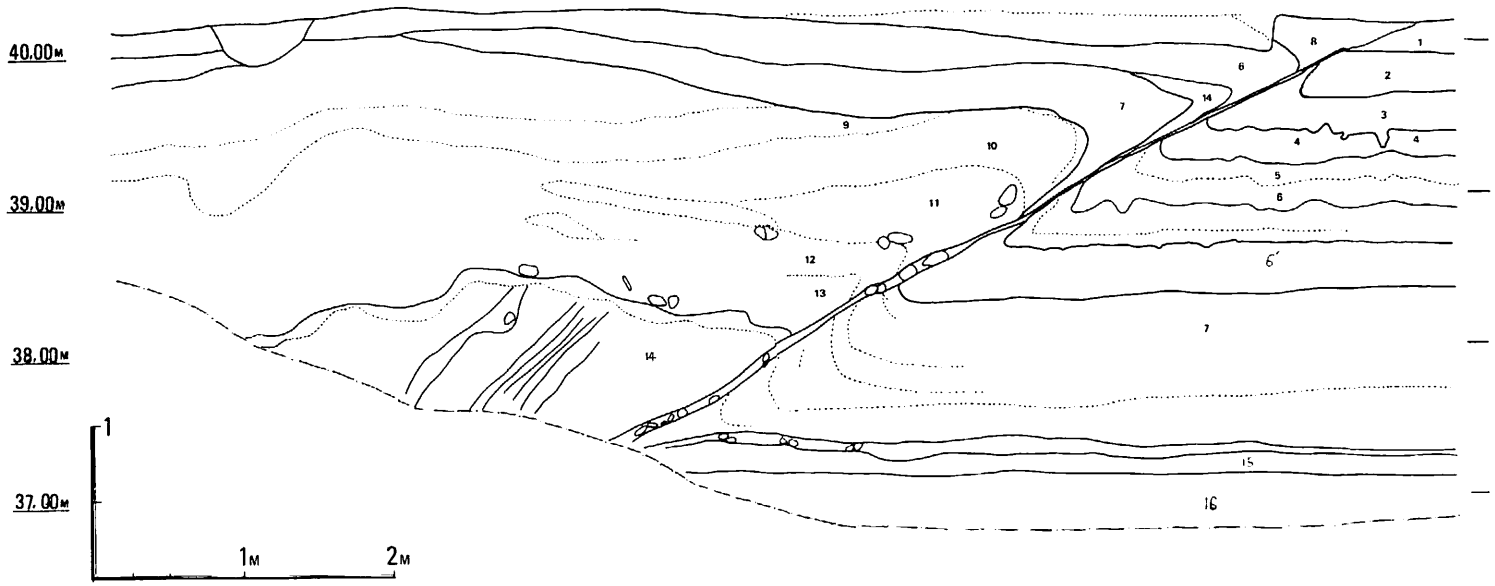
丸山遺跡の遺構は地震による影響をあまり受けておらず、SI７を除き、竪穴住居跡・掘竪柱建物跡には亀裂や大きな歪みはみられない。

小結２

埼玉県には大きな活断層が16箇所知られており、さらに古い断層は至る所に分布している。これは日本列島の生成を物語る激しい地形変動の証であって、現在もなお続く地形変動であることが知られている。江南町の周辺には大谷断層と江南断層が位置している。江南断層は川本町武川付近より江南町千代付近に観察され、落差７m、N-33～55°-Wの走行方向をしているとされている。大谷断層は比企丘陵の北部を通る断層で江南断層が連続するとも推定されている。丸山遺跡で発見された断層はこれらの断層とは若干のズレがあるが一連のものと考えられた。

小結３

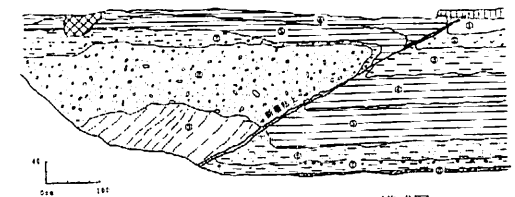
過去の地震情報が考古学的手法により発掘現場で発見され、資料の蓄積が図られつつあるが、実際その場に直面してみるといくつかのことに気づく。まず第一に、95年の阪神大震災の記憶から断層について過敏に反応していることである。地価・土地利用など各方面の問題があろうが、事実は事実として受け入れるべきであろう。発掘調査の成果に限らず、情報公開の面からも正確な情報は公開されるべきである。そのうえで地震想定・被害想定などに生かすことができたら、発掘調査の機会をより多方面に生かすことになる。なぜなら比較的地震跡を捕えやすい浅い地下掘削の機会として、全国で年間一万箇所に達する発掘調査の場が有効だからである。その土地の歴史を知るうえでもまた、その土地の地質・性状を知るうえでも発掘調査の場は活用されるべきである。第二に、理論的な裏付けとなる地震考古学の一層の定着が望まれる。現地で３mの落差をもつ断層を見上げると、その圧倒的なエネルギーを実感するが。それがどのようなメカニズムと意味を持っているのか判りにくいのが実情である。



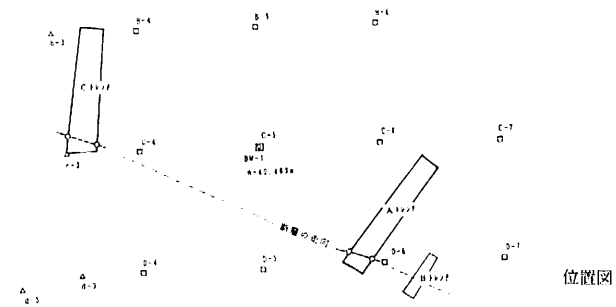
Aトレンチ南面土層断面

1　黄褐色土　　しまり粘性やや強、粒子やや粗（ソフトローム）
2　明黄褐色土　　しまり粘性やや強、粒子やや粗（ソフトローム）
3　暗黄褐色土　　しまり粘性強、粒子粗
4　ハードローム層
5　黄茶褐色土　　しまり粘性強、直径1mm～3mm黒色粒子微量含、粒子粗　しまり
6　茶褐色粘土　　しまり粘性極強、黒色粒子微量含、粒子粗　　6′　まだら粘土層
7　白色粘土層
8　黄褐色土　　しまり粘性やや強、ソフトローム、ハードローム混じる、粒子やや粘
9　白色粘土層　　直径1cm～2cm亜円礫多含、粘土が赤褐色化している←水による礫の変色のため
10　赤褐色粘土層　　×直径1cm～8cm亜円礫多含
11　白色礫混り　　直径1cm～4cm亜円礫多含
12　赤褐色礫混粘土層　直径3cm～10cm亜円礫多含、粘土赤茶褐色化・砂粒（シルト）少量含
13　礫混りシルト層　　直径3cm～10cmの亜円礫多含、シルト多含
14　新第三期層
15　礫まじり粘土層
16　段丘礫層

※1・2・3・8　ソフトローム層
　11・12・13　　直径5cm～12cm程の亜円礫（チャート）多含、段丘礫層



模式図



位置図

第50図　丸山遺跡断層土層図　1/50

V まとめ

1、出土遺物の概要と遺構の変遷

丸山遺跡では竪穴住居跡より出土した遺物の年代を中心に時期変遷をみると、古墳時代末ころから平安時代中頃までの期間をみることができる。とくに第3、5、7、8、9、12号住居の出土土器は個体数が多く、時期のばらつきが少ないと考えられるので時期区分の対象資料とた。また、時期比定の目安には大里編年(文—12)を参照した。第3号住居では須恵器坏・碗・皿などがあり、碗類は高台坏碗が主であった。土師器甕では明瞭なコの字口縁をもつ甕がある。第7号住居では口縁部の短い丸底の土師器坏や底部回転箆削りの須恵器坏がある。第8号住居では口径と底径の比が1：2となる須恵器坏や指頭圧痕を残す土師器坏が主体となる。第9号住居ではやや小ぶりで外反度の高い須恵器坏や平底風の土師器坏・ややコの字の崩れてきた土師器甕等がある。第12号住居も同様だがくの字に近い土師器甕が加わっている。これらの土器の示す時期から大まかに4期の変遷が想定され、1期を6世紀末から7世紀初頭、2期を8世紀後半から9世紀初頭、3期を9世紀前半から9世紀後半、4期を9世紀後半から10世紀前半とした。これはそれぞれ大里編年の4～5期・6～7期・8～10期に当たる。そしてこれらに見合う竪穴住居跡はおよそ次のように考えられる。

1期—第11、6号

2期—第7、5号

3期—第1、2、8、9a、9b

4期—第3、4、9c、8b、10、12号、

但し、1号は2期に、5号は3期に、10・12号は3期にかかる可能性もある。

2、掘立柱建物の構成と変遷

時期を特定できる遺物が出土した2棟の掘立柱建物を定点とした。3号は9世紀中頃には廃絶されてたと考えられる。5号は9世紀後半には建て替えられている。重複関係・柱筋の通り・掘方・規模・構造等を中心に建物群の構成と変遷を考えてみたい。重複関係は2号と3号、4号と5号、6号と7号であり、2号は3号より新しいが他は直接の切り合がなく不明である。掘方は1号・2号・5号・6号・13号が円形または楕円形と割合大きな堀方を持つことが共通している。柱筋の通りでは2号・5号・6号の西側の側柱筋。5号・7号の東側柱筋と庇柱筋。6号または7号と9号・10号・11号の北側柱筋がほぼ一致。12号と13号の南側柱筋。1号・9号・13号の側柱筋。

これらの側柱筋の一致または規格性は同時期の建物配置を意図したものであると推定され、竪穴住居跡とも重複しないことから建物群の配置までもが規制されていたことを窺わせる。そのことは掘立建物の性格に起因したものと考えられる。2号と5号は庇付きの建物であり、面積も最大であることから本集落内では最も有力な者の住まいと推定される。それぞれ建て替えが認められる。4号と7号は総柱の建物であることから高床の倉庫と考えたいが、7号は面積が大きく一般集落内での高床倉庫とはやや性格が異なるものと思われる。1号・8号・9号・10号・11号・12号・13号は側柱建物であるが住まいまたは倉庫であるのか判別が難しい。倉庫とする積極的な根拠が見つからないが住居とする場合も同じである。しかし住居とすると竪穴住居からなる集落との拡差は瀝然である。

前述の群構成や重複関係から、さきの時期区分に掘立柱建物の変遷を当てはめると次のように考えられる。

1期—無、または未確認

2期—第1、3、4号

3期—第2a、5a、6a・b、9、10、11号

4期—第2b、5b、7、9、10、11、12、13号

但し、8号は2期にはいるとも考えられる。6b号は4期に入り7号は4期後半であるかもしれない。

3、遺跡の性格

竪穴住居跡と掘立柱建物跡はどちらも建物跡であ

ることに変わりなく、名称についても留意すべき時期にきているように思われる。(文―7)竪穴住居は居住のための施設であり、時には工房・貯蔵施設でもありえた。掘立柱建物は倉庫を第一に考えるが、居住のための施設であってもおかしくない。建物の性格は地域の様相や遺跡の性格を考慮しながらも、その遺跡内での在り方はどうなのかという個々の事例から考えることが基本ではある。

本遺跡では竪穴住居跡と掘立柱建物とが共存しており、掘立柱建物がコの字状またはL字状に整然と配置している。とくに庇をもつ建物があり倉庫だけではなく居住の建物が含まれている。2～4期の変遷をみると2・5号掘立柱建物が集落の中心建物となり中央の広場に面して、6・7・9～13号掘立柱建物が配置される。竪穴住居とは重複せず、配置の計画性にはおおきな差がある。その竪穴住居は台地縁辺部に配置され東側から南側へ広がる。ここに明瞭な建物配置の目的と意思を見て取れる。

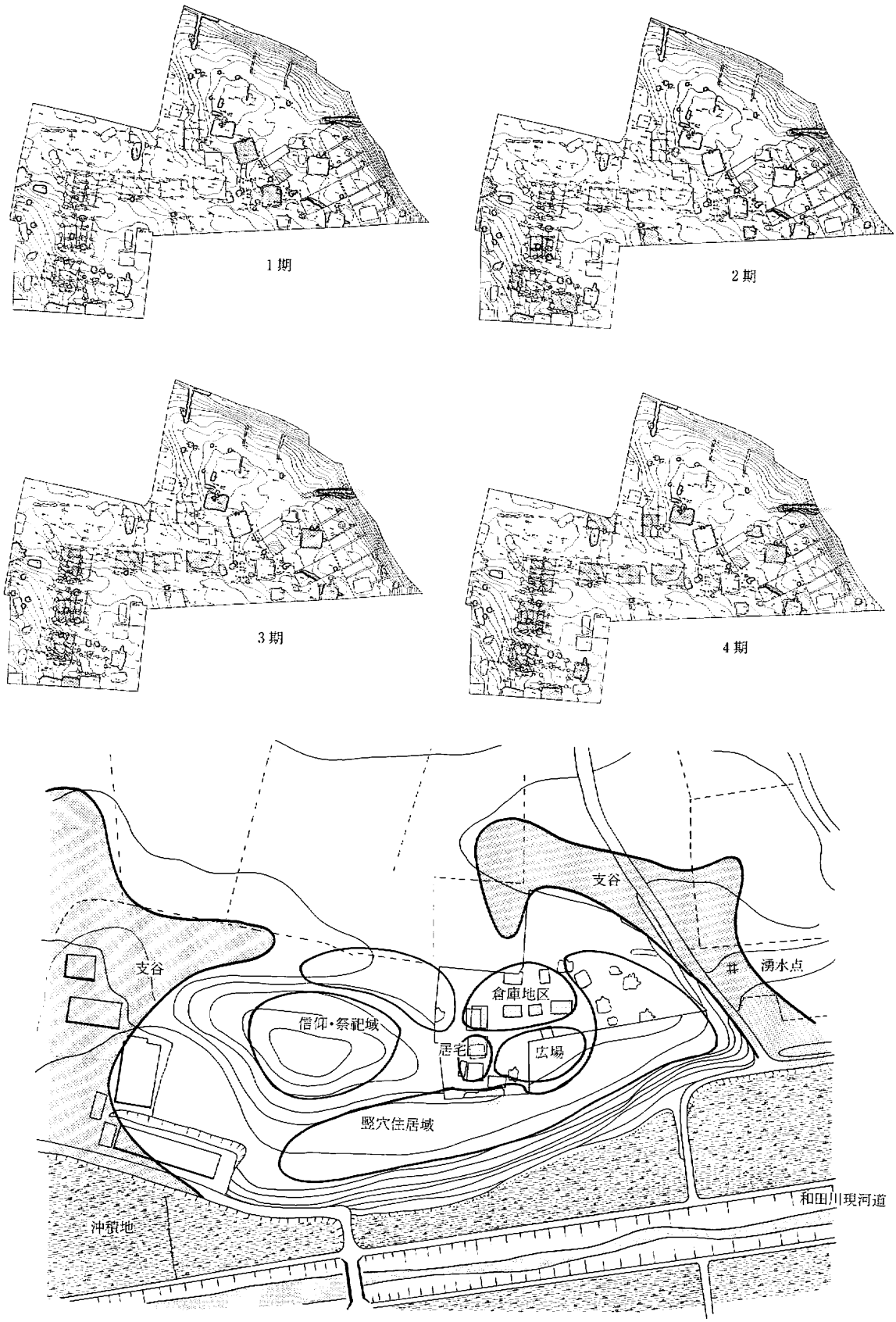
結論からいえばこの集落は平安時代以降、この地域の代表者たる力を持つ者の居住地と考えられ、当時の地方制度上でいう郷長層の居宅ではないかと推定される。総柱建物の7号は標準房戸の収穫を収納するには大きすぎ、郷長の所属する有力房戸の収納倉で私出稲等を収納していたかもしれないが、他の整った配置をみせる建物も倉・屋と考えると、集落に置かれたとされる「借倉・借屋」を考える余地もあるだろう。建物群の前面の空閑地は脱穀・収納等の作業空間であったかもしれない。先に調査された下新田・熊野・荒神脇地点では62軒の竪穴住居跡と掘立柱建物2棟があるが、丸山遺跡の掘立柱建物を中心とした在り方とは際立って差をみせている。荒神脇遺跡でみられるような2間四方の総柱建物は標準的房戸の口分田収入を収納した倉として充分な規模と推定されている(文―8)。

丸山遺跡は、郷単内での租や調・庸物の徴収を担ったとされる「郷家」「五十戸家」のような末端の行政機構を示すと考えられ、関和彦氏は先述の意味のような郷の役所的施設を「郷衙」と呼び、その施設は郷長の私宅に付随する形で同一区画内に建造されるのが一般的であったとし、時には正税を収めた「郷倉」によって構成されていたと考えている。

最後に、第51図下のように丸山遺跡を取り巻く集落空間の広がりを想定してみた。東側は北方へ深く入る谷が集落の境界となり、南側の台地下は和田側に面した耕作地が広がる。北側から西方へは山林や耕作地が広がっていたろう。また、居宅と考えている2・5号掘立柱建物跡の真西には地名の源となった小高い丘(丸山)があり、そこには有力者一族の墳墓地や仏堂等の信仰・祭祀にかかる場が残されていたと考えている。

参考文献

1、江南町　1995　「江南町史」資料編1考古
2、大里村　1991　「大里村史」通史編
3、埼玉県教育委員会　1994　埼玉県古墳詳細分布調査報告書
4、中島利治　他　1972　「下新田遺跡・荒神脇遺跡・熊野遺跡」　埼玉県遺跡調査会報告　第22集
5、福田聖　他　1994　「大沼遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告　第133集
6、立正大学熊谷校地遺跡調査室編　1978～1995　「遺跡調査室年報」Ⅰ～Ⅶ
7、関和彦　編　1995「古代東国の民衆と社会」古代王権と交流-2
8、松村恵司　1995「古代東国集落の諸相」古代の集落　栃木県立しもつけ風土記の丘資料館.図録
9、山中敏史　1994「古代地方官衙遺跡の研究」　塙書房
10、山中敏史　1995「古代地方官衙論」展望考古学
11、井上尚明　1991「古代郷家に関する試論」　埼玉考古学論集



第51図　丸山遺跡遺構変遷図（1～4期・4期の集落景観想定）

報告書抄録

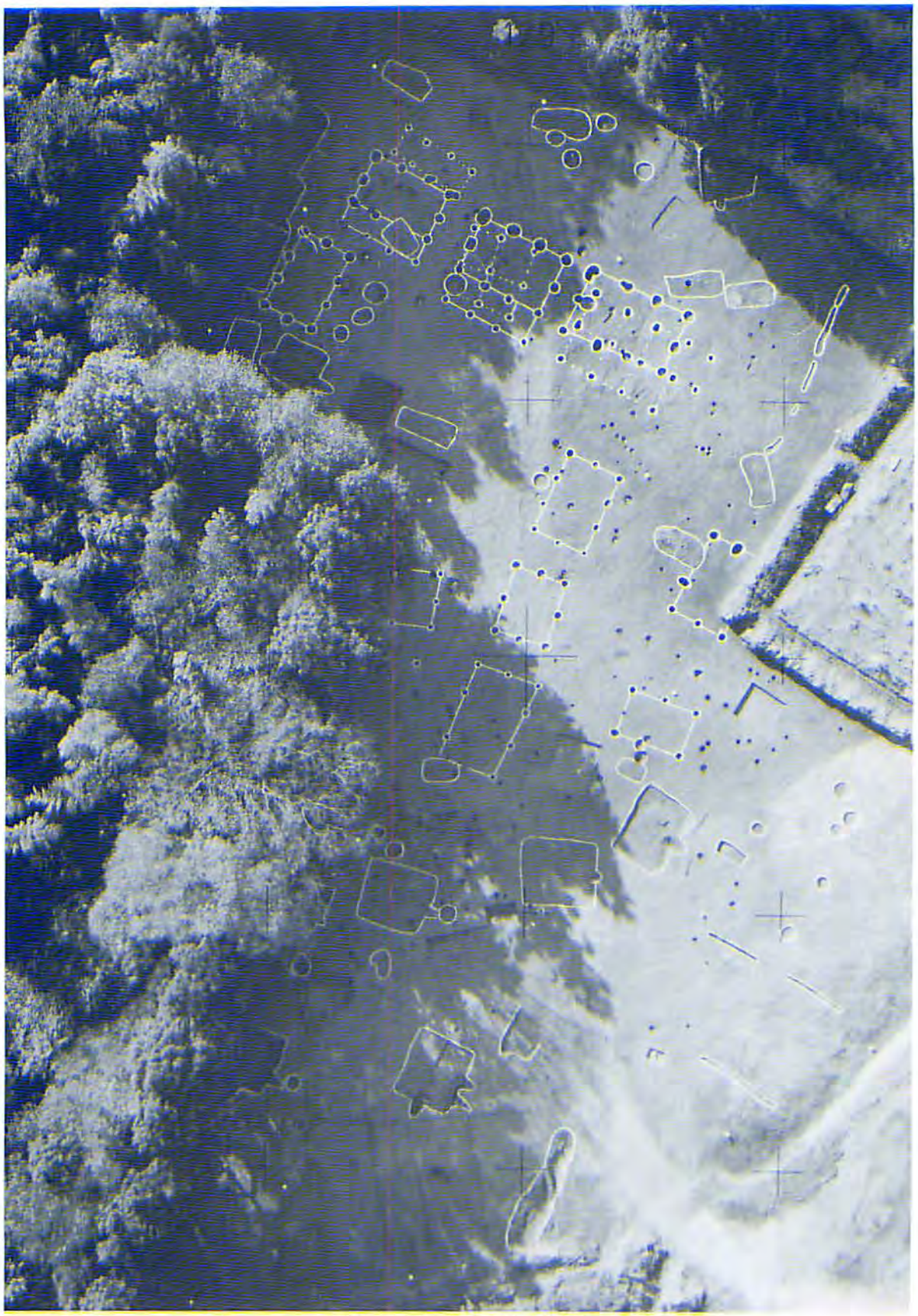
フリガナ	マルヤマイセキ		
書名	丸山遺跡		
副書名	社会福祉施設　「江南療護園」　建設にかかる埋蔵文化財発掘調査報告		
シリーズ	江南町文化財調査報告	巻次	第11集
編著者	新井　端　　森田　安彦		
編集機関	埼玉県大里郡江南町教育委員会		
所在地	〒360—01　埼玉県大里郡江南町中央1丁目1番地　TEL0485-36-1521 江南町教育委員会		
発行日	1996年（平成8年）3月25日		

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
丸山遺跡	コウナンマチオオアザノハラアザマルヤマ 江南町大字野原字丸山	市町村	遺跡	36°5′51″	139°22′34″	19941001 ～ 19941222	3000	建物建設
		11402	037					

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
丸山遺跡	集落	縄文時代	炉	土器・石器	
		奈良・平安時代	竪穴住居—12 掘立柱建物—13 土壙　—33	土師器 須恵器 瓦	
		その他	その他		地震跡・断層検出

図　版

図版 1　野原東部地区垂直写真（1965年撮）



図版 2　丸山遺跡調査区垂直写真

Si-1,2,3

Si-1,2,3　遺物出土状態

Si-3　遺物出土状態

Si-2　カマド

Si-3　刀子出土状態

Si-4　完掘状態

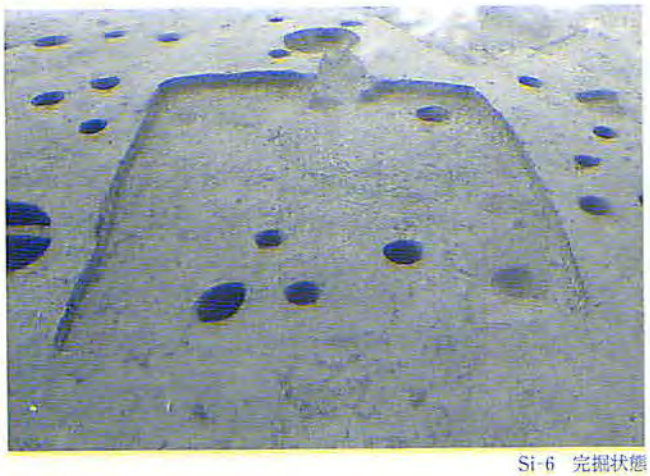
同カマド

図版 3　丸山遺跡第 1 ・ 2 ・ 3 号住居跡

図版 4

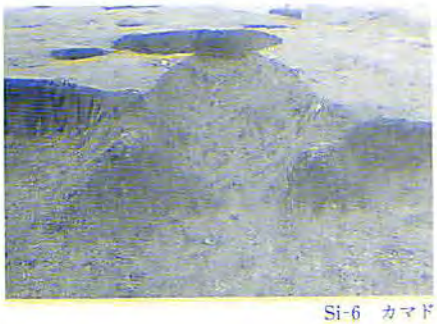
Si-5　完掘状態

Si-5　カマド



Si-6　完掘状態

Si-6　検出状態



Si-6　カマド

図版 4　丸山遺跡第 5・6 号住居跡

Si-7　完掘状態

Si-7　検出状態

Si-7　遺物出土状態

Si-7　カマド

図版 5　丸山遺跡第 7 住居跡

図版 6

Si-8　完掘状態

Si-8　北カマド周辺
遺物出土状態

北カマド

Si-8　遺物出土状態

図版 6　丸山遺跡第 8 号住居跡

Si-9　完掘状態

東カマド周辺　遺物出土状態

北カマド完掘状態

北カマド

Si-10　カマド

Si-10　完掘状態

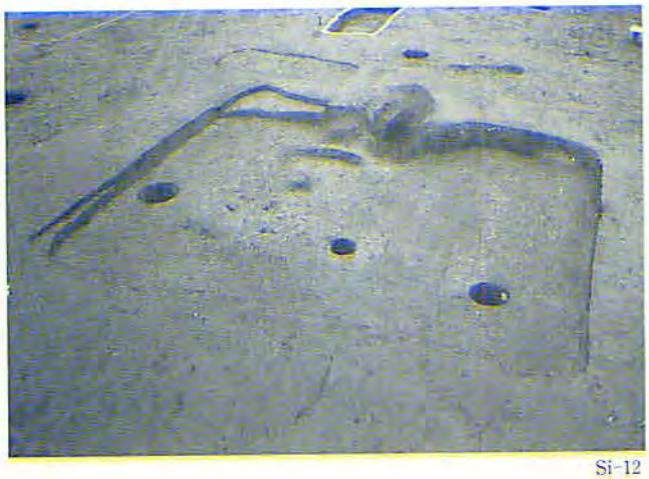
図版 7　丸山遺跡第 9 ・10号住居跡

図版 8

Si-11　完掘状態

Si-11　カマド

Si-11　砥石出土状態



Si-12

Si-12　完掘状態

Si-12　遺物出土状態

Si-12　カマド

図版 8　丸山遺跡第11・12号住居跡

SB1　柱穴土層断面

SB1

SB1とSB2

SB3　柱穴　遺物出土状態

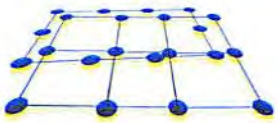
SB2,SB3

SB4,SB5

図版 9　丸山遺跡第 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 号堀立柱建物跡

図版10

SB6,SB7

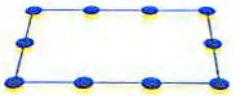


SB6　柱穴

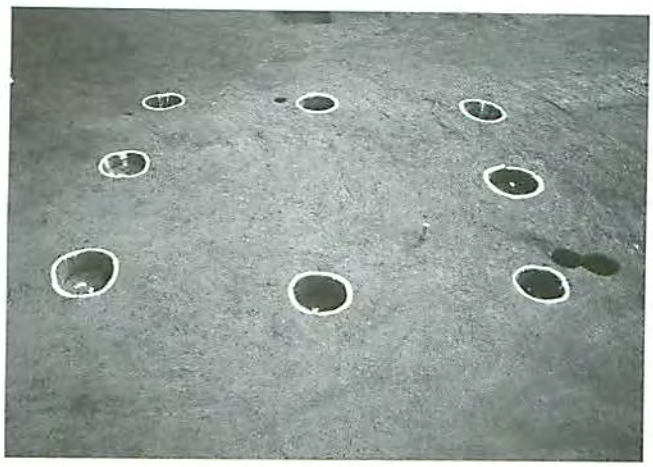
SB8

SB5　柱穴遺物出土状態

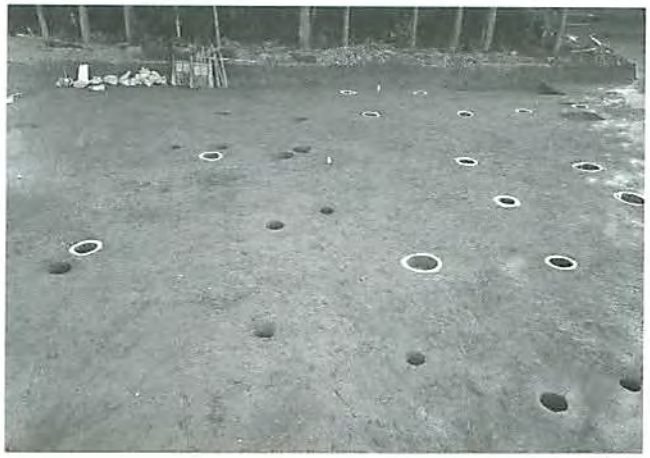
SB9



図版10　丸山遺跡第6・7・8・9号堀立柱建物跡



SB-10

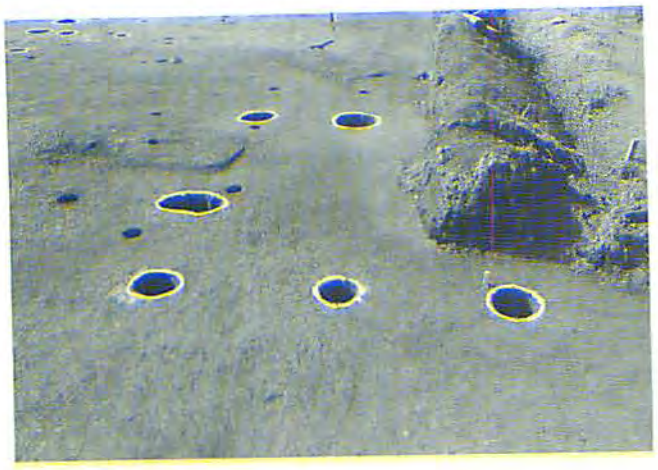


SB-11

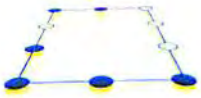
SB-12

図版11　丸山遺跡第10・11・12号堀立柱建物跡

図版12



SB-13



SB9～SB13

SB1～SB5

SB6～SB13

SB9～SB13

SB1～SB11

図版12　丸山遺跡第１～13号堀立柱建物跡

1-2号炉跡

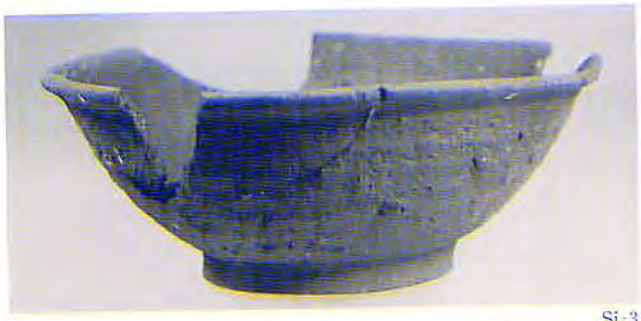
SK

道路状遺構

地震断層面の土層標本採取作業、一連

図版13　丸山遺跡第１・２号炉跡

図版14



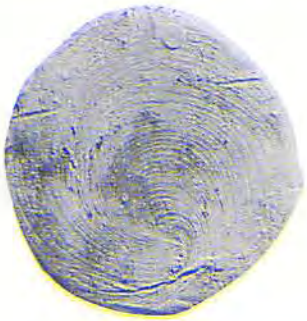
Si-3

Si-2

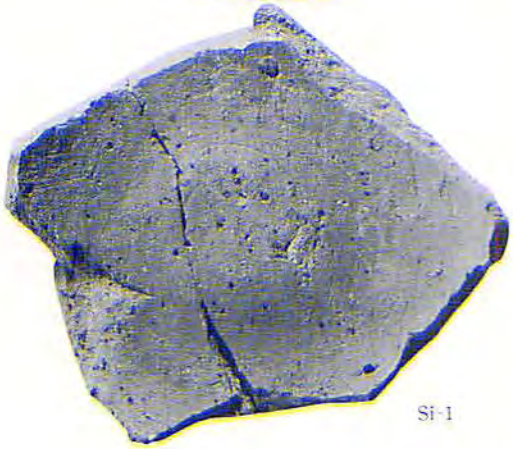
Si-3

Si3-76

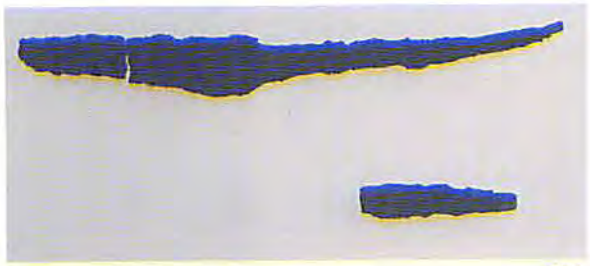
Si-3,29



Si-2
Si-3

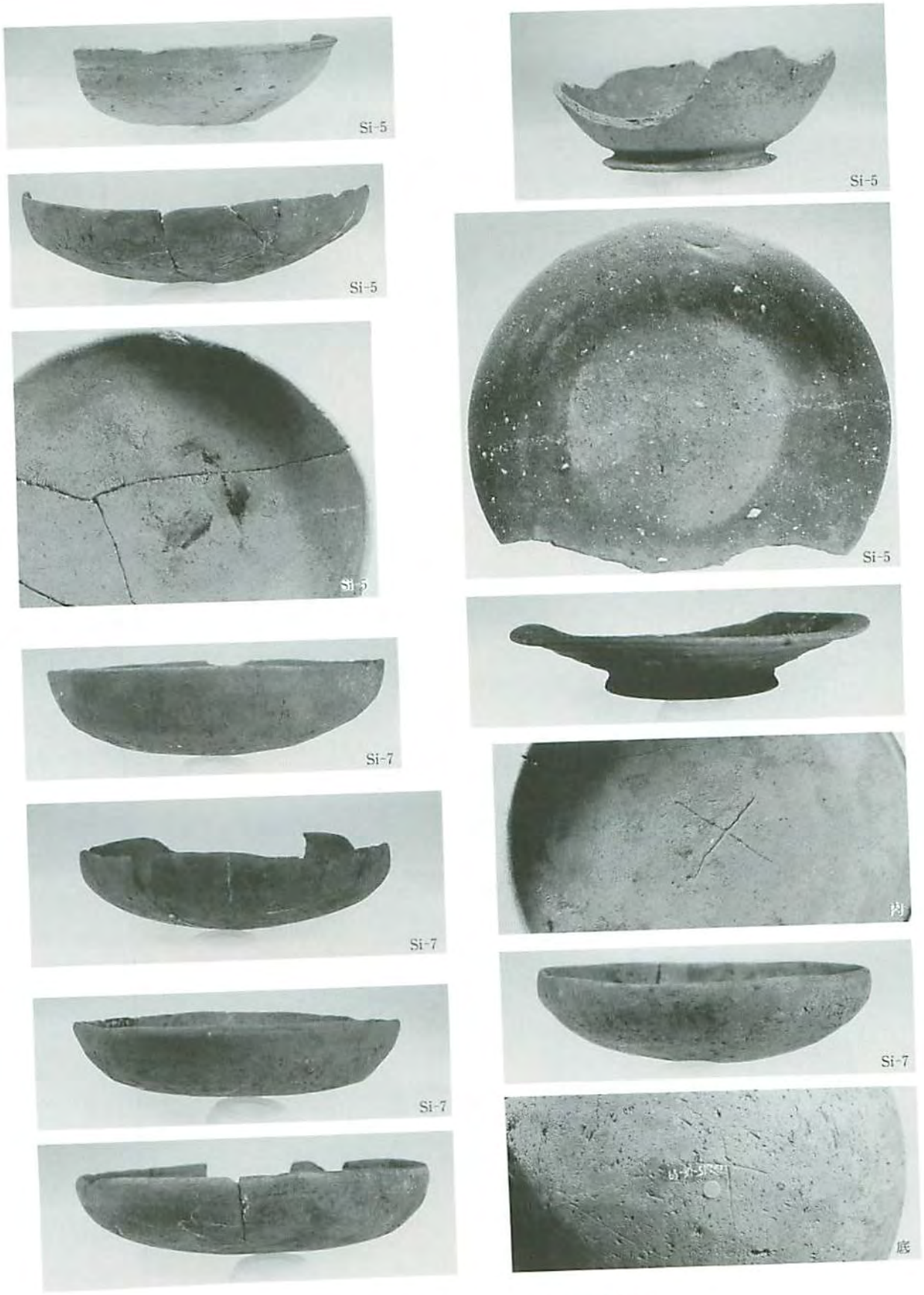


Si-1



Si-3

図版14　丸山遺跡第１・２・３号住居跡出土土器・鉄製品



図版15　丸山遺跡第５・６・７号住居跡出土土器

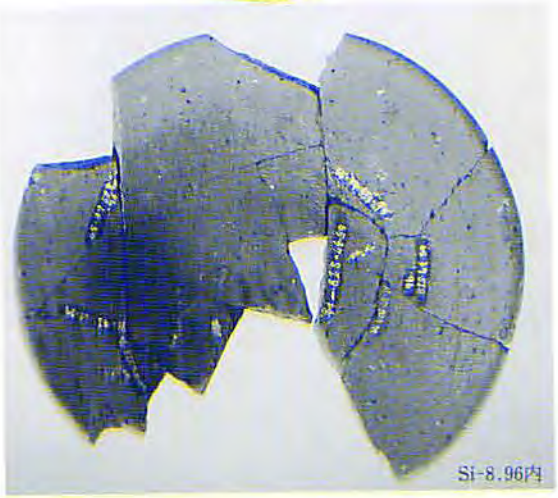
図版16

Si-7.フク土

Si-7-4

Si-7.墨書

Si-8

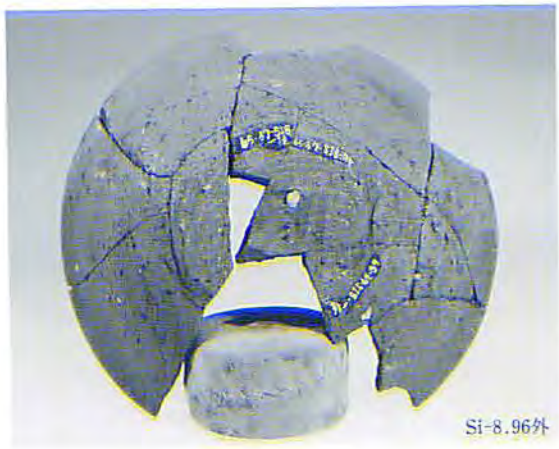

Si-8.96内

Si-8

Si-8.96

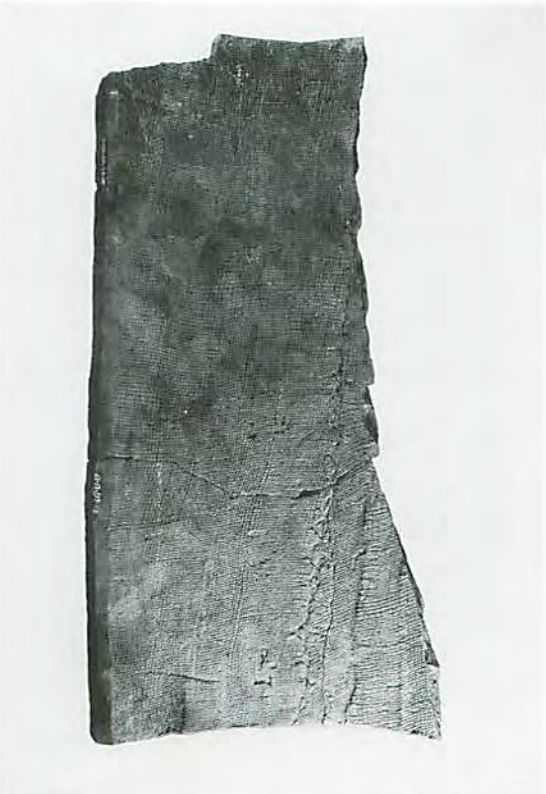
Si-8

Si-8
墨書


Si-8.96外

図版16　丸山遺跡第７・８・９号住居跡出土土器

Si-7.カマド出土平瓦



Si-7.カマド出土平凡

図版17　丸山遺跡第７号住居跡出土瓦

図版18

Si-7　カマド丸瓦

Si-7　平瓦凹面布目痕

Si-7　丸瓦内面布目痕

図版18　丸山遺跡第７号住居跡出土瓦

Si-9

Si9-9

Si-9

Si9-7

Si9-12

Si-9

Si-9

Si-11-1

Si-11

図版19　丸山遺跡第９・10・11号住居跡出土遺物

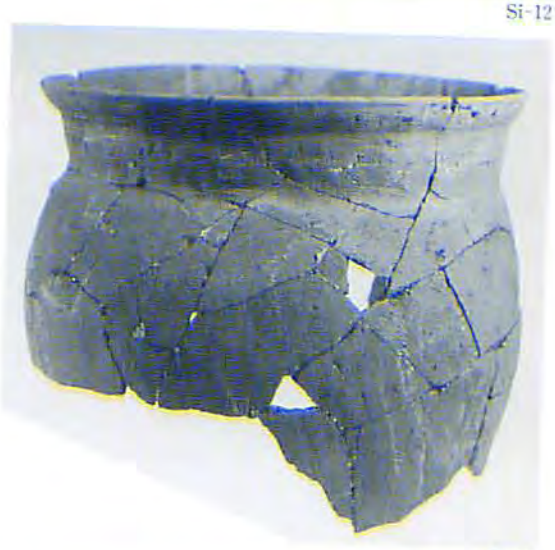
Si-12

Si-12

Si-12

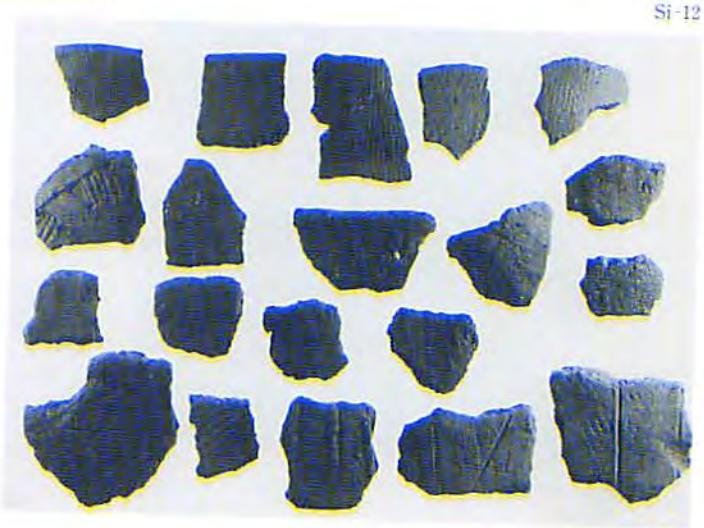
Si-12

Si-12



Si-12

墨曜石片



縄文土器

縄文時代石器

図版20　丸山遺跡第12号住居跡

1996年（平成８年）３月25日発行

江南町文化財調査報告　第11集

丸　山　遺　跡

社会福祉施設「江南療護園」建設にかかる
埋　蔵　文　化　財　発　掘　調　査　報　告

編集・発行　江南町教育委員会
〒360-01　埼玉県大里郡江南町中央１丁目１番地
TEL　0485（36）1521（代表）
印刷・製本　朝日印刷工業株式会社